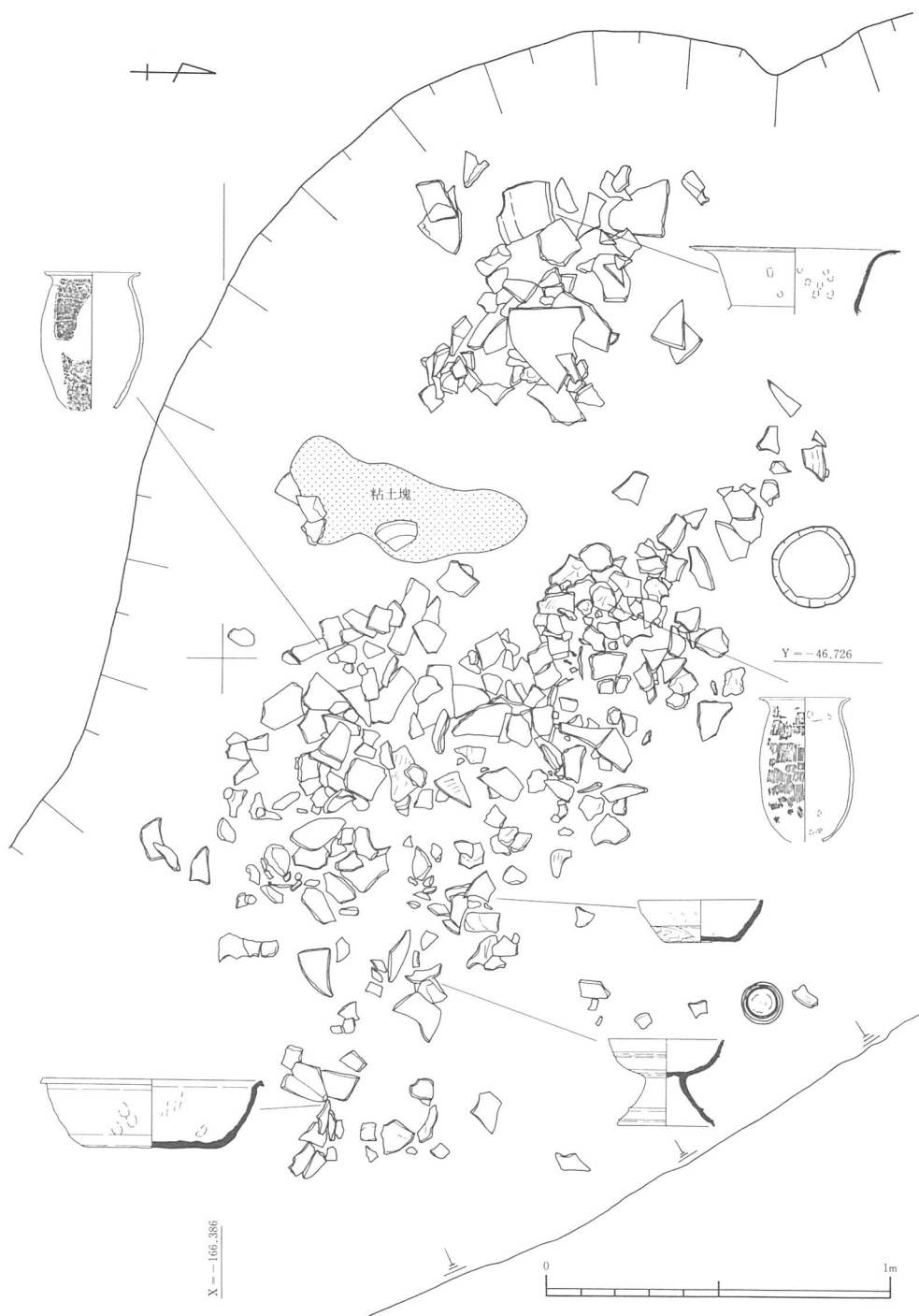
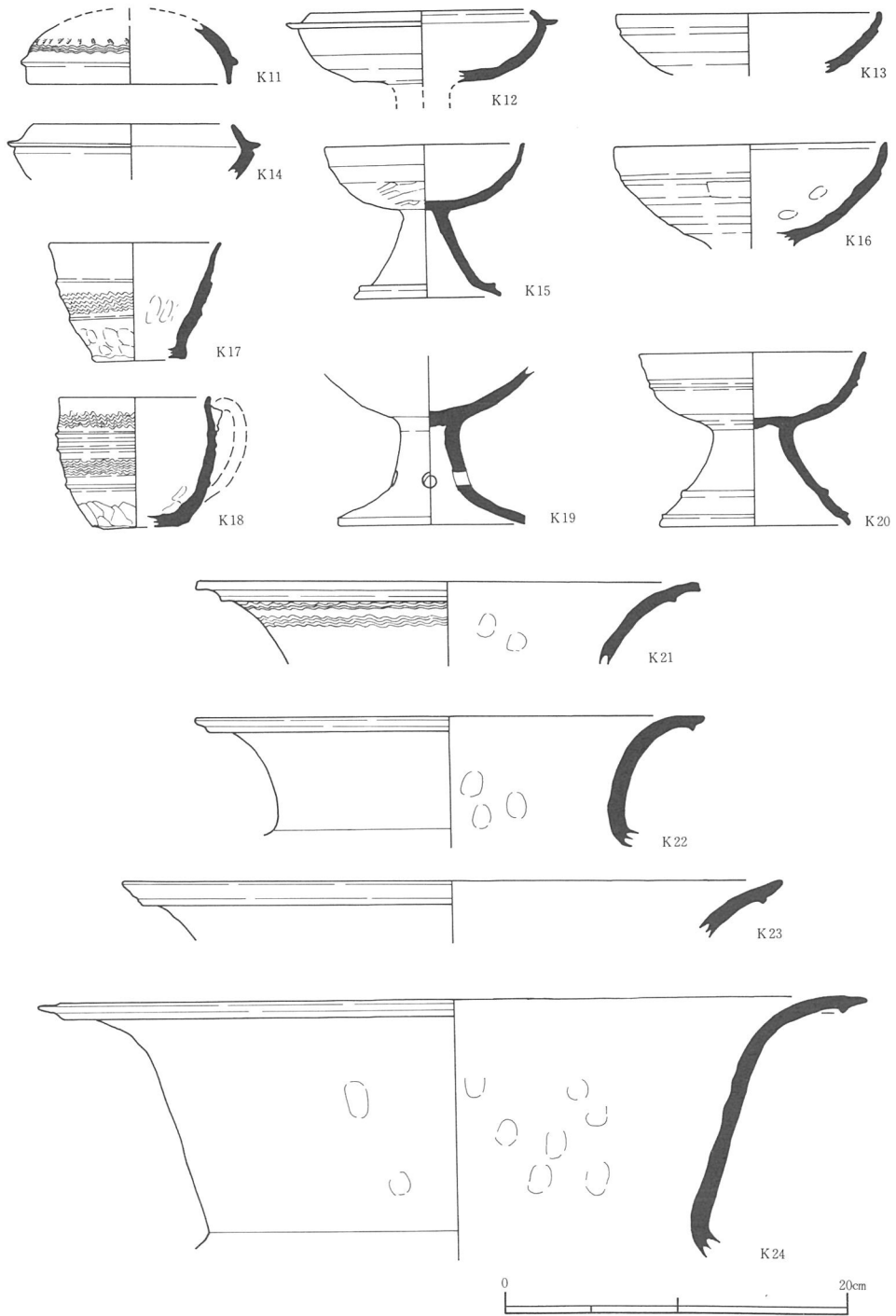


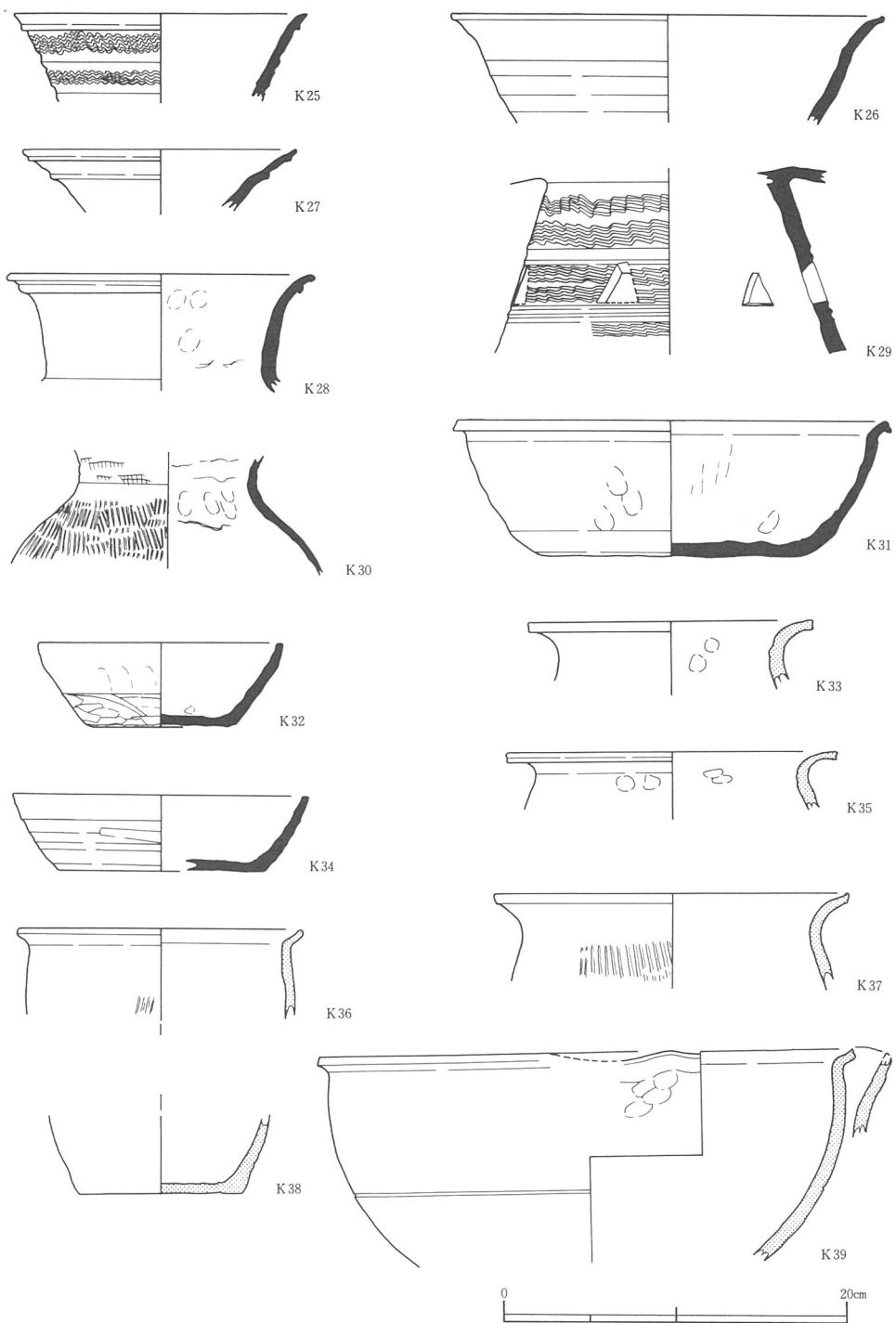
第35図 296-O O平面・断面図 (1/40)



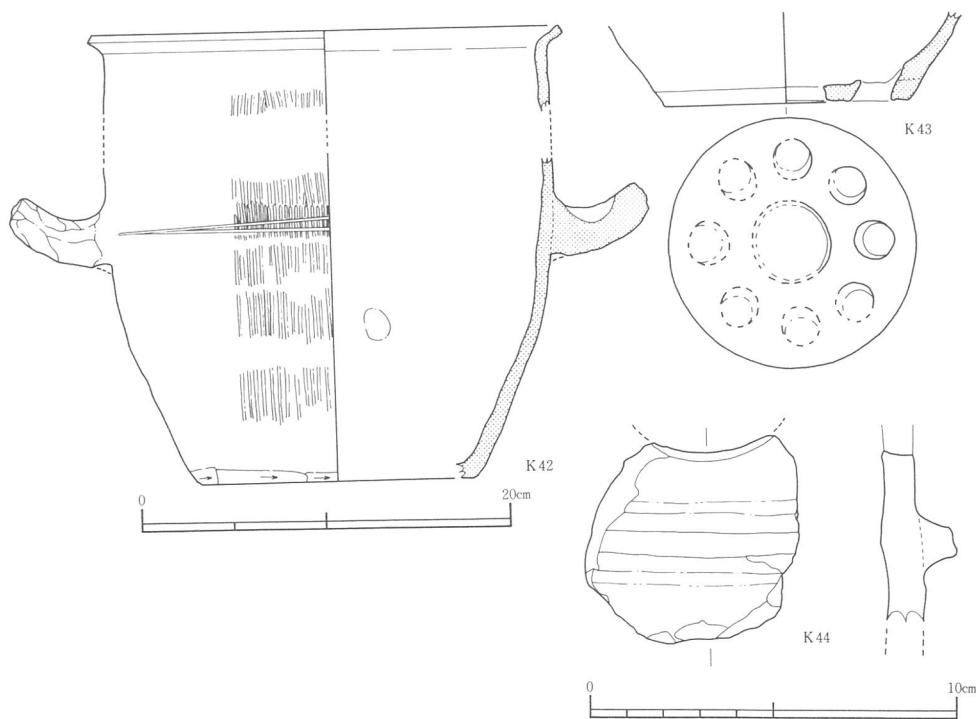
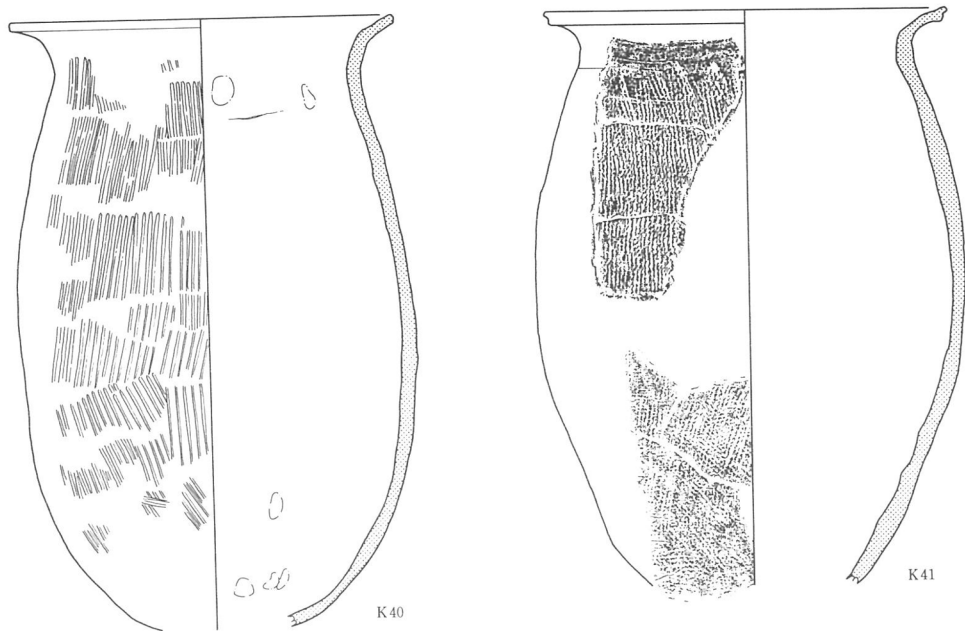
第36図 296-O O遺物出土状態 (1/20)



第37図 296-O O出土遺物1 (1/4)



第38図 296-O O出土遺物 2 (1/4)

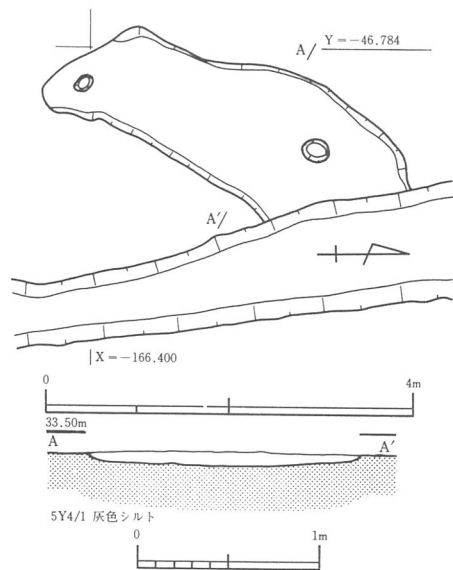


第39図 296-〇〇出土遺物3 (1/4、1/2)

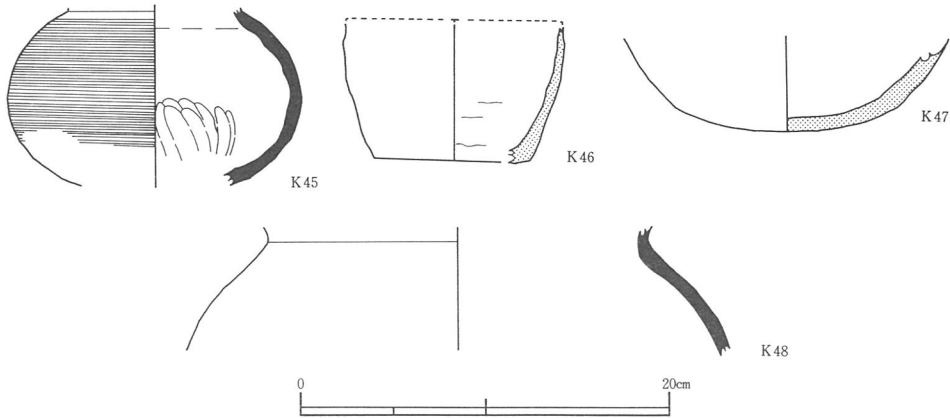
て長胴であると考えられる。口縁端部は例外なく面取りがされている。K37の器面は平行タタキによる調整、内面は丁寧なナデによって仕上げられている。胎土は須恵器に近く、焼成も硬質である。甕K40は長胴甕で体部は平行タタキによる調整。頸部付近にもその痕跡が残り、口縁部は叩き出しているとみられる。タタキは基本的には縦方向であるが、体部下半ではやや斜め方向となる。内面は剝離のため不詳。胎土には砂粒を多く含み、色調は橙色である。K41は口縁端部が凹面を呈する。体部は縄蓆文による調整で基本的には縄目は縦方向であるが、下半では一部斜め方向もある。底部は当初から欠落しているのかどうかは不明である。あるいは長胴タイプの甕の可能性も考えられる。甕の内面はナデによって丁寧に仕上げられている。胎土はK40に比べて良好といえる。色調は暗灰黄色である。甕は2点出土している。K42は口縁部が僅かに外反する。把手は体部中央部に位置し貼付けによる装着法とみられ、上面には切り込みもみられる。体部は平行タタキによる調整で2条の沈線が巡る。体部～底部にかけてはヘラケズリによる調整が顕著である。甕K43は中央に大きな孔を穿ち、外側に8個の孔を配する多孔式である。

この遺構の時期は、須恵器から見てI型式1段階の範疇で捉えて大過ないと考えられる。111-O S (第31・40・41図、図版20参照)

K18Y Eに位置する。溝の方向は北東～南西である。丘陵上の他の古墳時代の溝とは方向が異なる。検出長は約3m、幅1～1.5m、深さ16cmで断面はU字形である。埋土は5Y4/1灰色シルトである。かなりの削平をうけていると思われる。古墳時代後期の溝57-O Sと重複し、新旧関係は57-O Sが新しい。遺物は溝底から須恵器、韓式系土器が出土した。須恵器の壺K45は体部にカキメを持つ。内面には縦方向の調整痕が認められる。甕の可能性もある。韓式系土器の平底鉢K46は口縁部～体部上半は欠落している。器表面は剝離のため調整は不明であるが、底部にゲタの痕跡をわずかにとどめている。胎土中に砂粒を多く含んでいる。壺K48も剝離のため、調整は不明である。器面は黒色を呈する。底部K47は壺K48と同一個体の可能性もある。形



第40図 111-O S 平面(1/80)・断面(1/40)図



第41図 111-O S出土遺物 (1/4)

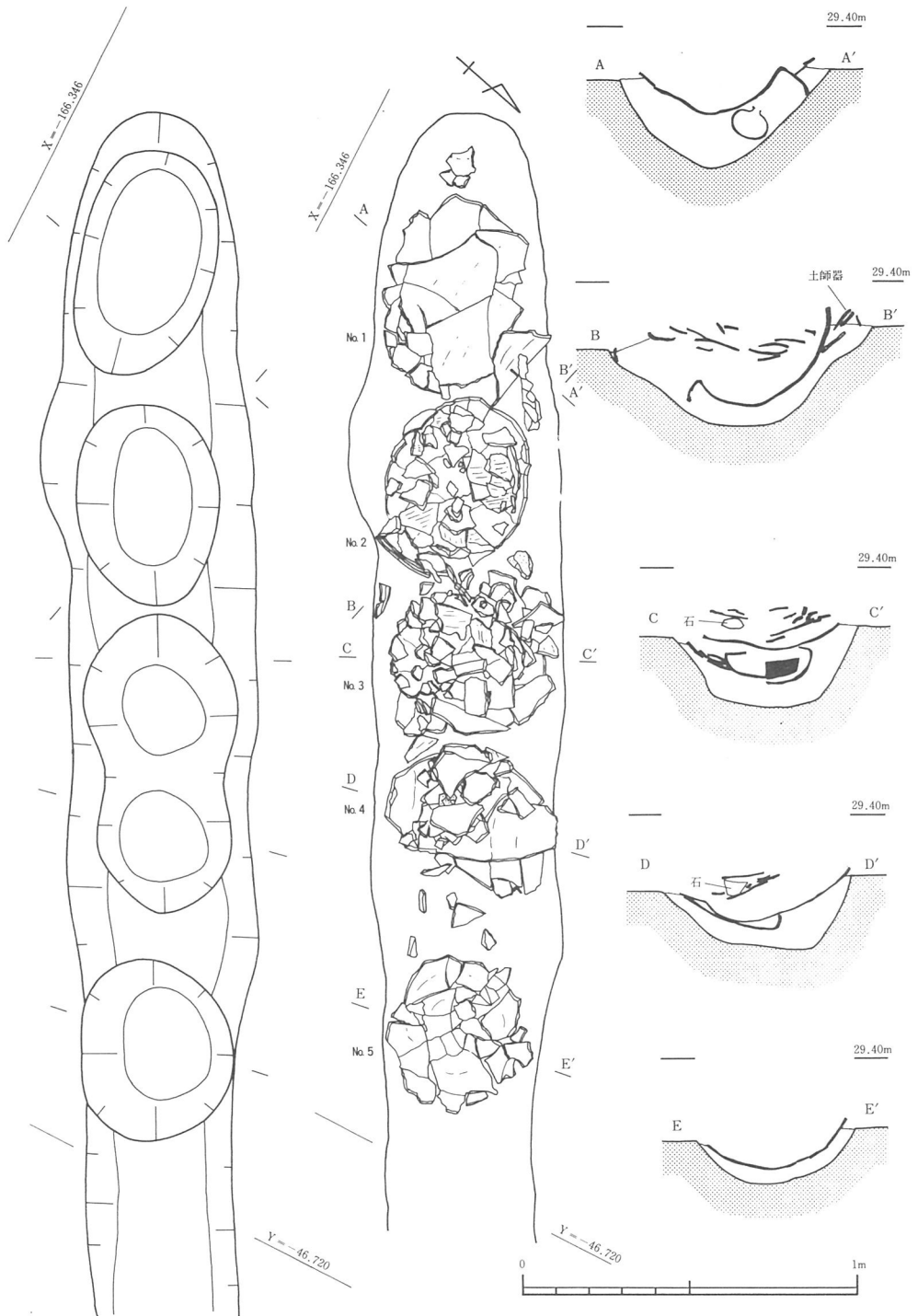
状はやや平底気味である。

この遺構の時期は須恵器から I 型式 2 段階までの時期と考えられる。丘陵上の溝の中では一番古い時期を示す遺構である。

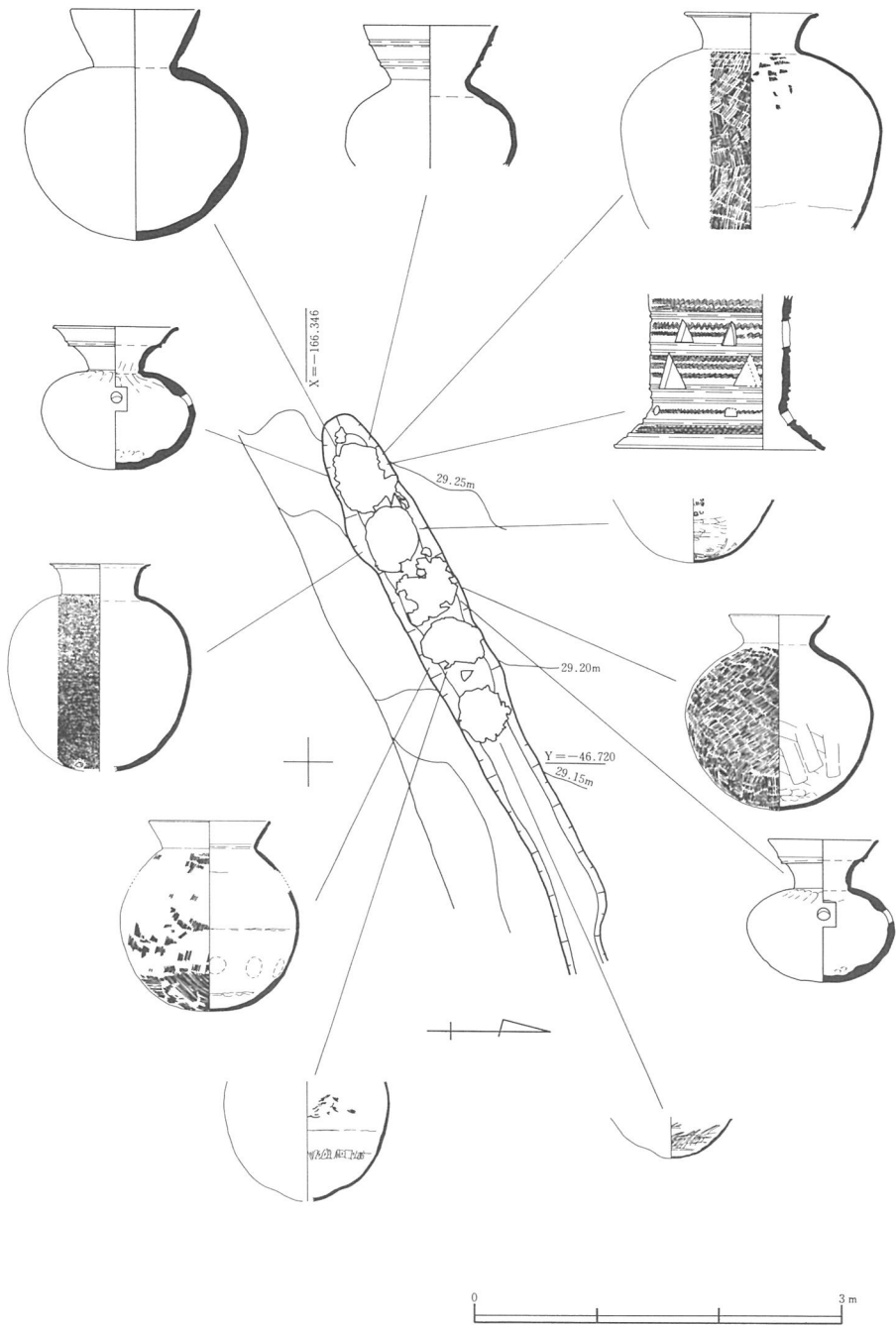
601-O S (第31・42~47図、図版21~23・80B・81参照)

K18 I T~K18 H Vにかけて西~東に位置する。完形ではないが甕が並んだ状態で検出された特徴的な溝である。検出長は10.3m、幅0.3~0.6m、深さ0.3mで、断面は、基本的に逆台形であるが、個々の甕にはその下の部分を掘りくぼめて埋め込んだ状況が観察できる。また、東側は浅い溝で甕は埋まっていなかった。なお個々の重複関係は明瞭でなかった。また、遺構の高さは、検出面の高さで西側が0.3m、溝の底で西側が5 cm高いという結果になっている。埋土は2.5 Y 5/1黄灰色細砂質土である。須恵器の甕は5個体分並んで出土した。これらの甕は並べて据えられた状態であったと考えられ、後世の耕作などによりかなり削平されたと考えられる。遺構面上部包含層に甕の破片が多く含まれており、接合関係も広範囲にわたって確認された。また、完全に図化できたものは2個体、口縁から胴部までのもの1個体、底部付近のみのもの2個体である。西側から順にNo. 1~5として出土状況を述べることにする。

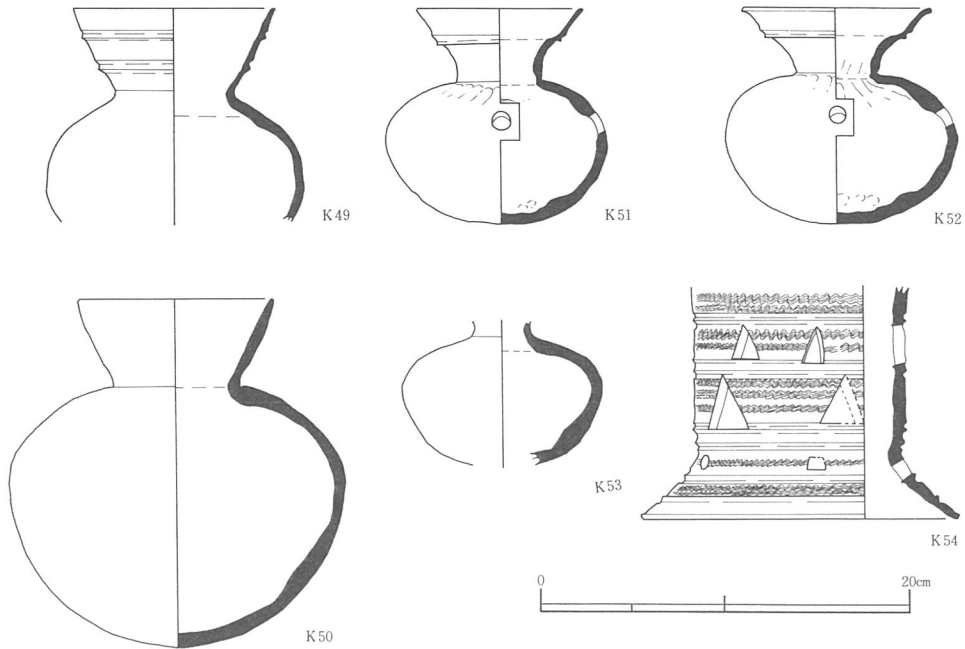
No. 1の甕K58は、口縁部をほぼ北に向けて真横になった状態で出土した。口縁部から胴部までが半円形に残っており、底部付近はなかった。口縁部付近には須恵器の生焼けと思われる直口壺の破片があった。この壺は、その形態から布留期の壺の模倣を類推させる。また、この甕の下には完形の甕K52が口縁部を上にして一部甕に接するように入れて納められていた。甕、甕内からはともに特記すべきものは出土しなかった。



第42図 601-O S平面・断面図 (1/20)



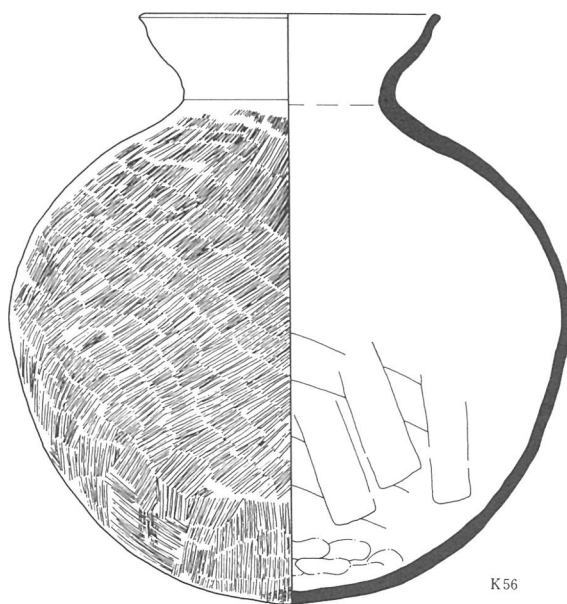
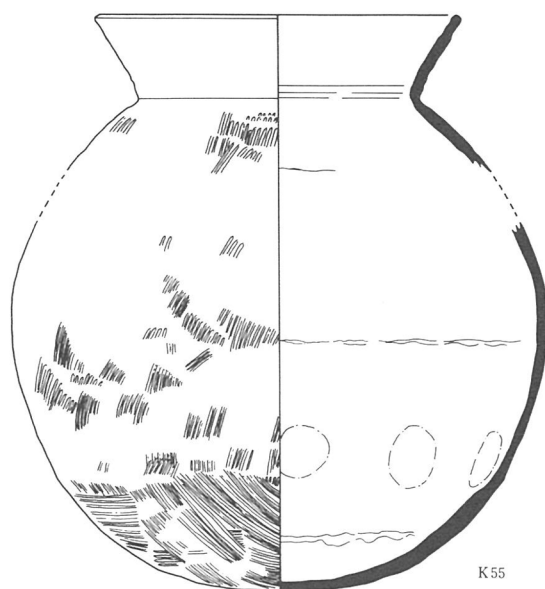
第43図 601-O S 遺物出土状態 (1/60)



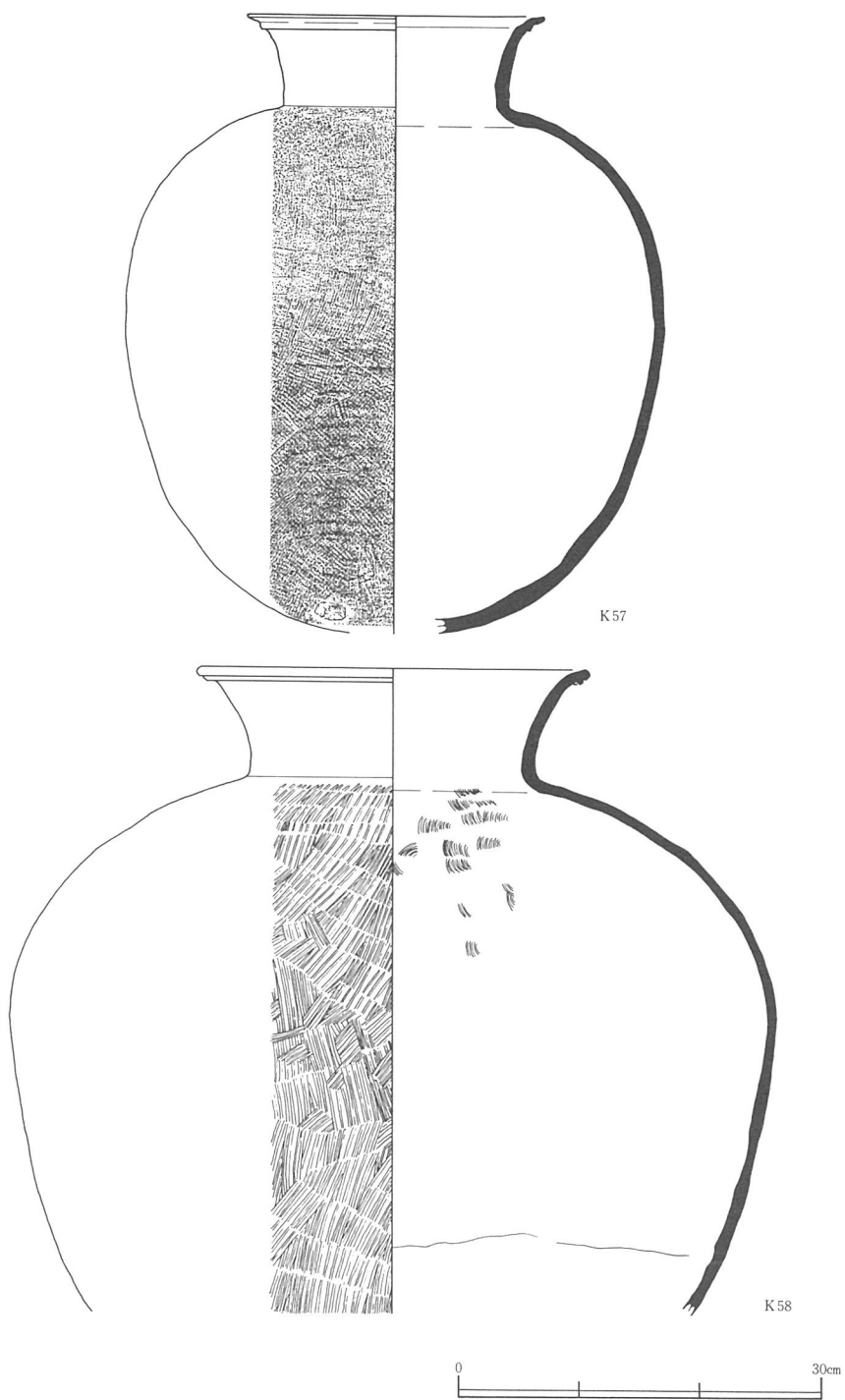
第44図 601-O S出土遺物1 (1/4)

No. 2 の甕K57は口縁部をほぼ東に向けてNo. 1と同様に横になった状態で出土した。但し口縁部はやや下を向いている。この甕は、No. 1に比べて一回り小さいため削平による影響が少なく半分以上が残っており、埋められた状況に最も近いものである。また上側にあたる胴部が甕の内側に潰れて落ち込んだ様子が分かる。この甕からも特記すべきものは出ていない。胎土・焼成とも良好で、底部には格子タタキが認められる。

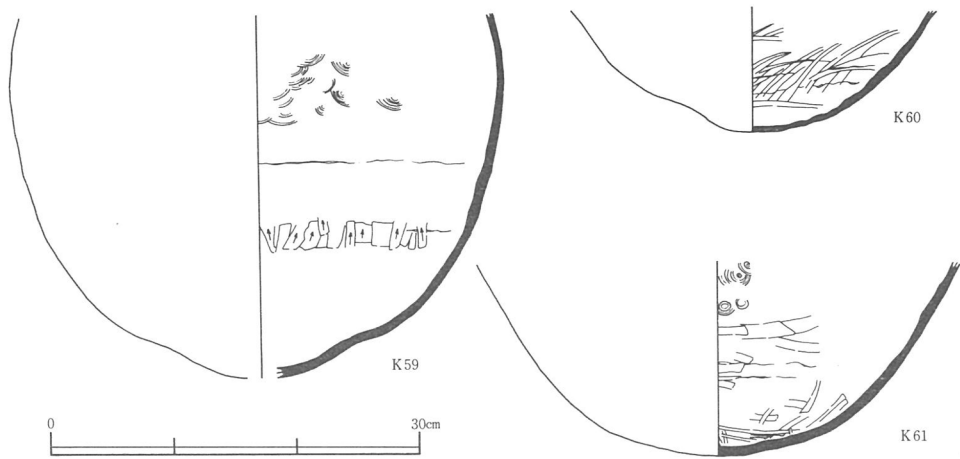
No. 3 の甕K61は、底部の一部のみが残っており恐らく正立した状況で埋められた可能性が高い。この甕は底部付近のみが残存するためその大きさなどは不明であるが、焼成・胎土とも良好である。この甕の下にはもう1個体の甕K56が出土している。これは、この溝の中から出土した甕の中では最も小さく、口縁はこの時期の土師器の甕口縁を思わせるように内湾気味に立ち上がり、口縁端部を面取りしている。胎土は細かい砂粒が多く、器壁は薄く、丸い体部外面は螺旋状にタタキが行われている。この甕の下層には生焼けの須恵器甕K55の破片が重なっていた。この甕は、全体のプロポーシヨンは土師器に似ているが、体部外面は平行タタキが施されており、内面には無文の当て具痕跡も確認できるため須恵器と判断した。全体の色調は明褐色を呈するが外面の一部に赤色顔料と思われる付着物があり、底部付近には煤が付着している。また断面図では表現できなかったが、完形の甕K



第45図 601-O S 出土遺物 2 (1/4)



第46図 601-O S 出土遺物 3 (1/6)



第47図 601-O S出土遺物4 (1/6)

51がNo. 1と同様に埋まっていた。甕内には拳大の石が数個含まれていた。

No. 4の甕K59は、胴部から底部付近にかけて残存していた。残存していた破片からするところの甕も横たわっていたと考えられる。この甕の下には、No. 3の下に埋められていた生焼けの須恵器の甕の一部が重なっていた。

No. 5の甕K60は底部だけが残っていた。破片の残り方から正立した状況で置かれたと考えられる。この甕の残りが一番悪く、埋められた状況は不明な点が多い。

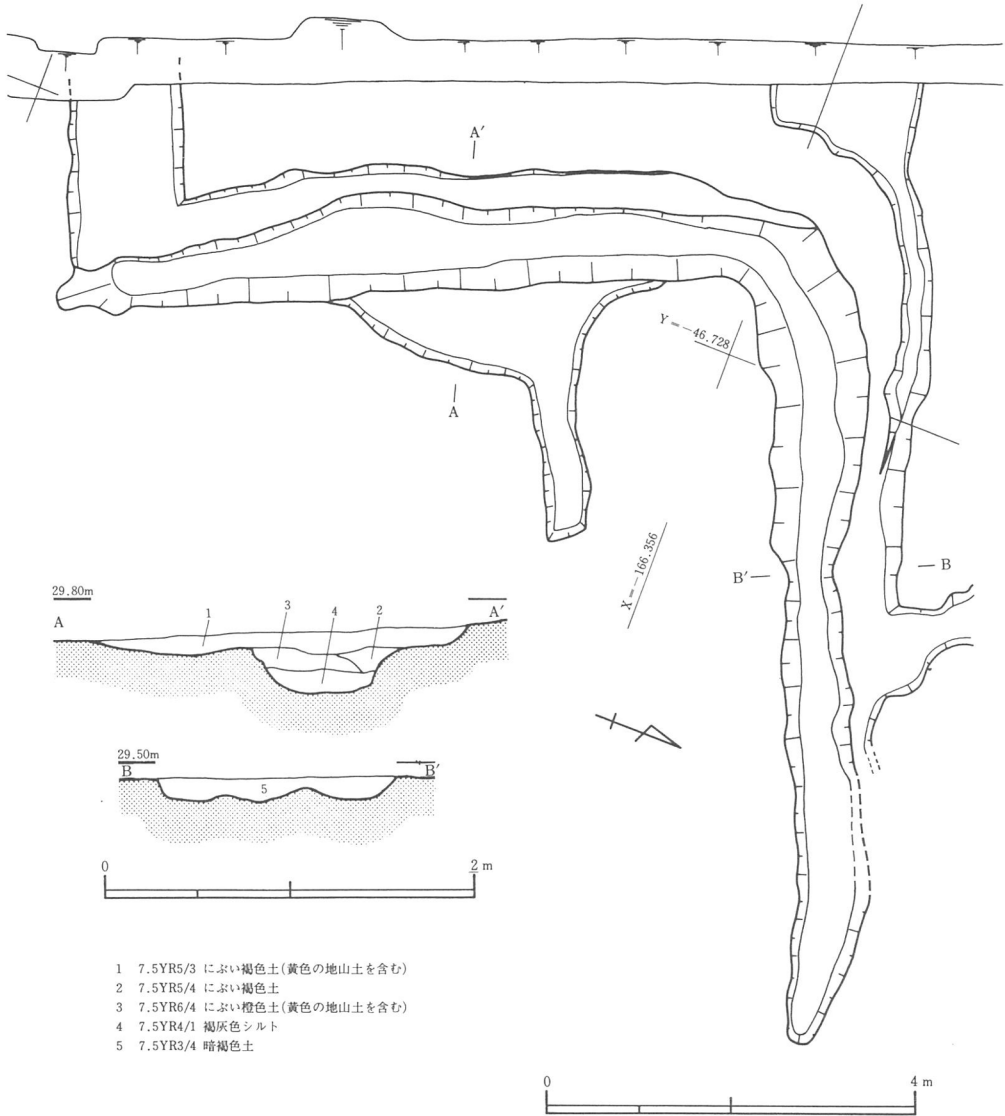
この他の出土遺物は、須恵器の直口壺、甕、器台、他に器種不明片がある。直口壺K49は、口縁部に2段の凸帯が回り、焼成・胎土ともに良い。直口壺K50は生焼けのものである。その形状は布留式土器の模倣を思わせる。K53は、口縁部が欠けており、穿孔箇所も確認できないが甕と考えている。器台K54は、スカシの種類に特徴があり、最下部のスカシは丸と四角があり、その上部には大きさの違う三角形のスカシが位置をずらして2段に配置している。

この遺構の時期は、出土遺物からI型式1段階頃と考えられる。

257-O S (第31・48・49図、図版24・82A参照)

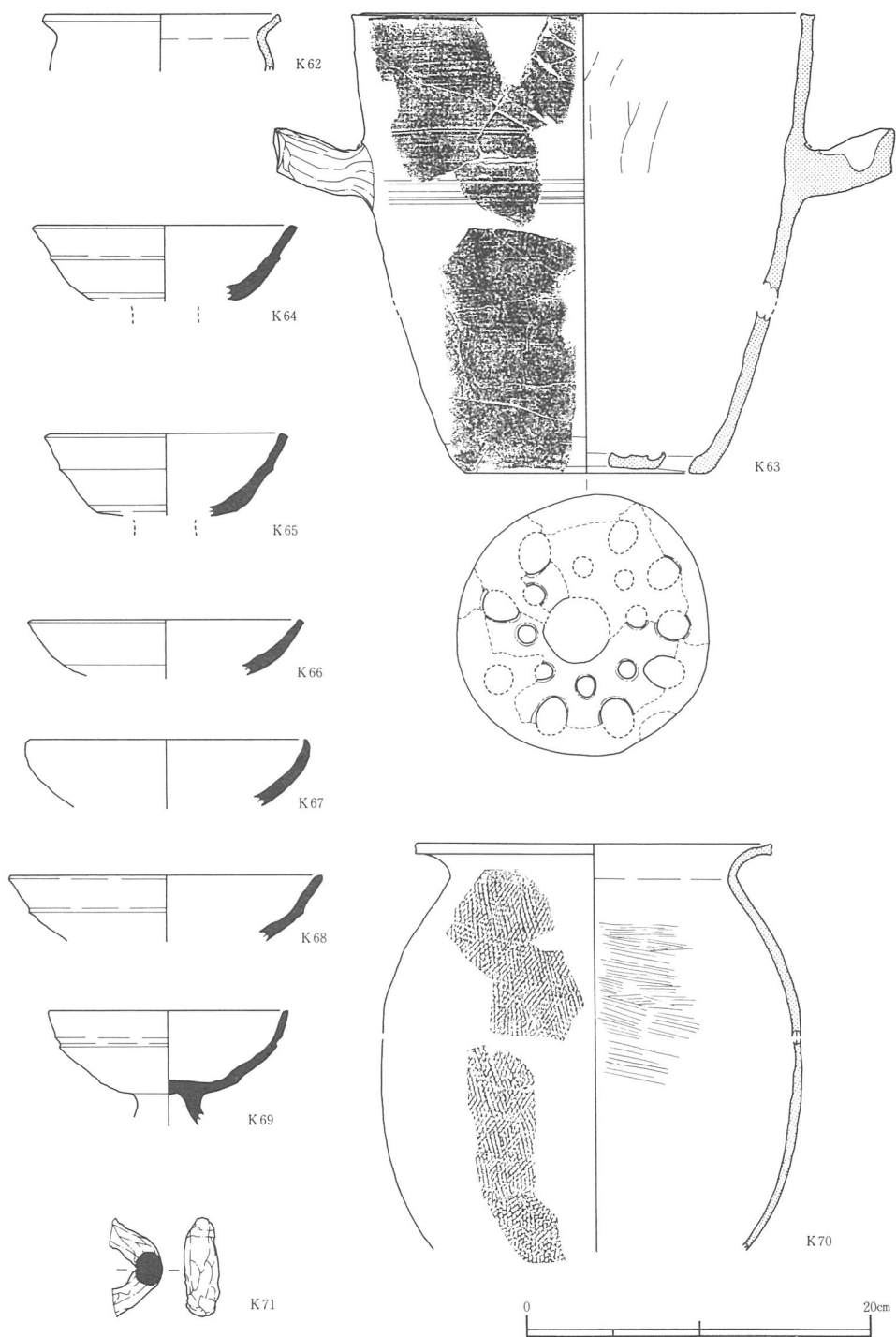
K18P R～P S～N R～N Tにかけて、西から北へ、北から東へ各90°程度ずつ2回屈曲して位置する。傾斜面の高いほうである西端は調査区外に延びており、全体の規模は不明であるが、検出長は約18mを測る。幅は0.5～1.2m、深さは0.1～0.3mである。

この溝の断面はK18P S～K18N R付近では2段掘りのように見える部分もある。しかし、この溝の付近は不明瞭な浅い溝状のくぼみが多くあり、上段部分も後世の水田耕作等



第48図 257-O S平面 (1/80) ・断面 (1/40) 図

の影響による上からのしみ込み状の部分を検出した可能性がある。そのため、この溝が2段掘りされたものであるとは断言し難い。同様にK18OS付近で、この溝から東側に延びている溝状のものも浅い不明瞭なもので、この溝との関係は不明である。溝底は、南西側が42.5cm高い。埋土は4層に分けられ、上から1、2層はにぶい褐色土、3層はにぶい橙褐色土、4層は褐灰色シルトである。埋土の状況から、流水、滞水の状況は明瞭でない。東



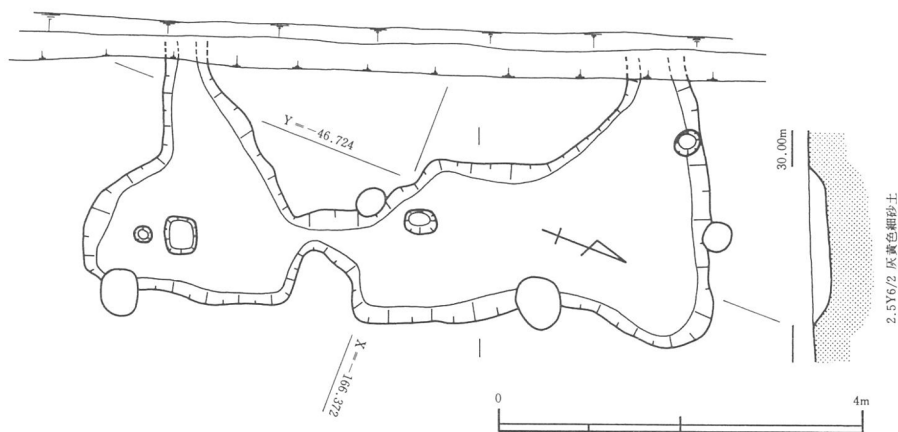
第49图 257-O S 出土遺物 (1/4)

端近くでは、現代の井戸によって一部分が破壊されている。

出土遺物は、韓式系土器の平底鉢・甕、須恵器の無蓋高杯・把手付碗・甌、他に器種不明片がある。遺物の多くは、4層からまとめて出土している。韓式系土器の甕K70は、焼成・胎土とも良好で、全体が赤褐色であること以外須恵器と変わらない。また、外面は1本の幅が2mm単位の斜格子タタキを施しており、今回出土した斜格子タタキでは最も細かい。須恵器の甌K64は体部外面はタタキの後、ナデ調整をしている。底部は多孔式のもので、中央に直径4cmの孔があり、その周りに直径1cm程度の孔が巡り、更に外側に長径2cmほどの楕円形の孔が巡っている。無蓋高杯K64～K69も概ね胎土・焼成は良好である。K71は把手付碗の破片で、太く、大きな把手であることから、初期須恵器に入ると思われる。これらの遺物からこの遺構の時期は、I型式1段階の頃と考えている。

190-O S (第31図・50・51図、図版25参照)

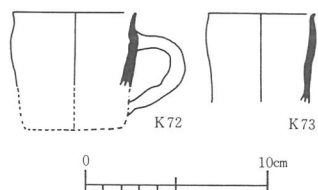
K18R S～K18S Sにかけて北～南に位置する。検出長は約6.8m、幅0.4～1.7m、深さ0.2mで断面は逆台形である。溝底は、比較的なだらかで南側が0.1mほど高い。埋土は灰黄色細砂質土である。埋土の状況から、自然による埋没と考えられる。当初南側を他の



第50図 190-O S平面・断面図 (1/80)

土坑と考えていたが、北側に続く部分に切り合いが見られず、埋土や遺物にも差異が無いことから同一の溝と考えることにした。西側は、2箇所、調査区外に続く。

出土遺物は、須恵器の把手付碗K72・K73が出土している。この遺構の時期は、I型式1段階頃であろう。



第51図 190-O S出土遺物(1/4)

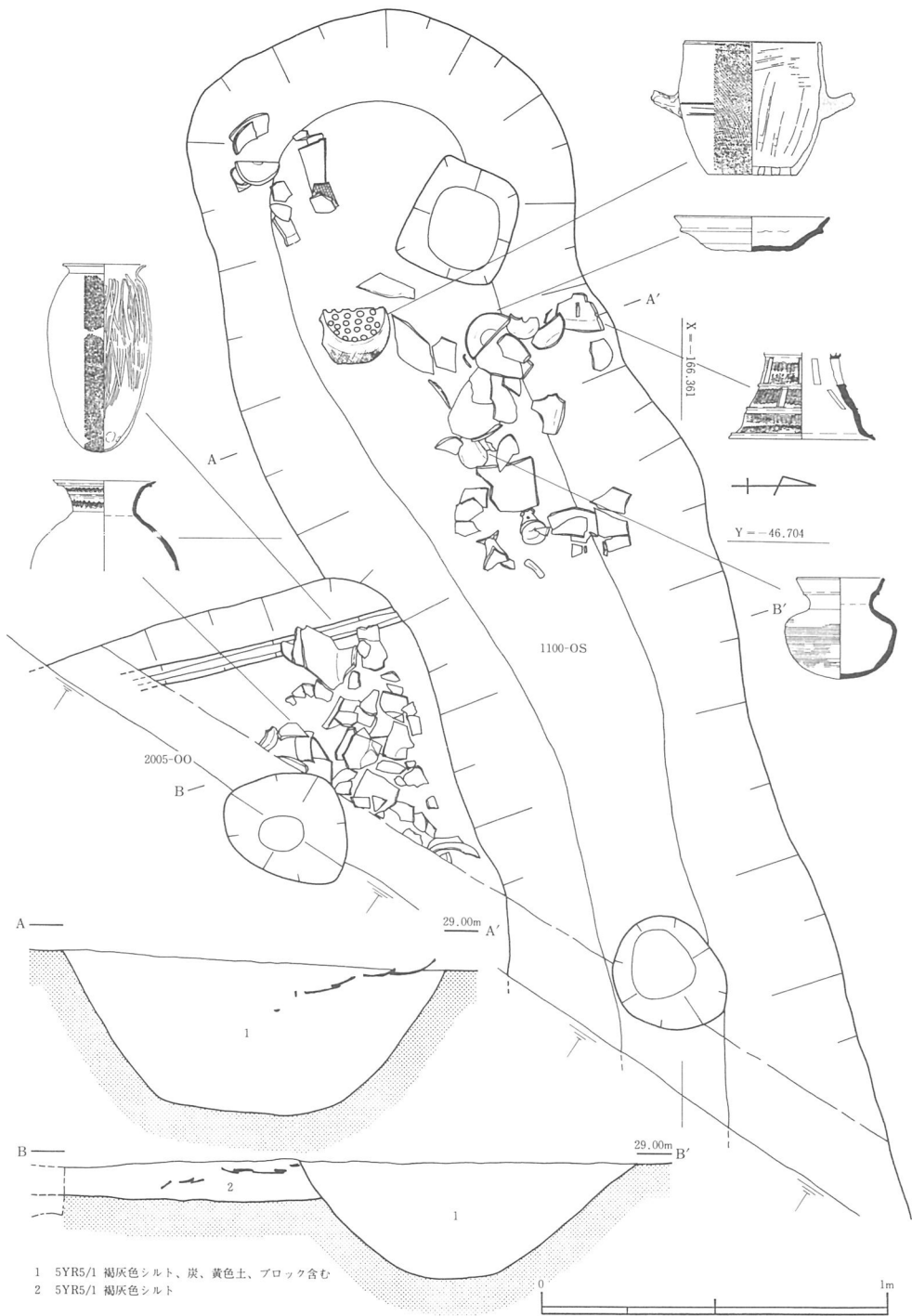
1100-O S (第31・52～56図、図版26・82B・83・84参照)

K18Q X付近に位置する。この溝の方向は北東～南西である。検出長は3.6m、幅1.10～1.15m、深さ0.37mで断面はU字形である。溝の南西側は切れているが、北東側は更に調査区外へと延びる。溝底はほぼ水平である。埋土は5 Y5/1褐灰色シルトで炭、黄色ブロックを含む。

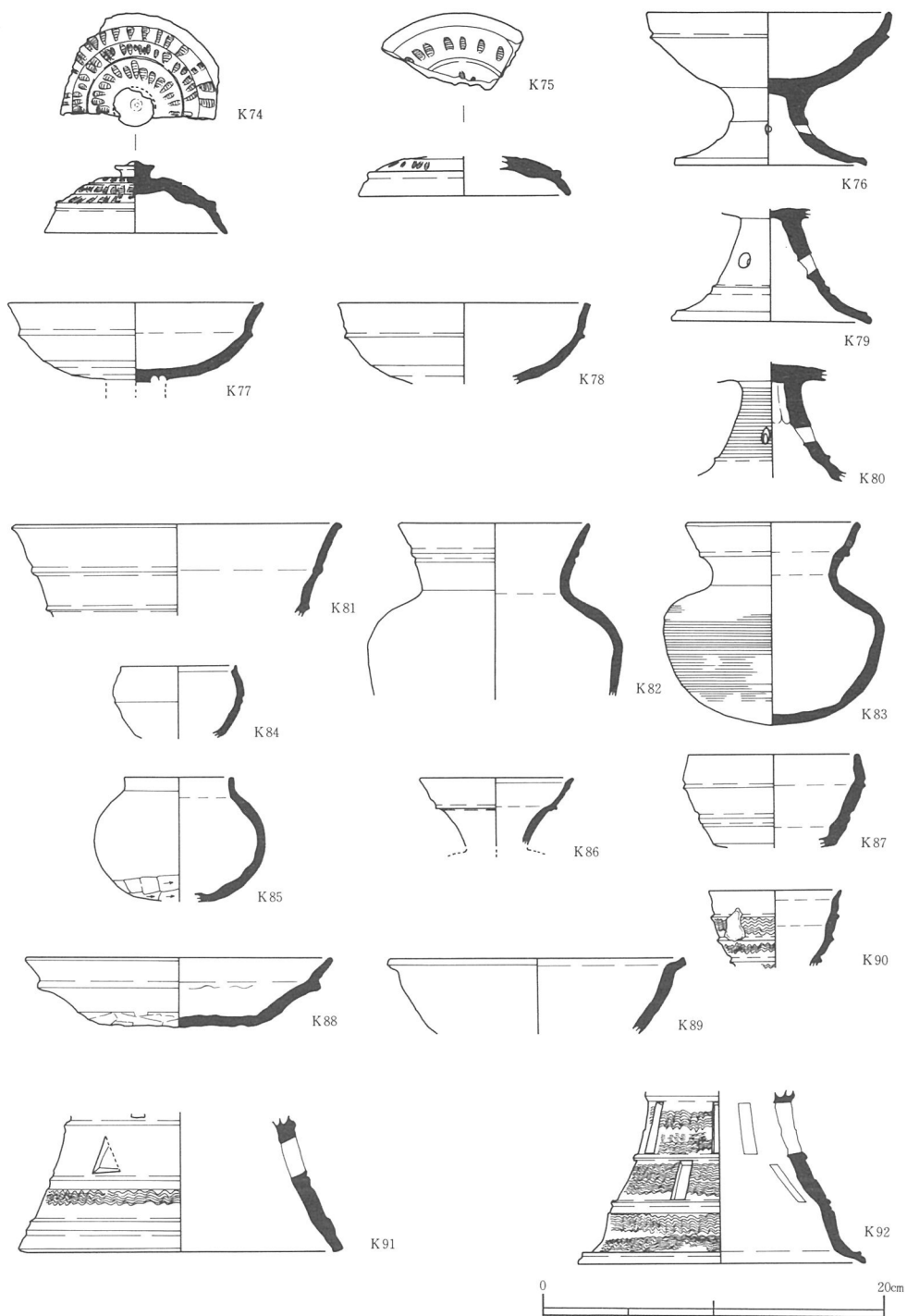
古墳時代の土坑2005-O O、掘立柱建物577-O Bと重複し、577-O Bのピット(1215-O P、2006-O P)に切られている。2005-O Oとの新旧については1100-O Sが新しいが、しかし、遺物から見てほぼ同時期とみられる。土層の観察と遺物の出土状況からは人為的に埋められ、遺物は廃棄された可能性が窺える。

出土遺物は総破片数512点(土師器不明95点含む)で、そのうち須恵器は160点出土し、蓋杯、高杯、壺、短頸壺、甕、椀、鉢、器台の8器種がある。韓式系土器は257点あり平底鉢、甕、甗の3器種がある。蓋K74は口径10.7cm、器高4.2cmの小型品で器壁は厚い。天井部には3段の刺突文を施文し、その間を2本の沈線が巡る。刺突文は単に突き刺すのではなく僅かに横方向に引いているのが特徴といえる。内面には指頭圧痕が顕著に残る。蓋K75は2段分の刺突文が天井部に残り2点とも稜の張りは少ない。高杯は全て無蓋で、K76・K77・K78とも口縁部と体部の境に僅かな稜を持つ。一見して蓋と見間違える形状である。K76の杯部はナデ調整の後、ヘラケズリによって調整されている。内面は不定方向のナデによる調整である。脚部は短く、現存するスカシは2個で本来は4方とみられる。孔は縦長で、菱形に近い形状である。焼成は硬質である。K79は3方スカシで孔の直下に稜を持つ。そのうちK80はカキメ調整が施され、孔はK76同様縦長で菱形に近い形状である。

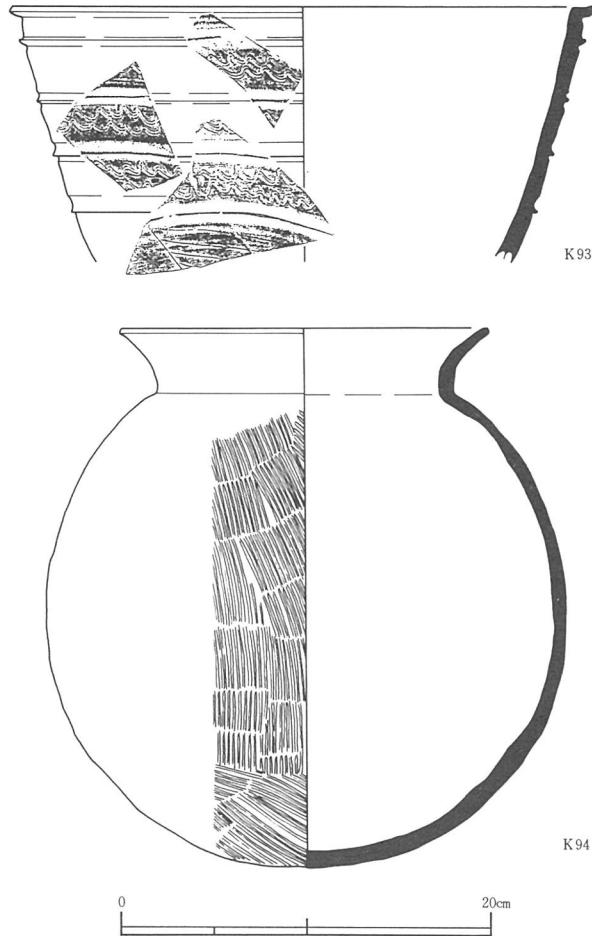
壺は土師器の模倣とみられるK81・K94と直口壺K82、小型壺K83、短頸壺K85がある。そのうちK81は口縁部に2段の凸帯をもち、二重口縁壺の退化形態を示している。K94は形態からいえば、「く」の字に外反する口縁部、球形の胴部は土師器そのものといえるが、体部にみられる平行タキが大きな相違である。焼成は硬質であるが色調はにぶい橙色をしている。直口壺K82は焼成不良の土器で、口縁部には凸帯をもつが施文はない。小型壺K83の口縁部も土師器的で肩の張った体部はカキメで調整されている。短頸壺K85は小型品で体部下半は静止ヘラケズリによる調整痕が残る。K86は甕の口縁部とみられる。器壁は薄くシャープである。椀は3点ありK84・K87は無施文である。K90は3段の太い波状文を施文する。本来は把手が付くと見られる。鉢K88は口径に比べて器高が低い皿状の形



第52図 1100-OS・2005-OO平面・断面図 (1/20)



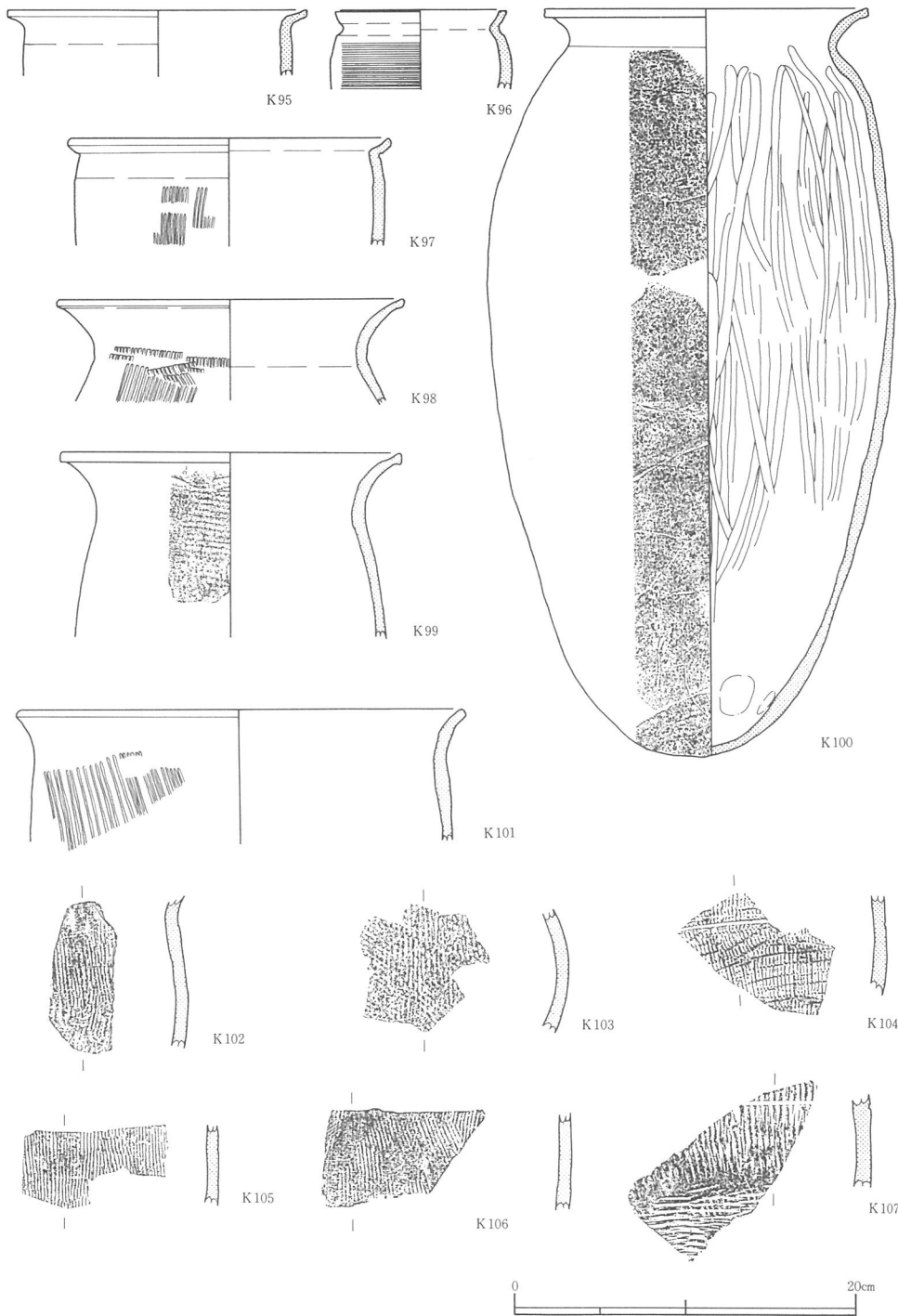
第53図 1100-O S出土遺物1 (1/4)



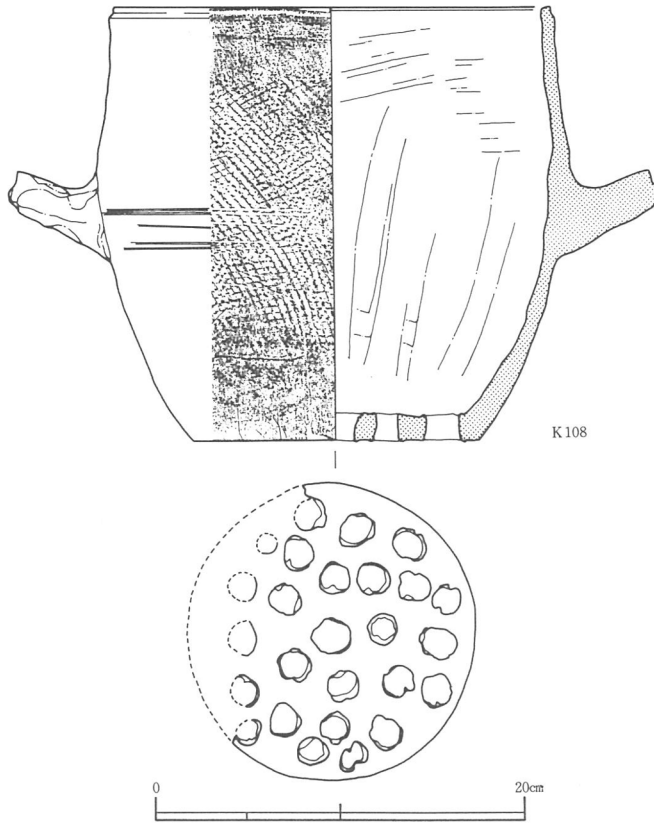
第54図 1100-O S 出土遺物 2 (1/4)

態を持つ。口縁部と体部の境にはやや垂下ぎみの受部がある。定型化以前の杯の一形態として捉えることも可能といえる。鉢K89は丸みを帯びた形状を示す。器台は3点出土している。K93は深い受け部に4段の凸帯を持つ。凸帯のつくりは丁寧で、各凸帯間には2段ずつの波状文が施されている。最下段には鋸歯文も施文されている。波状文は太い。焼成は硬質で胎土も緻密である。色調は暗灰色、断面はセピア色である。K92は筒形器台の脚部で交互の長方形のスカシを特徴としている。焼成は硬質、胎土も緻密で、色調は明青灰色である。K91は三角形と方形（長方形）のスカシを交互に配すると見られる。

韓式系土器の平底鉢は口縁部が短く外反する。体部はK96のようにカキメ調整とK97のような平行タタキによる調整とがある。甕K98・K99は長胴タイプとみられる。K98は口

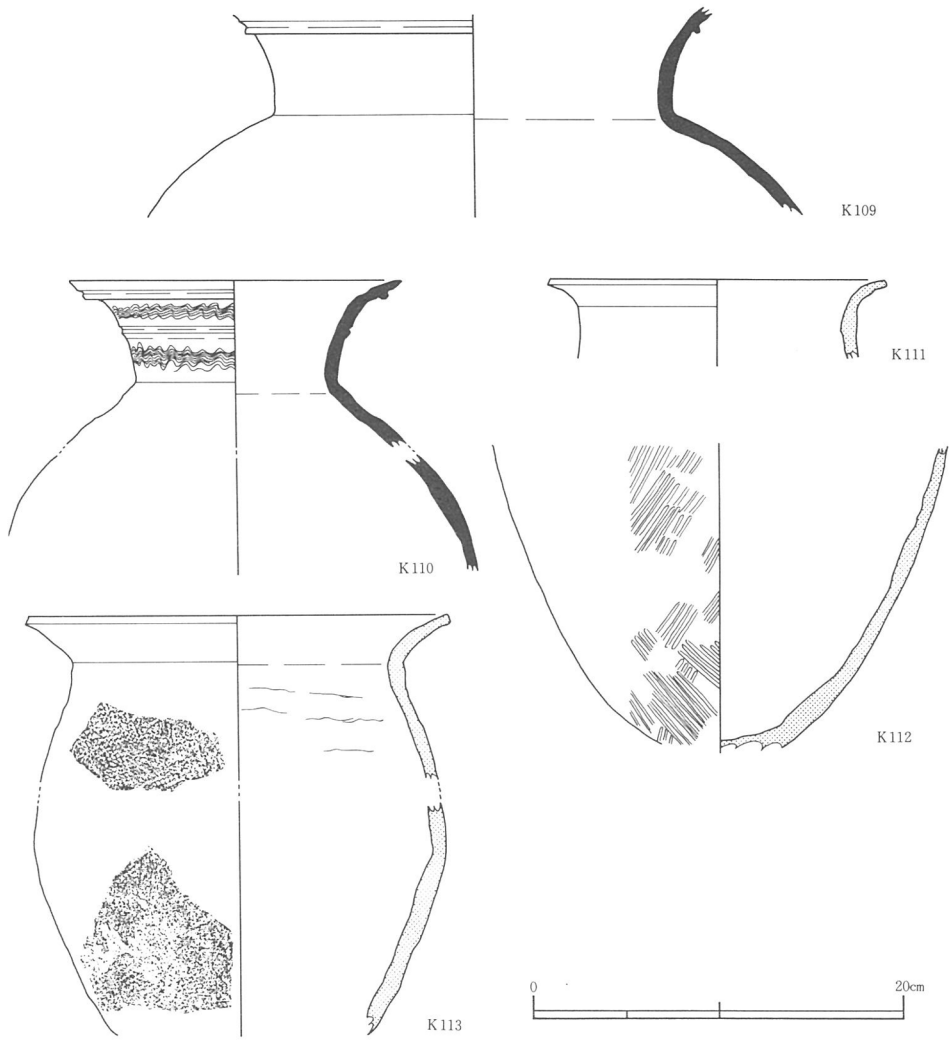


第55図 1100-O S出土遺物 3 (1/4)



第56図 1100-O S 出土遺物 4 (1/4)

縁端部を面取りし、体部は平行タタキによる調整である。内面は丁寧なナデで仕上げている。焼成は硬質で須恵質であるが色調は橙色である。K99は同じように端部を面取りする。体部は格子タタキによる調整である。K100は口径18.6cm、器高43.5cmを計る長胴甕である。口縁端部は面取りし、体部は平行タタキの後、ヘラケズリで調整している。内面はナデによる調整である。焼成はやや軟質で、砂粒を多く含む。色調は灰色である。K101は鉢の可能性もあるが隣接する堺市伏尾遺跡例では脚付長胴甕である。焼成は硬質で須恵質であるが色調は暗褐色である。長胴甕の体部調整はK102・K105にみられるように平行タタキが一般的であるが、中にはK106のようにハケメと併用する例もある。甕K108は口縁部体部が一体化した形状で端部に1条の沈線が巡る。体部は格子タタキによる調整で下半はヘラケズリで調整されている。体部中央には把手が付き、同じ位置には1～3条の沈線がみられる。底部は推定復原で計26個の孔が穿たれ、最も多孔の例である。この遺構の時



第57図 2005-〇〇出土遺物 (1/4)

期は須恵器から見て I 型式 1 段階の範疇で捉えて大過ないと考えられる。

2005-〇〇 (第31・57図、図版85A 参照)

K18Q Xに位置する。平面形は遺構の大部分が調査区外へ広がり、1100-〇 Sとも重複するため不明である。深さは0.25mで底の形状は平坦である。埋土は5 Y R5/1褐灰色シルトである。土坑は垂直に掘り込まれ、直下には細長い溝の痕跡がある。竪穴住居址の可能性も大である。この土坑内からは須恵器と韓式系土器が出土した。多くは底から遊離した状態である。前述のように1100-〇 Sとは重複する。出土遺物は須恵器の甕が2点、韓

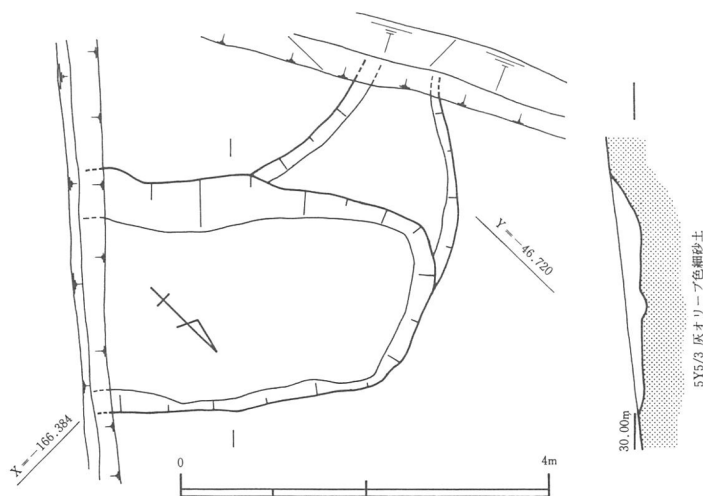
式系土器の甕が3点出土している。

須恵器の甕はいずれも中型でK109は口縁端部には三角形の凸帯を持つ古いタイプの甕である。K110は頸部に波状文を施す。焼成は共に軟質である。韓式系土器は長胴甕とみられる。K111・K112は同一個体の可能性もある。体部は平行タタキによる調整。K113は格子タタキによる調整である。この遺構の時期は須恵器から見てI型式1～2段階と考えている。遺物からも1100-O Sとは近い時期に想定できる。

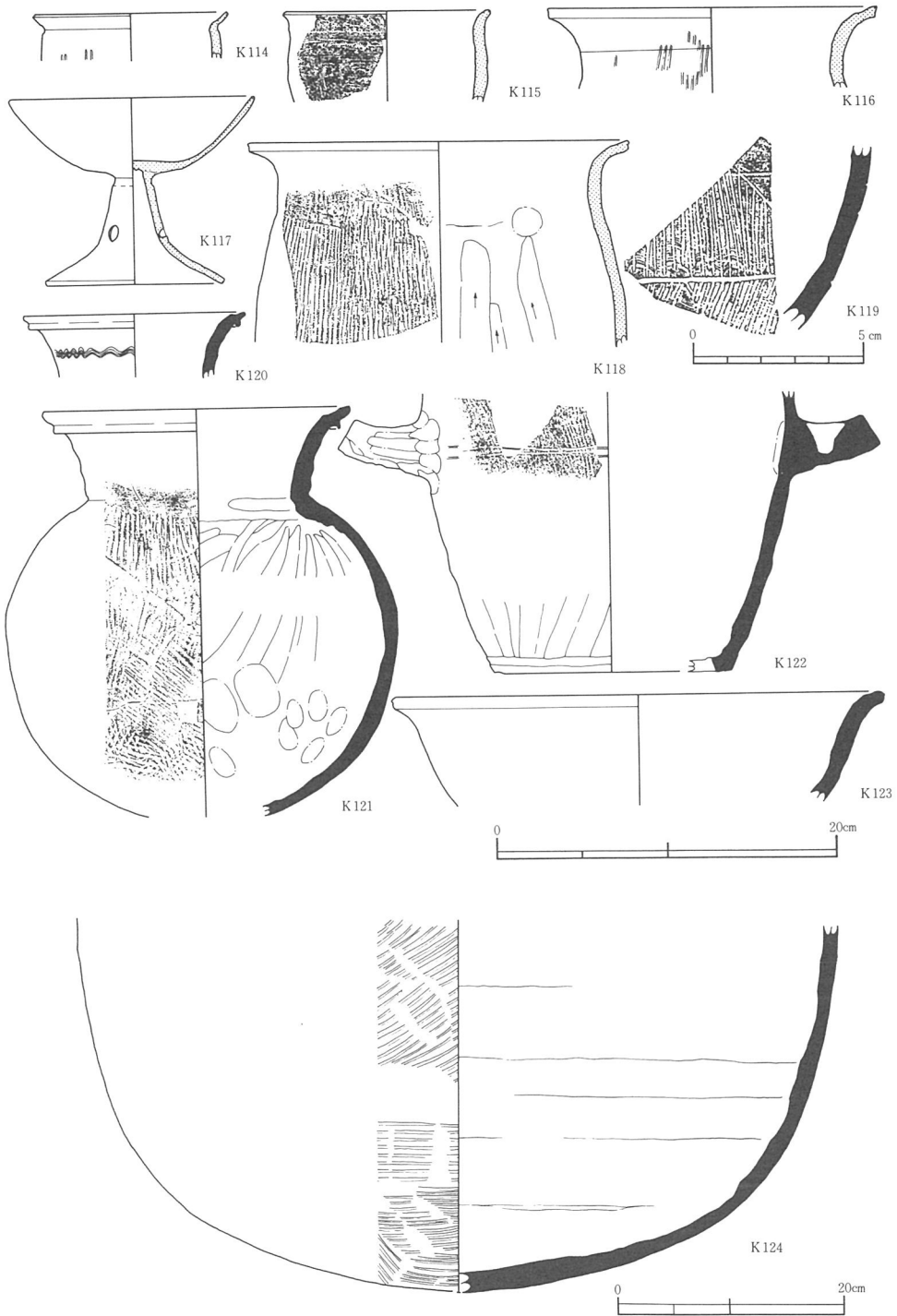
8-O S (第31・58・59図、図版85 B 参照)

K18U T～K18V Uにかけて北西～南東に位置する。溝は円弧状に曲がっており、検出長は約5.2m、幅1.0～2.6m、深さ0.3mで南東側と西側は調査区外に延びている。断面は、弓形である。溝底は北西側が0.25m高く、2段に落ちる。埋土は灰オリーブ色細砂土である。埋土の状況からは、流水、滞水の状況は明瞭でない。

出土遺物は、韓式系土器の平底鉢K114・K115・甕K116・K118、須恵器の器台K119、壺K120・K121、甕K122、鉢K123、甕K124、土師器の高杯K117、他に器種不明片がある。韓式系の甕K118は、長胴の甕になると考える。器台は、波状文が施された上にヘラミガキで鋸歯文が重ねられている。甕は、外面の把手付近にハケメがついており、下部は縦方向にヘラケズリした後に横方向に削っている。須恵器の壺K121と、甕K124はともに焼成が悪い。遺物の多くは細片の状態出土した。この遺構の時期は、須恵器からI形式の1段階であると考えている。



第58図 8-O S 平面・断面図 (1/80)



第59図 8-O S出土遺物 (1/2, 1/4, 1/6)

2. 古墳時代Ⅱ期（第60・90図参照）

初期須恵器が出土する時期以降、調査区内では遺構の断絶する時期がある。次に調査区内で遺構が登場するのは5世紀末～6世紀代（Ⅰ型式5段階～Ⅱ型式）までの間と考えられる。この時期を古墳時代Ⅱ期としてまとめて報告する。この時期には掘立柱建物を中心とする集落が営まれており、Ⅰ期に劣らず多くの成果を得た。

遺構は竪穴住居址・掘立柱建物・柱穴・土墳墓・土坑・溝などからなる。

この時期の遺構は、丘陵上から丘陵斜面にかけて集中し、特に丘陵上にはまとまった掘立柱建物群が見つかっている。土坑・溝などはこの群の内部ないし周辺から検出されたもので当時の集落景観を復元する良好な材料と言えよう。

掘立柱建物は全部で19棟が検出され、16棟が丘陵頂上部、3棟が丘陵斜面である。丘陵斜面ではさらに竪穴住居址1棟があり、古墳時代Ⅱ期は竪穴住居址と掘立柱建物が併存していたことが判った。

丘陵頂上部は遺構が集中し古墳時代Ⅱ期（5世紀末～6世紀代）の遺跡の中心部分と考えられる。丘陵斜面は掘立柱建物が点在し、竪穴住居址を含む構成になっている。

またこの時期は、陶邑の須恵器が全国的に流通する時期といわれ、これらの遺構群が陶邑の須恵器生産および集積・搬出などの活動とどのように関わっていたのかが注目される。陶邑内で同様の遺構の検出例の少ない現在では貴重な遺構と言えよう。

沖積地は平安末～鎌倉時代にかけての、館の遺構保存のために大部分が調査を行わなかった。このため、詳細はⅣ区DおよびⅣ区Aの一部以外は不明である。しかし、1987年度調査のB地区で部分的に検出された旧河川（56-OR）は、流路を少しずつ変えながら、6世紀後半まで継続していることが確認されている。これらのことから、Ⅱ期の調査区での景観復元は可能な材料がそろっていると考えられる。

（1）竪穴住居址・掘立柱建物

この項では竪穴住居址・掘立柱建物について報告する。記述は竪穴住居址・掘立柱建物の順に行った。さらに、掘立柱建物は丘陵頂上部と丘陵斜面に地区を分けて記述し、その他の柱穴についても合わせて報告した。

竪穴住居址

1075-O D（第60～62図、図版27・86A参照）

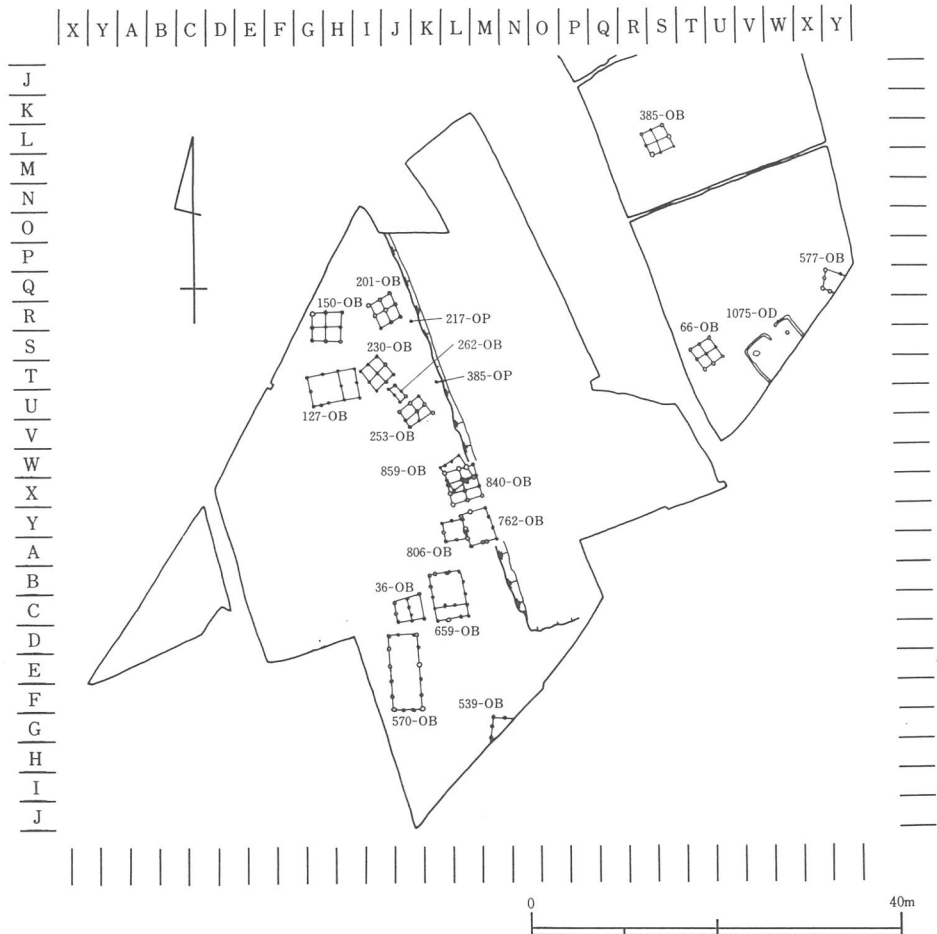
K18TVに位置する東西7.6m、南北5.2m以上の規模を持つ竪穴住居址である。建物の方位はN-25°-Wである。丘陵の緩斜面に位置するため建物の検出レベルは西が高くT.

P.+29.75m、東が低く29.63mを計る。

竪穴住居址は後世の削平により壁は残存せず、壁溝と柱穴を検出したにとどまった。壁溝の幅は広いところで18cm、狭いところで10cm、深さは5～10cmを計る。北東角には排水のためとみられる溝が屋外へと延びる。溝の埋土は単一層で7.5Y R4/1褐灰色土である。

溝は住居址の北辺中央で途切れているが攪乱のため明確ではない。当初から切れている場合は造り付けの竈が存在した可能性も考えられる。

柱穴は北西、南東それぞれのコーナー近くで2基検出している。北東の柱穴の規模は40×30cm、深さ35cm、南東側の柱穴は削平によるためか規模は小さく径12cm程度、深さも8cmを計る。柱穴の埋土は7.5Y R4/3暗褐色土である。柱間隔は2.65mを計る。床面は西側



第60図 古墳時代Ⅱ期 掘立柱建物配置図 (1/1000)



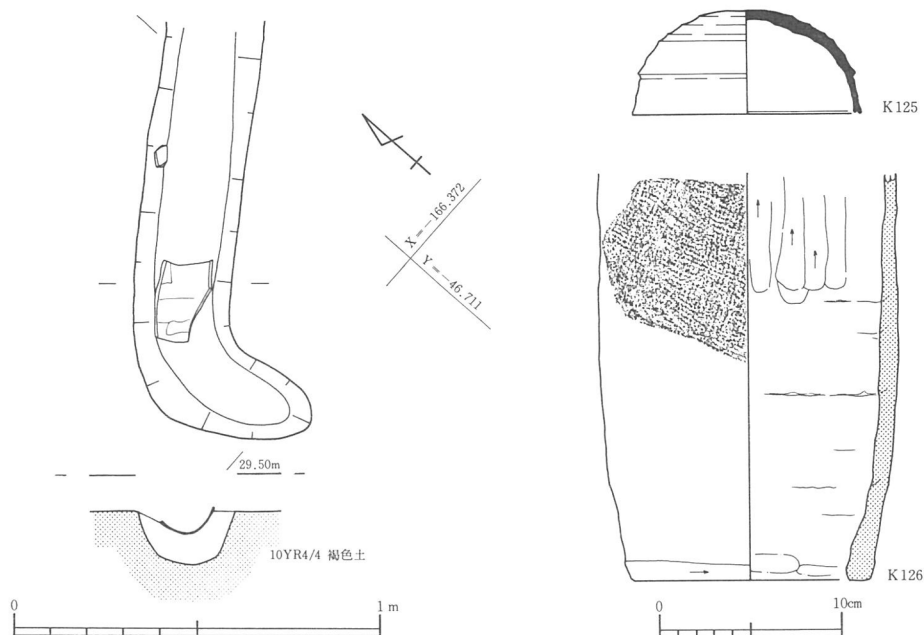
- | | |
|---------------------------|--------------------------|
| 1 2.5Y 6/6 明黄褐色土(平安時代整地土) | 4 7.5YR5/1 褐灰色土(平安時代整地土) |
| 2 7.5YR3/1 黒褐色土 | 5 7.5YR3/4 暗褐色土(住居址埋土) |
| 3 7.5YR4/1 褐灰色土 | 6 10YR 4/4 褐色土(壁溝) |



第61図 1075-OD平面・断面図 (1/60)

が比較的旧状を保っているが、東側は削平を受けている。

遺物は須恵器と土師器が出土している。須恵器 蓋K125、土師器K126は共に壁溝の中から出土し、K126は筒型の形状で器面に格子タキを持つが器種は不明である。須恵器から見て竪穴住居址の時期はI型式4段階前後と考えている。



第62図 1075-O D遺物出土状態 (1/20), 出土遺物 (1/4)

掘立柱建物

859-O B (第60・63・64図、図版28・32・33・86B参照)

K18WKに位置する。東隅の884-O Pは840-O Bに切られている。また北東側柱列の889-O Pも888-O Oに切られている。桁行は2間(3.66m)であるが、892-O P・947-O P・880-O Pをこの建物の一部と見れば、梁行(3.13m)は3間で、総柱の建物となる。面積は約11.5㎡で、主軸の方位はN-34°-Wである。建物の検出レベルはT.P.+33.00~33.30mで、柱穴底のレベルはT.P.+32.95~33.15mである。柱間寸法は桁行1.7~1.9m、梁行は3間なら0.85~1.20mである。柱の直径は13~18cmである。

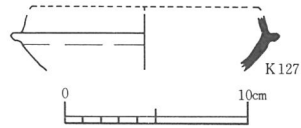
遺物は須恵器(初期須恵器を含む)、土師器が少量で、884-O P出土のII型式の杯身のみ図化可能であった。

840-O B (第60・64・65図、図版28・32・33・86D参照)

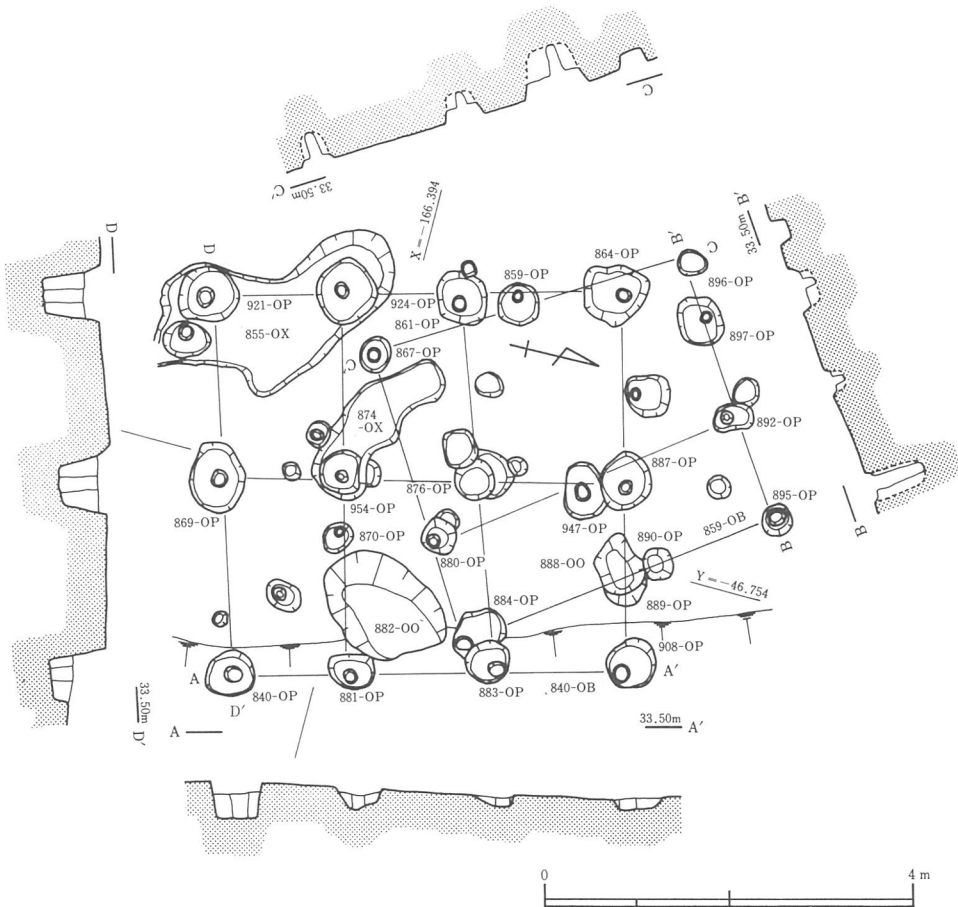
丘陵上の北東縁辺部で検出した建物でK18WKに位置する。東側柱列の883-O Pは859

－OBの884－OPを切っている。882－OOとの切合い関係は明らかでない。南西の924－OP・921－OPや床束の954－OPなどの付近はわずかにくぼみ（874－OX・855－OX）、包含層が薄く堆積していたが、切合い関係は明らかでない。桁行3間×梁行2間（4.40m×4.12m）の総柱構造で、面積は約18.1㎡である。主軸の方位はN－15°－Wである。建物の検出レベルはT.P.+32.70～33.35m、柱穴底のレベルはT.P.+32.55～32.80mであった。柱間寸法は桁行1.28～1.80m、梁行1.97～2.15mで、柱の直径は14～17cmである。

遺物は若干の土師器細片のほか、須恵器の杯蓋類や壺などがある。図示した土器が出土した柱穴はK128:

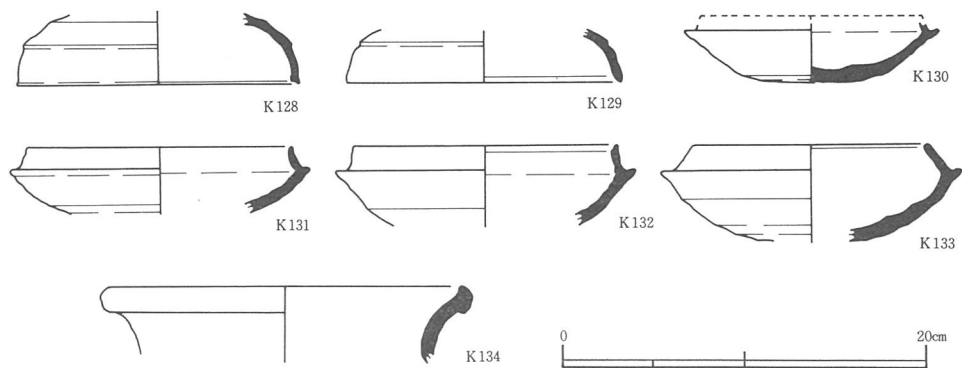


883－OP（掘方）、K129・134：869－OP、K131： 第63図 859－OB出土遺物（1/4）

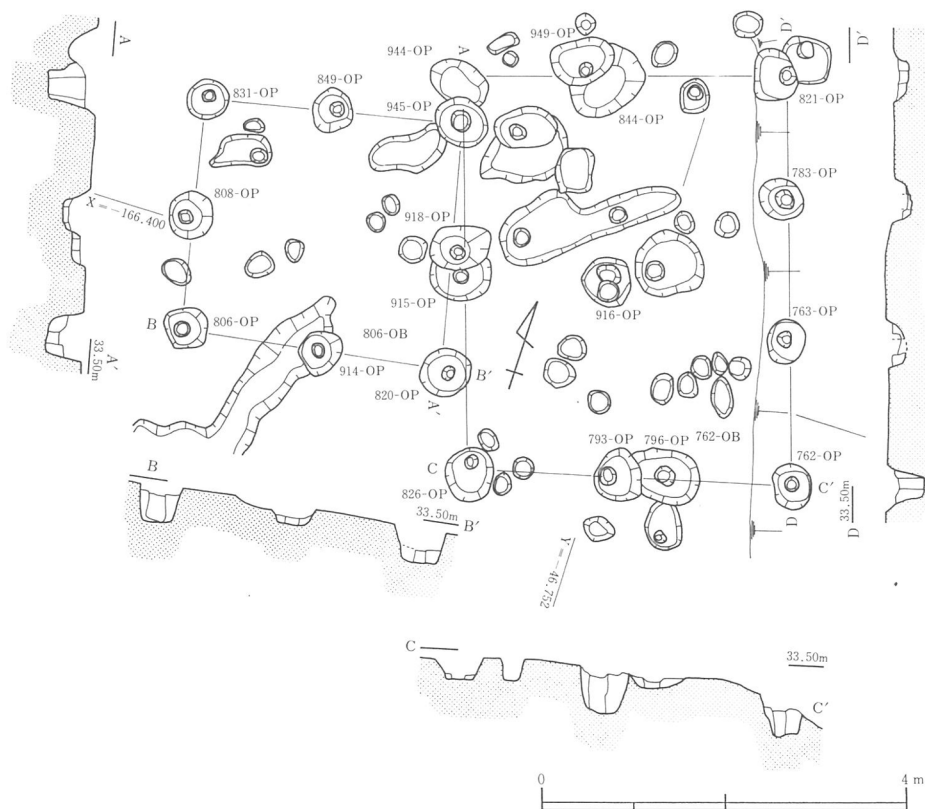


第64図 840・859－OB平面・断面図（1/80）

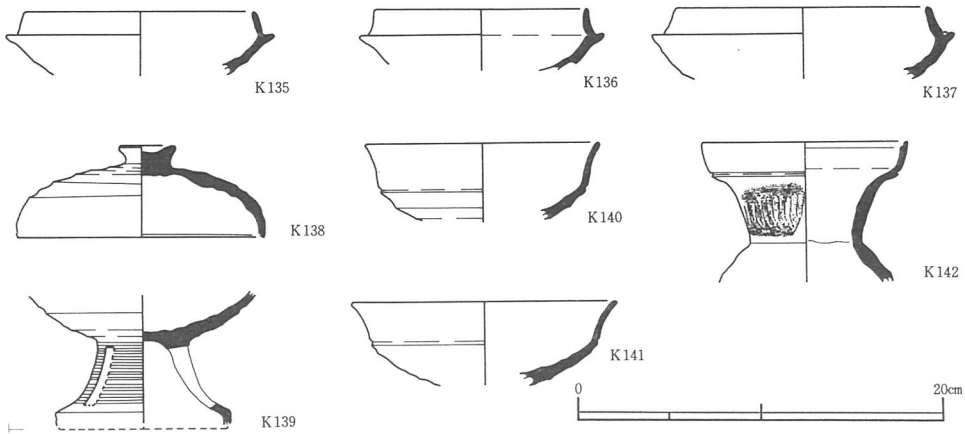
887-OP (掘方)、K131:908-OP (掘方)、K132:924-OP (掘方)、K133:921-OP (掘方)である。やや古いものもあるが、新しい土器にはII型式第3段階前後のものがある。



第65図 840-O B出土遺物 (1/4)



第66図 762・806-O B平面・断面図 (1/80)



第67図 806-OB出土遺物(1/4)

806-OB (第60・66・67図、図版33下・34・87A参照)

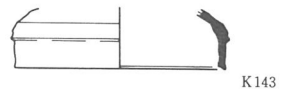
丘陵縁辺のK18Y Kに位置する。東妻柱列の945-OP・918-OPは762-OBの西側柱列を切り、また765-OXを切っている。掘方内の埋土は地山のブロックと、にぶい黄褐色粘質シルト・にぶい黄色シルトなどのブロックである。桁行2間×梁行2間(2.85m×2.64m)の正方形に近い建物である。中央付近では柱穴を検出していないが、実際に存在したか否かは不明である。面積は約7.5㎡で、主軸の方位はN°-80°-Eである。

建物の検出レベルはT.P.+33.35~33.45mで、柱穴底のレベルはT.P.+32.85~33.20である。柱間寸法は桁行1.35~1.50m、梁行1.25~1.40mである。柱の直径は14~20cmである。

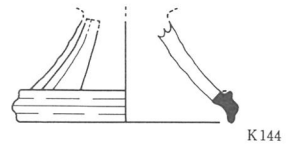
遺物は須恵器が多く、土師器細片もある。K135・137・141:828-OP、K136:945-OP、K138:914-OP(柱痕跡?)、K139・142:918-OP(掘方)、K140:831-OP(掘方)から出土した。新しい土器はII型式の第3~4段階頃であろう。

762-OB (第60・66・68図、図版34上・86C参照)

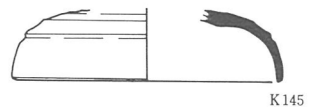
丘陵縁辺部のK18Y Lに位置する。西側柱列の944-OP・915-OPは806-OBの東側柱列に切られ、南妻の793-OPは796-OPを切っている。815-OXなどのごく小さなくぼみには薄い包含層の堆積が認められた。掘方は地山のブロックと、にぶい黄色シルト・にぶい黄



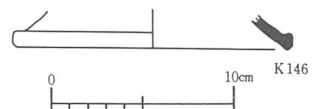
K143



K144



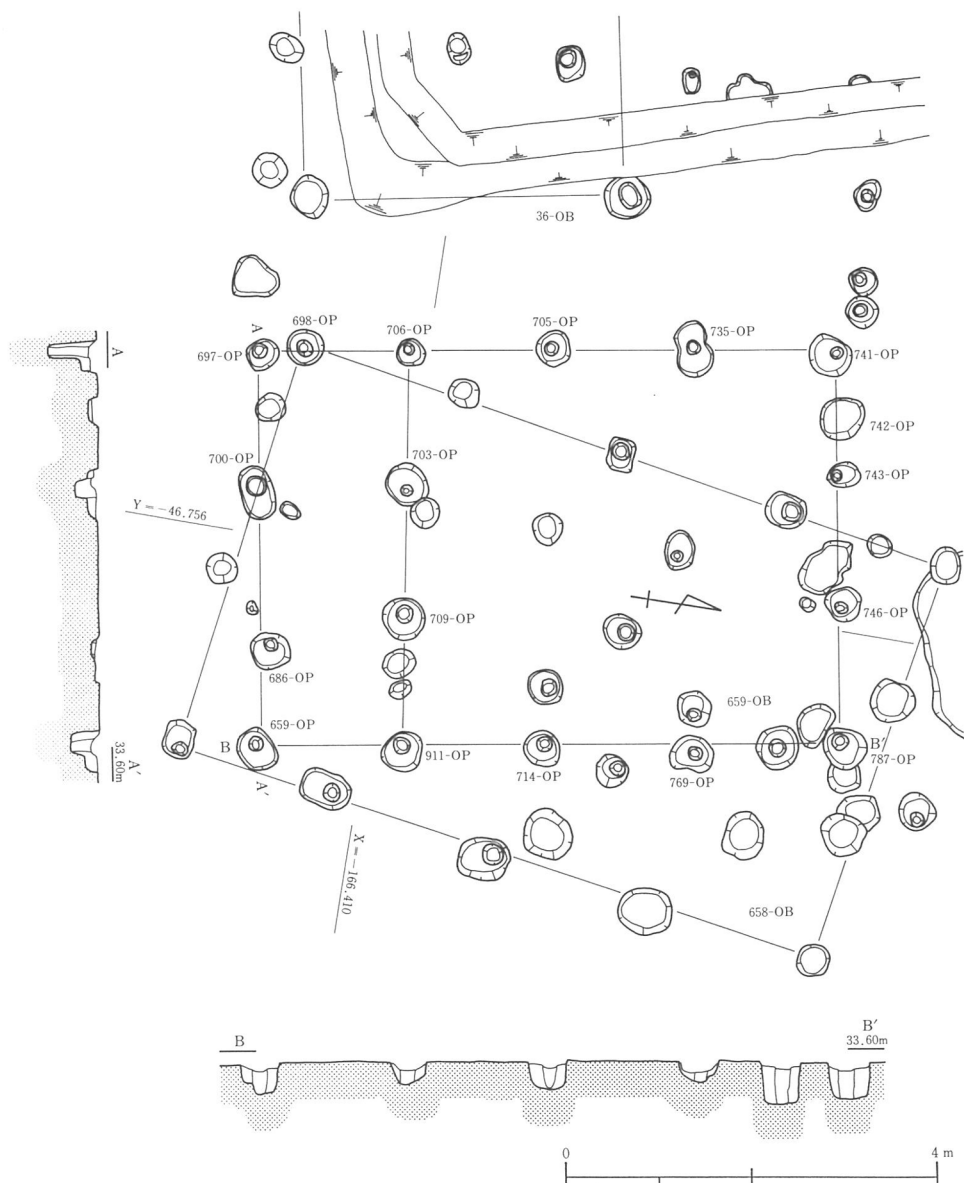
K145



K146

第68図 762-OB出土遺物(1/4)

褐色～暗褐色粘質シルトなどのブロックで埋められていた。桁行は東側柱列では3間(4.45m)であるが、西側柱列は2間(約4.2m)しかない。梁行は2間(約3.5m)である。中央の916-OPはこの建物の柱かもしれないが明らかではない。面積は約15.2㎡で、主軸の方位はN-18°-Wである。建物の検出レベルはT.P.+33.10~33.40mで、柱穴底のレベルはT.P.+32.50~33.10mである。柱間寸法は桁行1.35~1.58m(東側柱列)・



第69図 659-OB他平面・断面図(1/80)

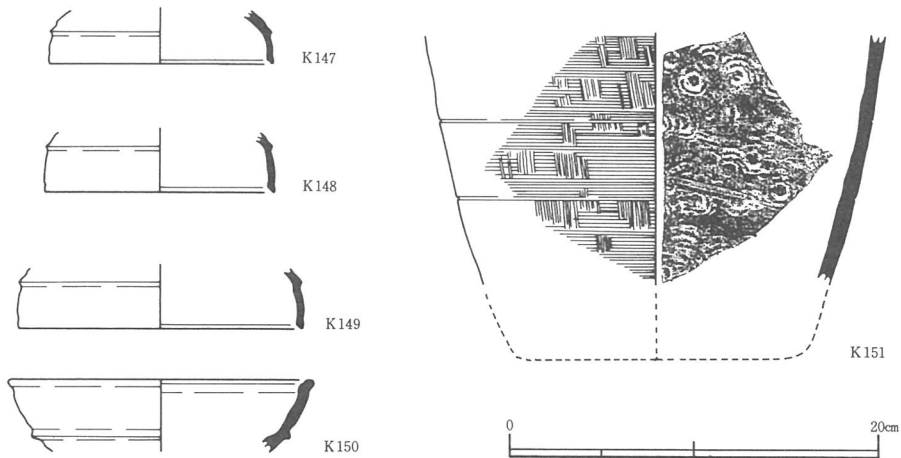
2.0～2.1m（西側柱列）、梁行1.5～2.0mである。柱の直径は15～20cmであった。

遺物には土師器細片、須恵器があり、図示の土器はK143・146：844－OP、K144・145：793－OP（K146は掘方）から出土した。K143・144はやや古い土器であるが、K145・146はII型式の中頃かと思われる。

659－OB（第60・69・70図、図版35上・87B参照）

K23BKに位置する。この付近は考え方によっては、さらにいくつかの建物を復元することも可能である（次節の658－OB参照）。掘方は地山のブロックと灰黄色シルト・暗灰黄色シルトのブロックで埋められていた。桁行3間×梁行3間（4.78m×4.26m）の身舎の南に1間（1.55m）廂が張り出す構造である。廂部分を含めた面積は約27.0㎡で、主軸の方位はN－7°－Wである。建物の検出レベルはT.P.＋33.45mで、柱穴底のレベルはT.P.＋32.95～33.40mである。柱間寸法は桁行1.55～1.64m、梁行1.32～1.53mで、柱の直径は12～20cmである。

遺物は土師器、須恵器で、図化したものはK147・K151：741－OP、K148：746－OP（掘方）、K149：747－OP、K150：703－OP（掘方）から出土した。K150・151は比較的古い須恵器の壺と甗であるが、K147～149はII型式2段階前後と思われる。

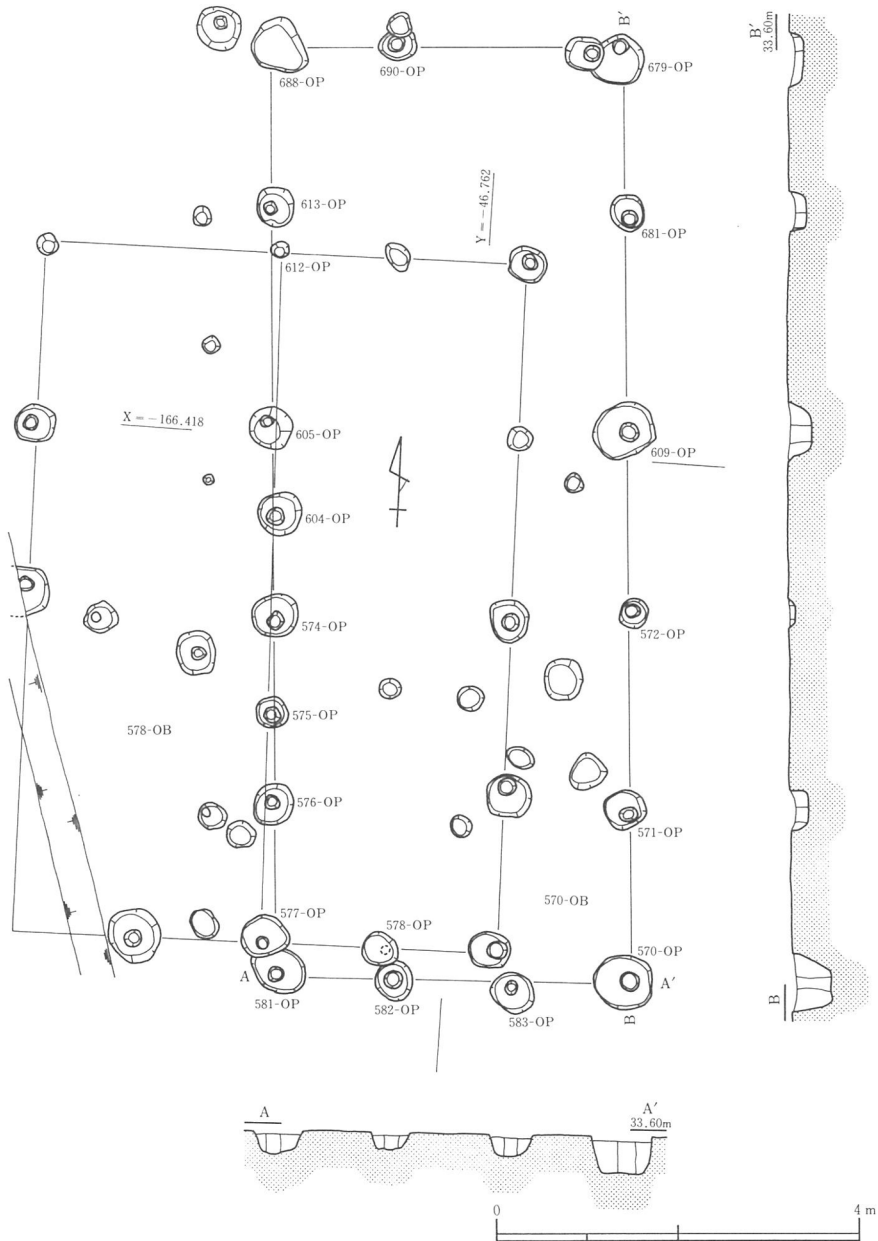


第70図 659－OB出土遺物（1/4）

570－OB（第60・71・72図、図版36・37上参照）

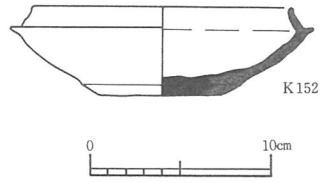
K23DIに位置する。南西隅の581－OPは578－OBの577－OPに切られている。その北の576－OP・574－OP・605－OPと、575－OP・604－OPのうち、前三者の柱

穴は、①578-OBの床束、②570-OBの西側柱列、③両者が重複している、のいずれであるか判断しかねる。また規則的な位置にある後二者の柱穴が①でないとも言い切れない。もし③であるなら、柱穴が切り合う地点が一ヶ所ぐらいはあってもよいはずである。また、



第71図 570-OB他平面・断面図 (1/80)

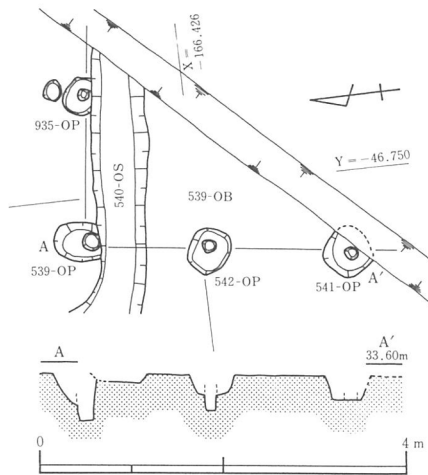
微妙な差とはいえ柱通りと柱間寸法を見ると、前三者は①と見るよりも②である可能性の方が高いと考えられ、後二者を①と考えておきたい（第7節 578-O B 参照）。



570-O Bは桁行5間×梁行3間(10.15m×3.80m) 第72図 570-O B出土遺物(1/4)の南北に長い建物である。面積は約38.5㎡と大きく、主軸の方位はN-4°-Wである。建物の検出レベルはT.P.+33.50mで、柱穴底のレベルは、T.P.+33.10~33.45mである。柱間寸法は桁行1.8~2.3m、梁行1.3m前後である。柱の直径は15~20cmである。遺物は須恵器（初期須恵器を含む）、若干の土師器細片などであるが、図化できたのは688-O P（柱痕跡?）から出土した完形品のみである。これとあまり変わらない小破片も数点あり、この建物の年代を示すものであろう。II型式4段階前後と考えられる。

539-O B (第60・73・74図、図版37下・87E 参照)

K23GMで部分的に検出した建物で、全容は不明である。南北2間以上×東西1間以上(2.82m以上×1.60m以上)の規模で、面積は4.5㎡以上である。南北柱列の方位はN-7°-Eである。建物の検出レベルはT.P.+33.45mで柱穴底のレベルはT.P.+32.95~33.30mである。柱間寸法は南北1.30~1.55m、東西1.60mで、柱の直径は11~16cmである。



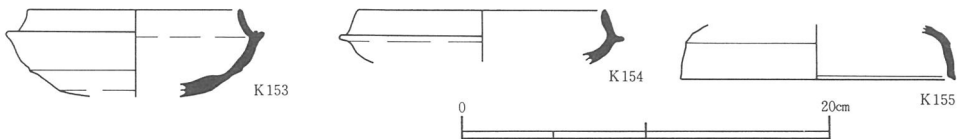
遺物は土師器、須恵器（初期須恵器を含む）

が少量あり、図化できたものはK153：935-O P（柱痕跡）、K154：542-O P（掘方）、K155：541-O P（掘方）から出土した。

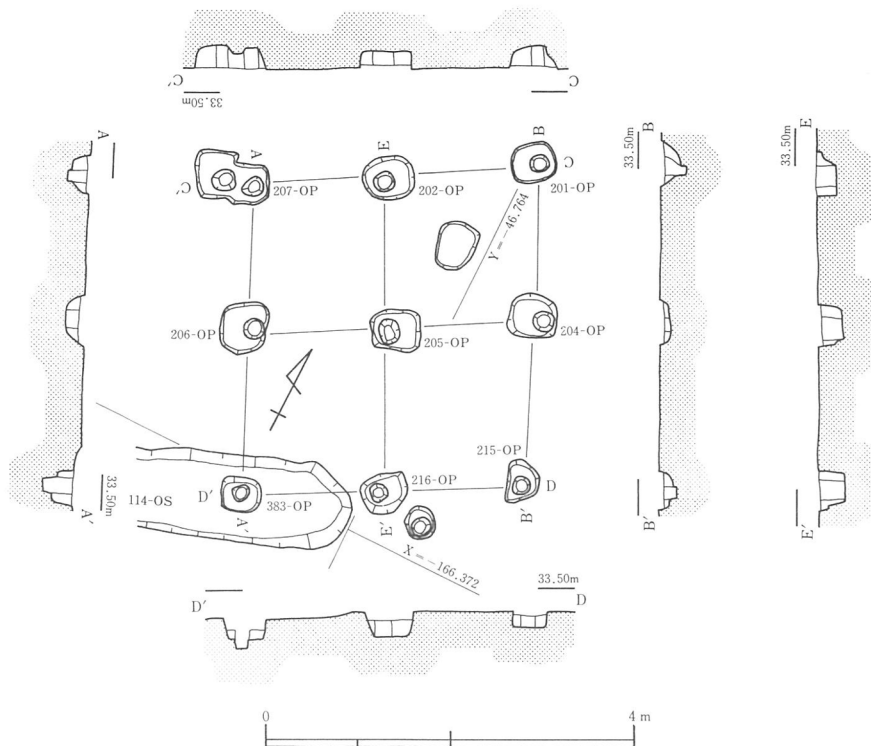
II型式2~3段階頃と思われる。

201-O B (第60図・75図参照)

I区の北端に建つ建物で、K18 I R周辺に位置する。南北2間×東西2間(3.55m以上



第74図 539-O B 出土遺物 (1/4)



第75図 201-OB平面・断面図 (1/80)

×3.1m)の総柱建物である。建物の主軸方位はN-22°30'-Wを向いている。面積10.68m²である。建物の検出レベルはT.P.+33.30mで、柱穴底のレベルはT.P.+32.85~33.25mである。柱間寸法は南北1.60~1.85m、東西1.4~1.7mである。柱穴の直径は40~60cmで、円形ないし楕円形の柱穴である。柱穴の埋土は概ね褐色土である。柱通りは215-OPがややずれる以外は歪な柱はない。207-OPは2つの柱が切り合うもので前後関係は不明である。なお、左の柱に並ぶものは見当たらなかった。柱穴埋土は10YR4/6褐色土で、柱痕跡はやや暗色になる。

遺物は土師器、須恵器などが出土しているが時期の判るものはない。383-OPが古墳時代II期の114-OSに切られていることから建物の時期を古墳時代とした。

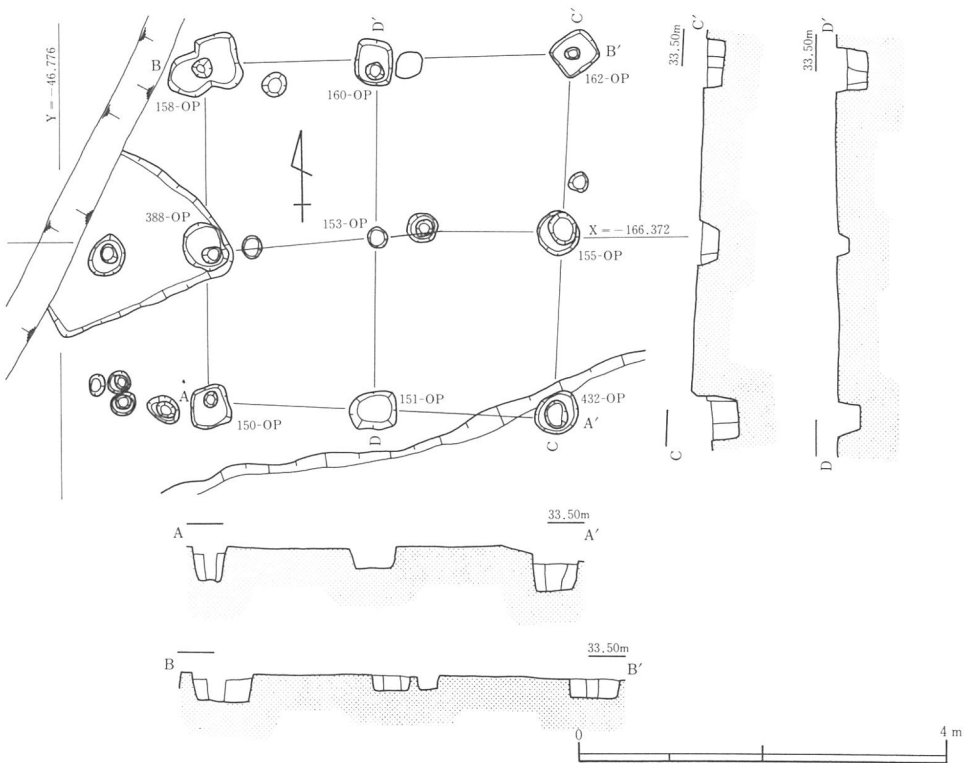
150-OB (第60・76図参照)

I区の北よりで検出された建物で、K18RG周辺に位置する南北2間×東西2間(3.65m×4.0m)の総柱建物である。面積は14.9m²である。建物の方向はN-1°30'-Eを向いている。建物の検出レベルはT.P.+33.25m前後である。柱穴底のレベルはT.P.+

32.74~33.10mと柱穴によって深さが大きく異なっている。柱間寸法は南北1.60~2.10m、東西1.75~2.15mである。他の総柱の建物より柱間が大きく、建物方向も異なったものである。束柱153-OPは、他の柱より小規模で浅いものである。

柱穴は直径50~70cmで、平面は楕円形ないし隅丸方形のものである。柱痕跡は7個確認できた。痕跡の観察から柱は直径20cm前後と考えられる。柱穴埋土は10Y R4/6褐色土で、柱痕跡はやや暗色になる。432-OPは古墳時代II期の114-OSの遺物が密集して出土した下層から検出された。このことから建物の時期を古墳時代とした。

出土遺物は、須恵器が柱掘方から出土しているが、図示できるものはなかった。



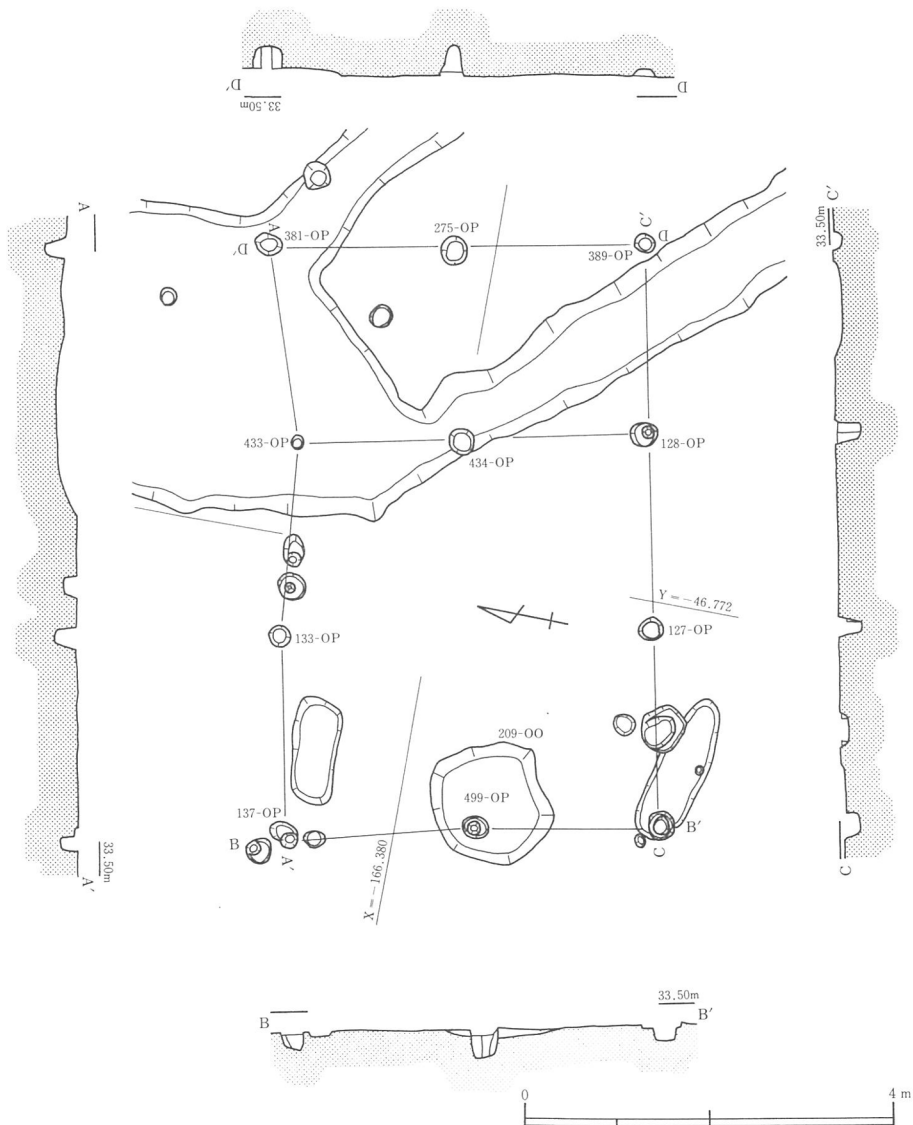
第76図 150-OB平面・断面図(1/80)

127-OB (第60・77図参照)

K18UG周辺に位置する。建物の規模は桁行3間×梁行2間(6.35m×4.10m)の東西棟である。建物の主軸方位はN-77°30'-E(東西辺を計測する)を向いて建っている。面積は25.6㎡を計り、柱間寸法は桁行2.05~2.20m、梁行2.00~2.10mである。総柱の建物構造のものより、柱間寸法は長いようである。その他、499-OPは209-OOと重複し

ている。

遺構の検出レベルはT.P.+33.30m前後である。柱穴の底はT.P.+33.00~33.20mで、柱によってやや深さが異なるようである。柱穴の大きさは直径20~30cmで、他の古墳時代の建物に比べ小さいものである。この建物は検出面から柱穴の底までが5~30cmと浅いものが多いことから、後世の削平が著しいと考えられる。柱穴埋土は10Y R4/6褐色土で、柱痕跡はやや暗色になる。出土遺物は須恵器 杯、土師器 甕などが出土しているが、図示

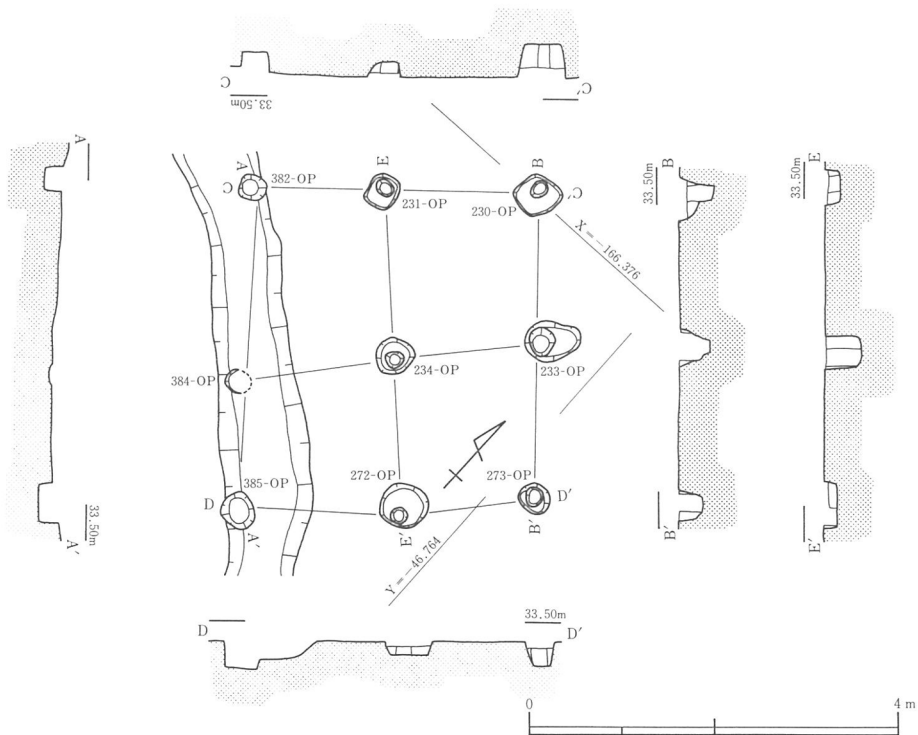


第77図 127-O B平面・断面図 (1/80)

できるものはなかった。381-OP・433-OP・434-OPが古墳時代II期の378-OOないし115-OSに切られていることから建物の時期を古墳時代とした。

230-OB（第60・78図参照）

K18TH周辺に位置する。建物の規模は南北2間×東西2間(3.6m×3.3m)で総柱建物になる。面積は11.16㎡で、建物の主軸方位はN-40°30'-Eである。柱間寸法は南北が1.5~2.1m、東西は1.5~1.8mである。柱穴の検出レベルはT.P.+33.3mである。柱穴底のレベルはT.P.+32.95~33.15mである。234-OP・233-OPは他の柱穴より深く掘られている。平面形から棟方向は明確にできなかった。柱穴は直径40~70cmで円形ないし楕円形を呈する。柱痕跡が確認できたのは6基で、柱の直径は15~20cmである。建物の東辺が3.6mとやや広がり、台形を呈しやや歪である。柱穴埋土は10YR4/6褐色土で、柱痕跡はやや暗色になる。382-OP・384-OP・385-OPは古墳時代II期の375-OSによって切られたために深さ10~15cmしか遺存していなかった。この切り合いから建物を古墳時代とした。出土遺物は、古墳時代の須恵器 甕などが掘方から出土したが、図化で



第78図 230-OB平面・断面図 (1/80)

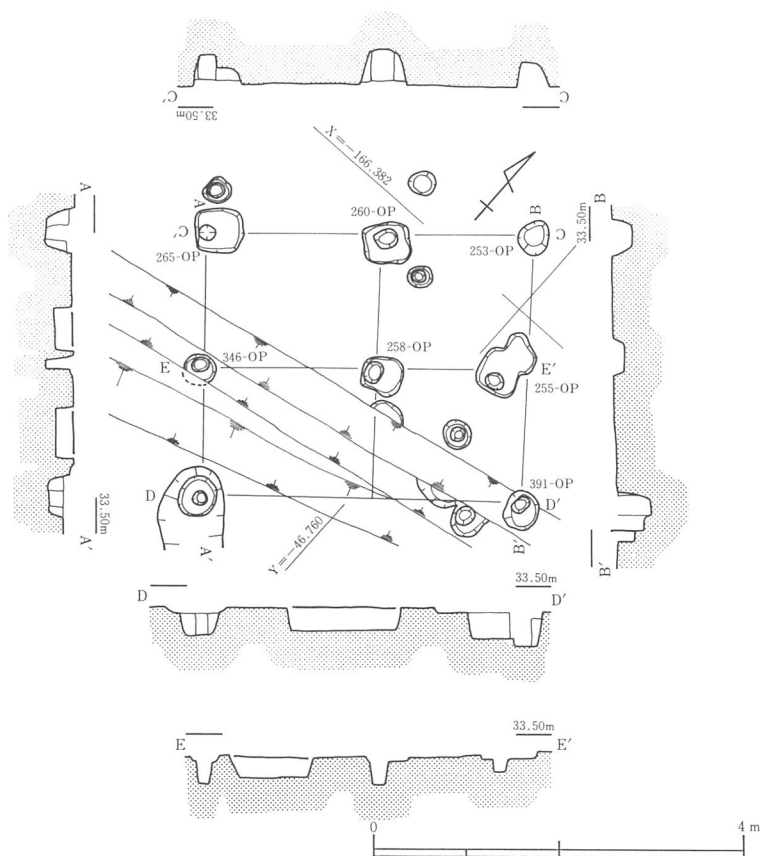
きるものはなかった。

262-O B (第60図参照)

K18U J 周辺に位置する。建物の規模は桁行 2 間×梁行 1 間(2.4m×1.0m)の建物で、面積2.88㎡である。建物の主軸方位はN-41°30'-Wである。柱間寸法は南北1.2m、東西1.0mである。2 間×1 間の構造ではなく、375-O S に削られた柱穴があった可能性がある。遺物は古墳時代の須恵器 高杯・蓋・不明遺物などがある。

253-O B (第60・79・80図参照)

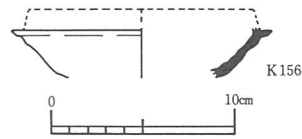
I 区 A と I 区 B にかけて検出されたもので、K18U J 周辺に位置する。建物の規模は南北 2 間×東西 2 間 (3.6m×2.85m) の総柱建物である。面積は10.26㎡、建物の主軸方位はN-40°-Wである。柱間寸法は南北が1.7~1.9m、東西が1.4~1.5mである。南辺の中央の柱穴は検出できなかった。柱穴は直径40~60cmで平面は楕円形ないし隅丸方形である。



第79図 253-O B 平面・断面図 (1/80)

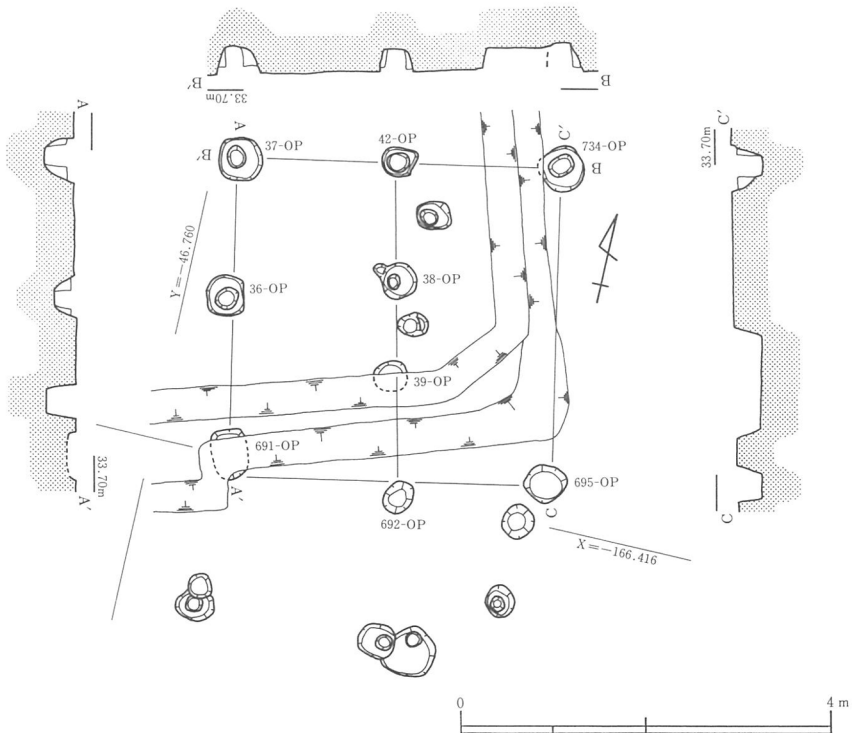
る。遺構の検出レベルはT.P.+33.25m前後である。柱底はT.P.+29.85~30.00mである。柱穴は直径40~50cmで、隅丸ないし楕円形を呈する。柱穴埋土は10Y R4/6褐色土で、柱痕跡はやや暗色になる。出土物は須恵器杯・蓋・甕などが出土している。須恵器杯身K156は253-O P掘方から出土した。

36-O B (第60・81・82参照)

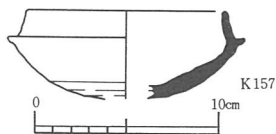


第80図 253-O B出土遺物 (1/4)

I区AとI区Bに渡って見つかった建物で、K23C J周辺に位置する。建物の規模は南北2間×東西2間(3.50m×3.55m)、面積12.38㎡の総柱建物である。建物の主軸方向はN-11°30'-Wを向いている。柱穴の検出レベルはT.P.+33.45~33.55m、柱穴の底はT.P.+33.15~33.27mである。柱間は南北1.60~1.85m、東西1.75~1.80mを計り、2間×2間の間に床束が2基見られる(38-O P、39-O P)。当遺跡では同じ構造の建物は検出されていない。



第81図 36-O B平面・断面図 (1/80)

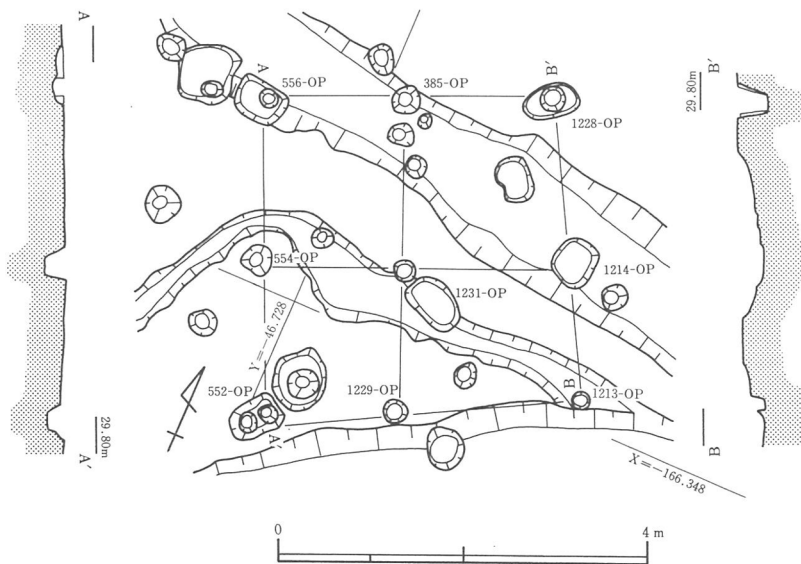


第82図 36-O B出土遺物 (1/4)

出土遺物は、須恵器 杯・蓋・甕、土師器 甕などがあり、図示できたものは、古墳時代の須恵器 杯身K157 1点で36-O P掘方から出土した。

385-O B (第60・83図、図版38上・88A参照)

丘陵斜面(II区)で見つかった掘立柱建物は、385-O B・66-O B・577-O Bの3棟がある。385-O BはK18 L R周辺に位置する。規模は南北2間×東西2間(3.4m×3.4m)の総柱建物で、面積は11.05m²である。建物の主軸方位(南北方向を軸)はN-26°-Wを示す。柱間は南北方向が南北1.50~1.85m、東西は1.4~2.0mである。柱穴は直径40~60cmで楕円形ないし隅丸方形のものである。柱穴の埋土は10Y R6/2灰黄褐色細砂質土で柱痕跡はこれよりやや暗色である。他の建物の埋土もほぼ同様のものが多い。検出レベルはT.P.+29.35~29.50m、柱穴底のレベルは29.05~29.35mである。遺物は須恵器 杯・杯蓋・高杯・壺・甕などがあり、図示した高杯K159は556-O P掘方からの出土である。

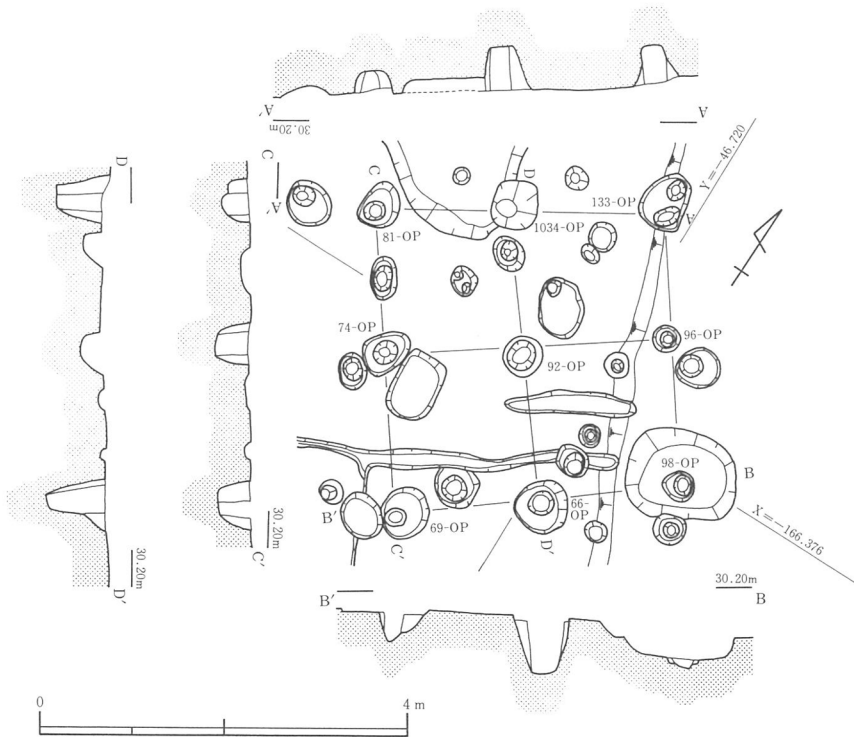


第83図 385-O B平面・断面図 (1/80)

66-O B (第60・85図、図版39上・87F 参照)

K18 S T 周辺に位置する。建物の規模は南北2間×東西2間(3.30m×3.15m)、面積9.8m²の総柱建物である。建物の主軸方位はN-33°50'-Wを示している。検出レベルはT.P.+29.65~30.0m、柱底はT.P.+29.25~29.95mである。柱間は南北1.35~1.60m、東西1.55~1.60mで、掘方は直径40~60cmで、平面は円形ないし楕円形のものが多い。柱痕跡が確認できた柱穴は8基で、痕跡の観察から柱の直径は20cm前後と考えられる。

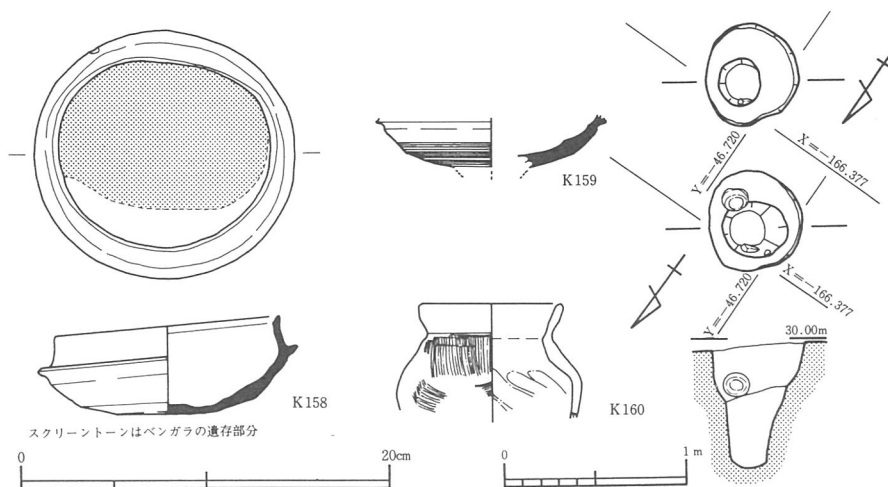
出土遺物は、須恵器 杯、蓋、甕、土師器 甕などが出土している。図示したものはK158:66-O P 掘方から出土した。K158はI型式5段階のもので杯の中にベンガラを入れ柱掘方に伏せた状態で据えられていた。完形品で中にベンガラを入れていたことから、祭祀的な意図をもって埋納したことが考えられる(第VI章参照)。



第84図 66-O B 平面・断面図 (1/80)

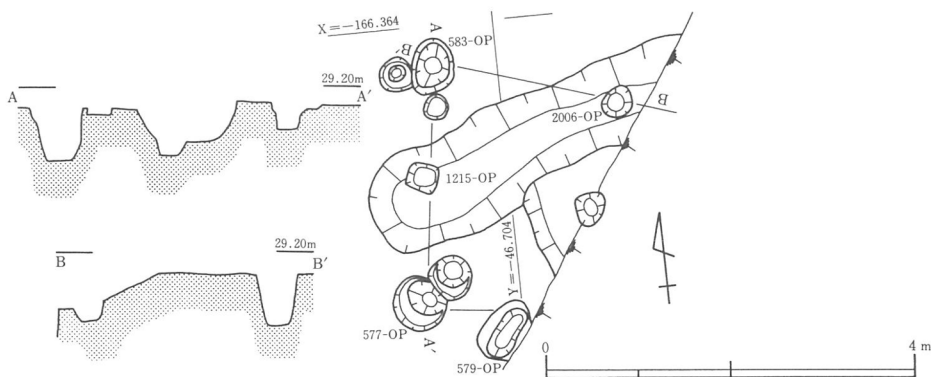
577-O B (第60・86図参照)

調査区の南端で検出された建物でK18Q X 周辺に位置する。建物の規模は2間×1間以上(1.65m×2.05m)である。建物は調査区外に延びると思われる。建物の主軸方位はN



第85図 66-O P平面・断面図 (1/40), 66・385・577-O B出土遺物 (1/4)

-17°-Eを示し、柱間寸法は南北方向が1.00~2.05m、東西方向は1.30~1.35mである。建物の検出レベルはT.P.+29.25m前後である。柱穴底のレベルはT.P.+28.60~28.95mで掘方の直径は40~60cm程度である。この建物は1100-O S・2005-O Oと切り合うもので、これらの遺構よりは新しいと考えられる。遺物は土師器、須恵器の細片が出土している。図示した土師器 甕K160は577-O P掘方からの出土である。



第86図 577-O B平面・断面図 (1/80)

(2) 柱穴

ここでは、個々の柱穴から出土した遺物を中心に報告する。柱穴の中から出土した遺物はあまり多くない。従って、各建物のところで報告したが、時期を決定できる柱穴は非常に少なかった。

各地区の柱穴の概要

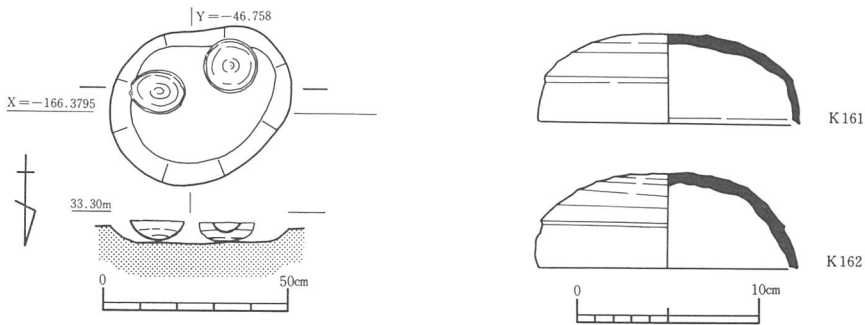
I区（第88図参照） 600以上の柱穴が出土している。直径20cm程度の円形ないし楕円形の小規模なものから、80cmを越える隅丸方形に近いものなど様々であった。しかし、I区は全般に削平が著しく、検出された柱穴の規模や形状はかなり変形を受けていることを考慮しなければならない。

217-OP（図版38下参照）

K18JRに位置する。平面は楕円形で長径0.33m、短径0.32m、深さは9cmである。底はたいらで皿状である。このピットは他のピットとの規則性は認められず単独である。あるいは建物を構成する他のピットが消滅している可能性も高い。このピットからは須恵器の甕の破片が10点出土している。甕からみてI型式の範疇で納まる時期と考えられる。

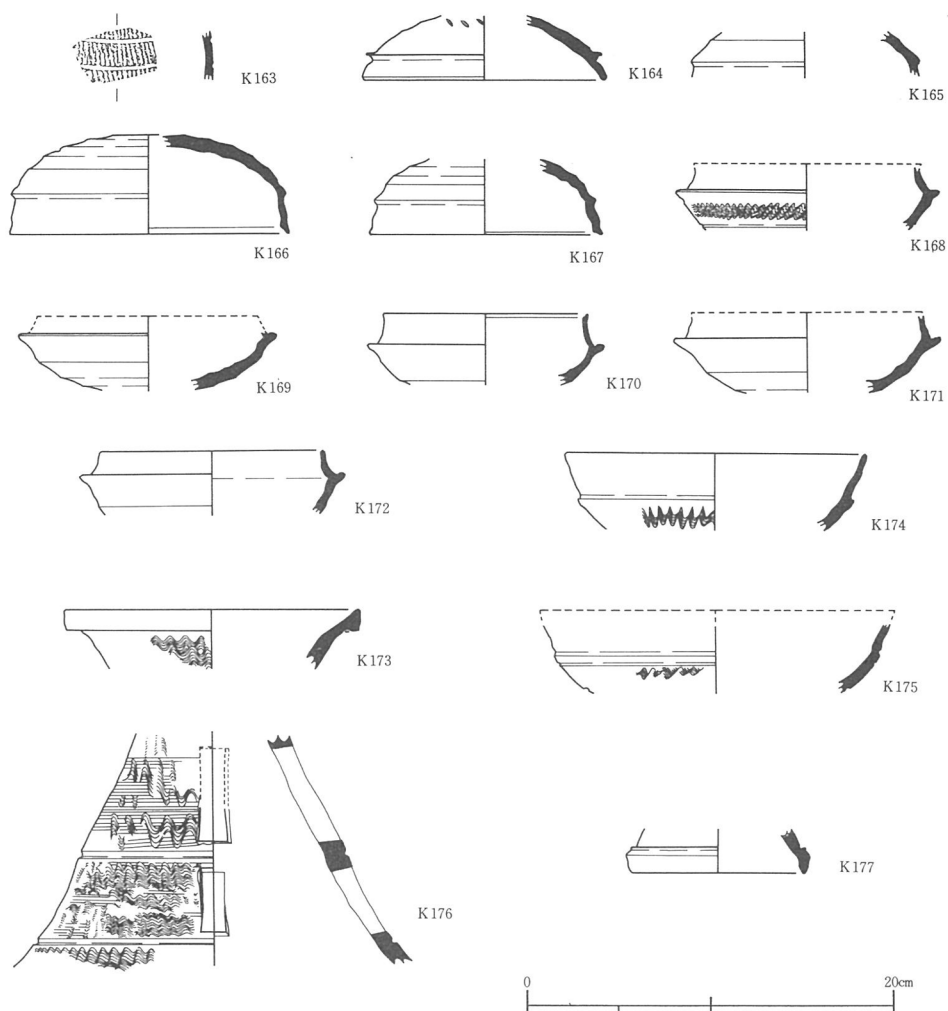
385-OP（第87図、図版88A参照）

K18SKに位置する。平面は楕円形で長径0.5m、短径0.42m、深さは4cmである。このピットは他のピットとの規則性は認められず、単独である。このピットは浅いため、あるいは掘立柱建物を構成する他のピットが消滅している可能性も高い。このピットからは須恵器の蓋K161・K162が上下を逆に据えた状態で出土した。蓋は口径が共に14cm以上あり、丸い天井部を持ち、僅かに稜の痕跡を残している。遺構の時期はII型式2段階前後と考えられる。



第87図 385-OP平面・断面図（1/20），出土遺物（1/4）

出土した遺物のうち、図化できたのは須恵器のみである。それぞれの遺物が出土した柱穴は、K163：43-OP、K164：885-OP、K165：148-OP、K166：167：276-OP、K168：292-OP、K169：131-OP、K170：159-OP、K171：551-OP（掘方）、K172：173：796-OP（K172は掘方）、K174：501-OP（掘方）、K175：144-OP、K176：143-OP（掘方）、K177：770-OPである。大半がII型式のものであるが、I

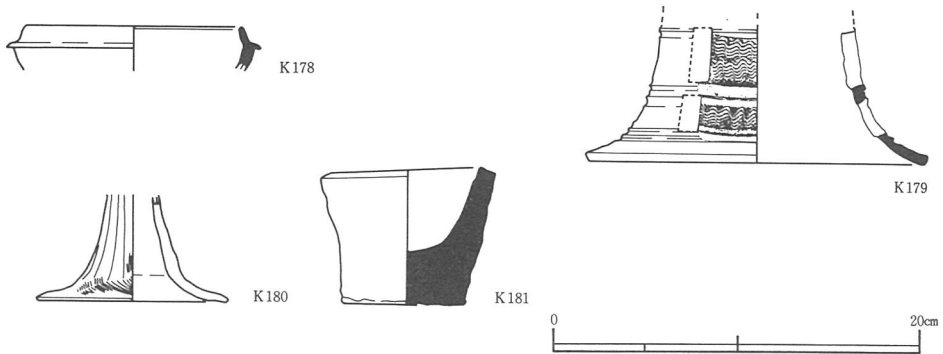


第88図 古墳時代Ⅰ区柱穴出土遺物（1/4）

型式のものも数点あり、K163・K164などは初期須恵器である。K163は甕で、外面は縄
 蓆文のタタキの後、沈線を施し、内面にはていねいなナデを行っている。K164は蓋とし
 たが、無蓋高杯の可能性もある。口縁部直上の稜は非常にシャープで、天井部には刺突文
 を巡らせている。

以上の土器の大部分は残りが悪く、小破片に近いものが多い。よって、これらの資料か
 らただちに個々の柱穴の時期を確定するのは困難である。

Ⅱ区（第89図参照） 2000基以上の柱穴が出土した。やはり直径20cm程度の円形ないし楕
 円形の小規模なものから、80cmを越える隅丸方形に近いものなど、平面形や規模は様々で



第89図 古墳時代Ⅱ区柱穴出土遺物（1/4）

あった。Ⅱ区では古墳時代の土器を出土する柱穴が多く見られた。しかし、建物は大半が後の時代のものであることや、Ⅱ区の包含層が丘陵上を削平した土と考えられることから、ここでも柱穴の時期を遺物から断定することは難しい。Ⅱ区の柱穴の大半は古墳時代より後世のものと考えられる。

遺物が出土した柱穴はK178：986－OP、K179：117－OP、K180：1045－OP、K181：230－OP（掘方）である。K180は土師器の高杯で、脚部のケズリ調整などに新しい傾向がある。大和の飛鳥Ⅰ、Ⅱや難波宮下層集落に似た例がある。

K181は鉢で、底部は平底、口縁端部は直線的に切断したような形態である。初期須恵器と考えられ、完形品であることから、この柱穴の時期を示す可能性がある。

Ⅲ区・Ⅳ区・Ⅴ区 これらの地区からは古墳時代の柱穴は検出されなかった。

（3）その他の遺構

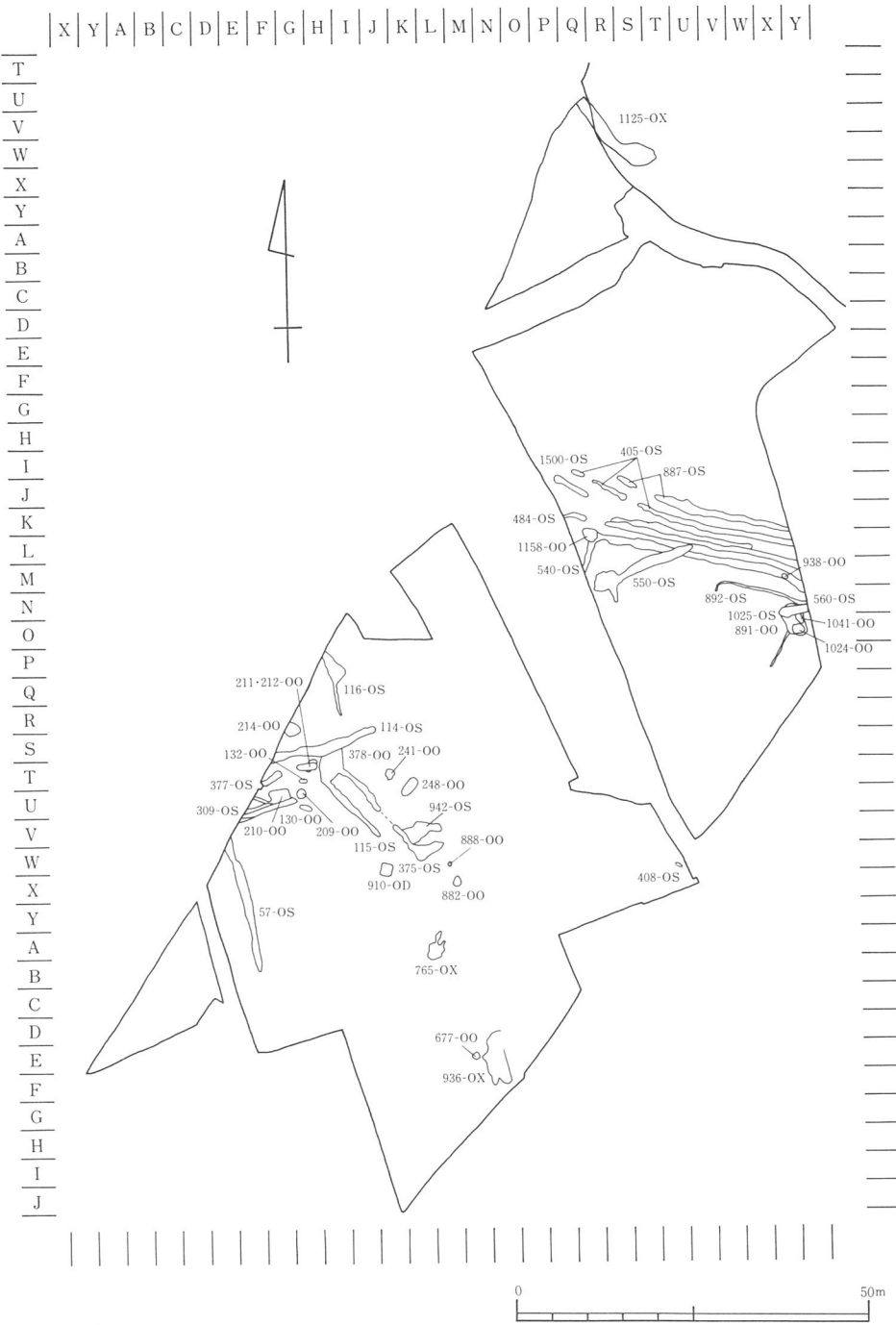
132－OO（第90・91図、図版39下参照）

K18TGに位置する。平面は四隅の丸い長方形で長径1.15m、短径0.5m、断面は浅いU字形で深さは0.12mである。埋土は2.5Y6/4にぶい黄色シルトである。この土坑は古墳時代の掘立柱建物127－OBと重複する。切り合い関係がないため新旧は不明である。

土坑内からは須恵器11点および土師器1点の計12点の破片が出土した。須恵器は甕・蓋・壺の3器種で内面スリケシの甕の破片も7点含まれている。遺物の図化はできなかったが、遺構の時期は須恵器の蓋の破片から見てⅠ型式5段階～Ⅱ型式1段階の間と考えられる。

214－OO（第90・91図参照）

K18RGからSGにかけて位置する。平面形は遺構が調査区外に延びるため不明である。検出長は南辺で2.1mで、深さは0.09mと浅い。埋土は7.5YR3/4暗褐色シルトである。

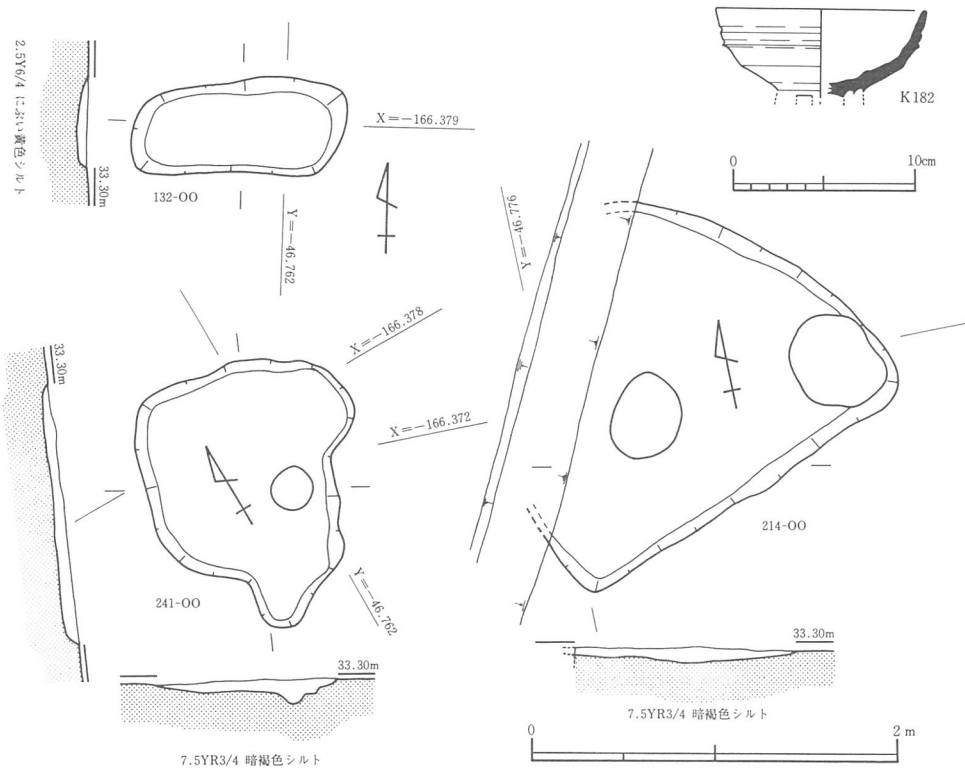


第90図 古墳時代Ⅱ期Ⅰ・Ⅱ区遺構配置図 (1/1000)

この土坑は古墳時代の掘立柱建物150-OBのピット388-OPと重複する。新旧関係は214-OOが新しい。遺物は須恵器の長脚1段スカシの高杯の182が1点出土している。この遺構の時期は須恵器から見てII型式2段階前後と考えられる。

241-OO（第90・91図参照）

K18T Jに位置する。平面は不定形で長径1.46m、短径1.05m、深さ0.1mである。埋土は7.5Y R3/4暗褐色シルトである。遺物は須恵器の甕1点、杯身1点、サヌカイト1点が出土している。この遺構の時期は遺物が破片のため断定はできないが須恵器から見てII型式の3～4段階と考えられる。

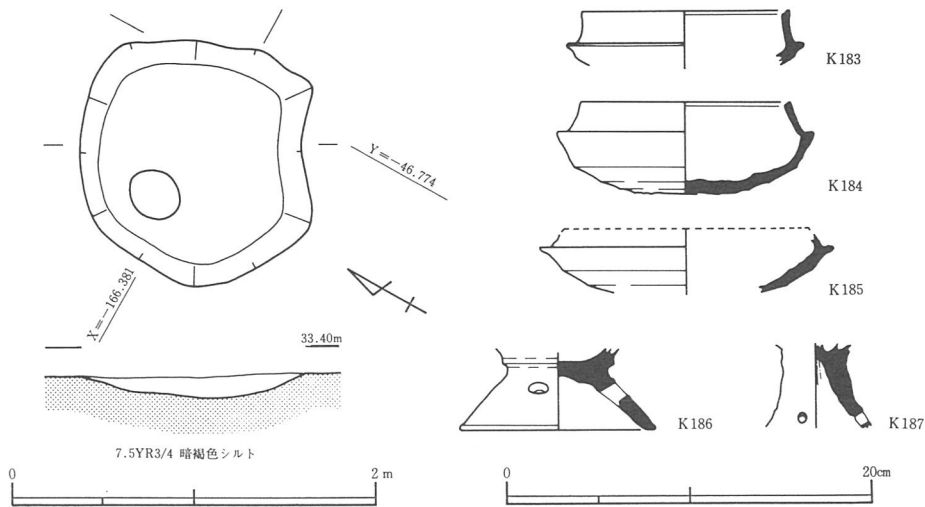


第91図 132・214・241-OO平面・断面図 (1/40) , 214-OO出土遺物 (1/4)

209-OO（第90・92図参照）

K18U Gに位置する。平面は楕円形で長径1.32m、短径1.22mで断面は浅いU字形である。埋土は7.5Y R3/4暗褐色シルトである。古墳時代の掘立柱建物127-OBの柱穴と重複する。新旧関係は209-OOが新しい。

出土遺物は須恵器が45点、土師器が17点ある。須恵器は定型化以前の壺・甕・碗・器台

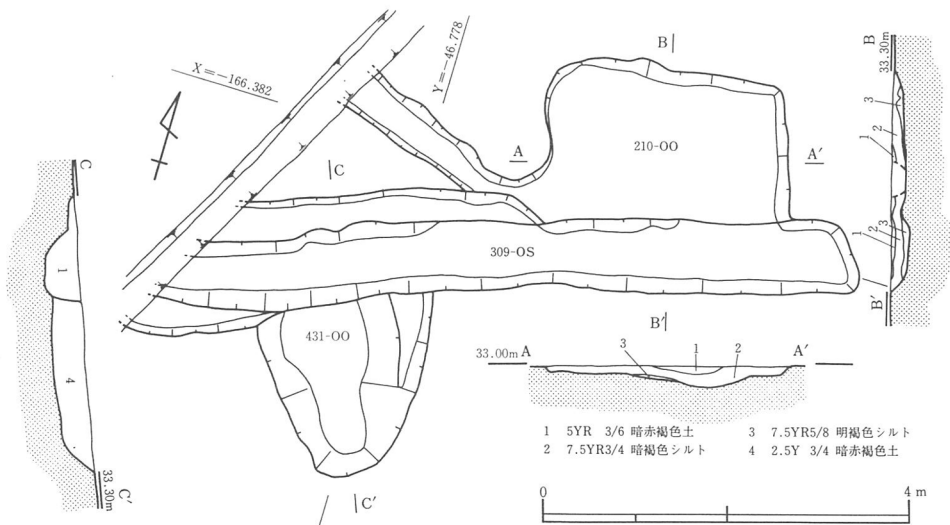


第92図 209-OO平面・断面図 (1/40), 出土遺物 (1/4)

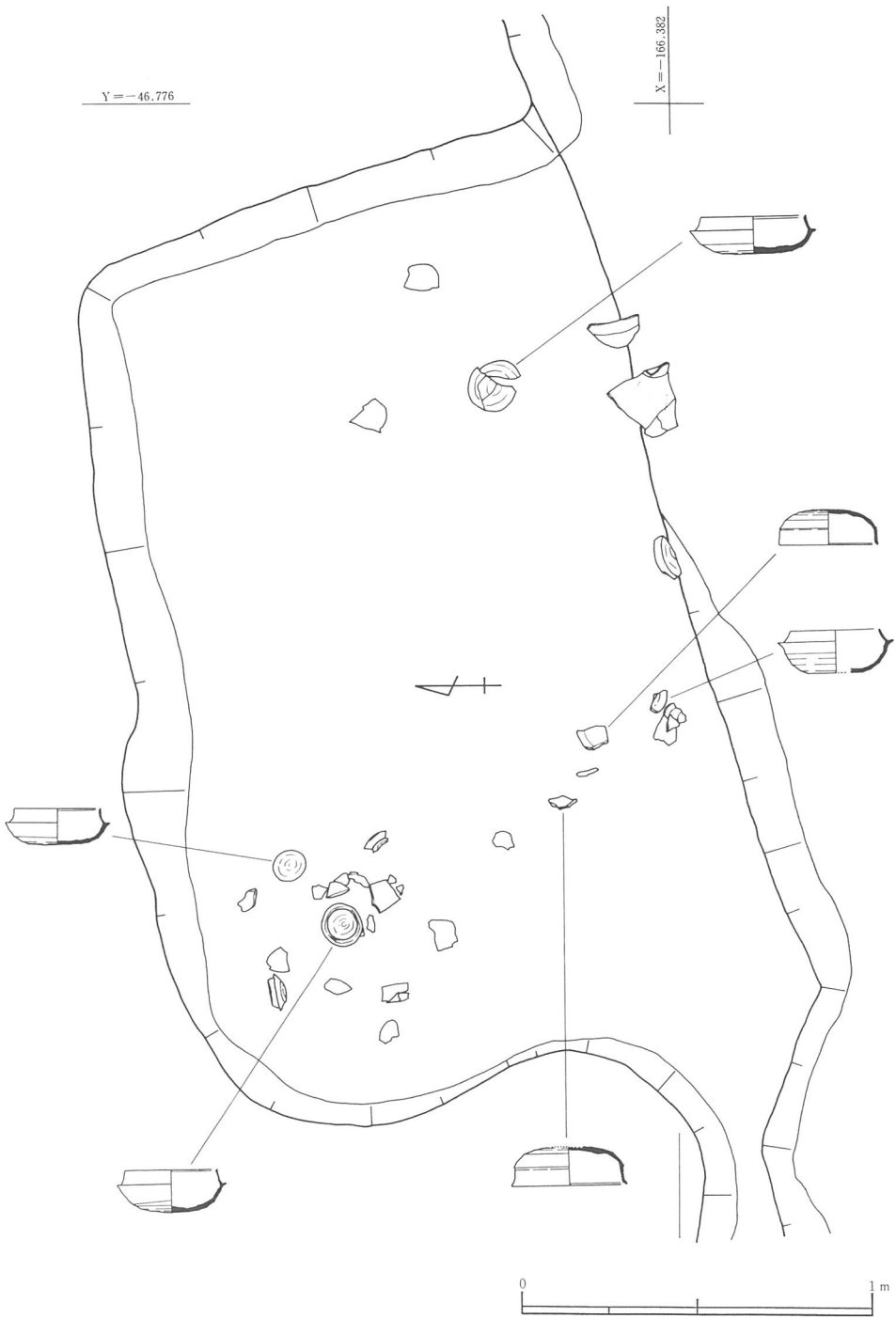
と定型化以後の蓋 (図化不能)、杯K183~K185、高杯K186・K187がある。土師器は細片のため器種は特定できない。この遺構の時期は最も新しい遺物が示すII型式3~4段階と考えられる。

210-OO (第90・93~95図、図版40上・89B参照)

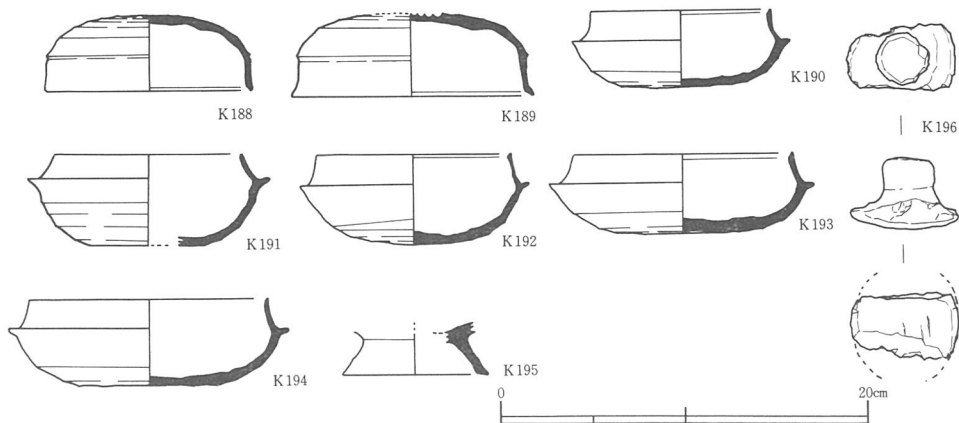
K18UFに位置する。平面は方形であろう。長径2.6m、短径1.6m以上、断面は中央部がやや凹むが浅い皿状で深さは8~24cmである。この土坑内からは須恵器が廃棄された状



第93図 210-OO, 309-OS平面・断面図 (1/80)



第94図 210-〇〇遺物出土状態 (1/20)



第95図 210-〇〇出土遺物 (1/4)

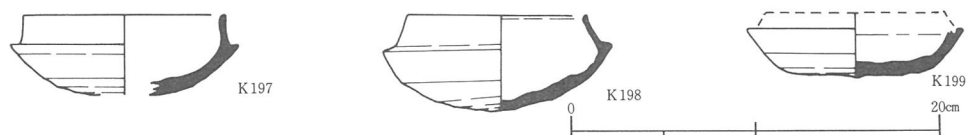
態で見つかった。埋土は3層からなり1層が5 Y R3/6暗赤褐色土、2層が7.5 Y R3/4暗褐色シルト、3層が7.5 Y R5/8明褐色シルトである。古墳時代の溝309-〇S、時期不明の310-〇Sと重複する。遺構の切り合い関係については、平面では捉えることができず、遺物からも時期差は認められない。

遺物は須恵器が多く杯蓋K188・K189、杯身K190~K194、低脚高杯K194の3器種が出土している。他に特筆すべきは土製の当て具が出土していることである。当て具K196は土製円盤につまみを付けた形状で、口径6 cm、器高3.8 cmを計る。円盤部分には同心円文等はなく無文である。共伴する時期の須恵器は甕の内面に同心円の当て具痕を施すのが一般的であるため、この当て具を同時期とするには疑問がある。先行する時期と考えたい。

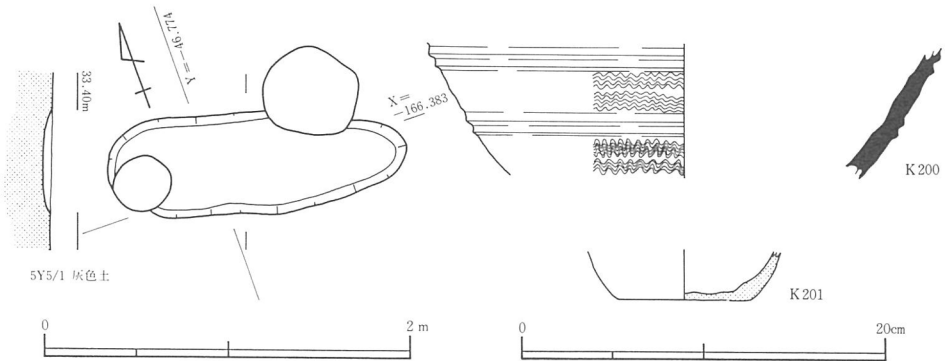
この遺構の時期は須恵器から見てII型式1~2段階と考えられる。

309-〇S (第90・96図、図版40上・89C参照)

K18UFからUGにかけて北東~南西に位置する。検出長は8 m、幅0.8~1.2 m、深さ0.33 mで断面はU字形である。溝底は北東側が3 cm高い。埋土は5 Y R3/6暗赤褐色土である。431-〇〇と重複し、切り合いから309-〇Sが新しい。溝は断面の観察から掘り返しがされているようである。遺物は須恵器、杯身K197・K198・K199の他、甕の破片も出土している。この遺構の時期は須恵器からII型式1~2段階と考えられる。



第96図 309-〇S出土遺物 (1/4)

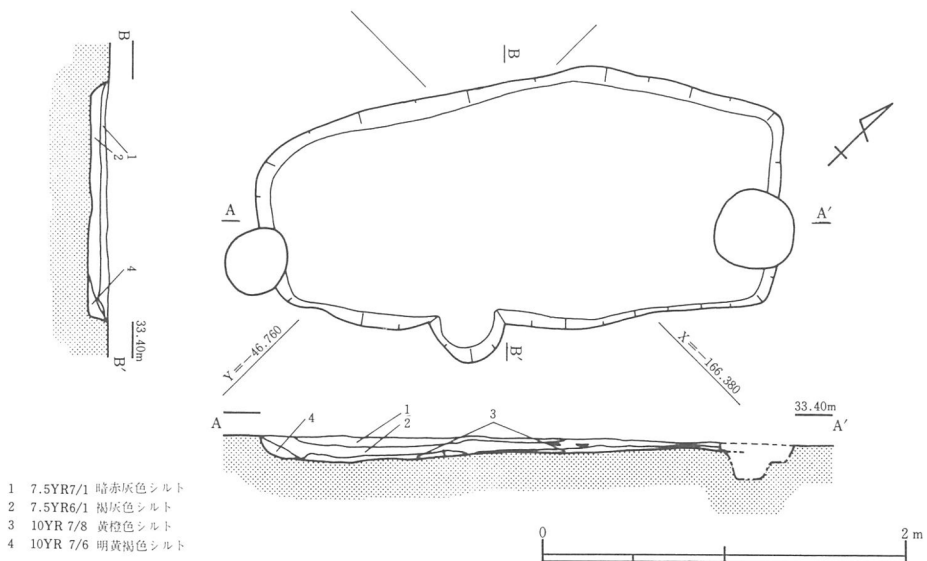


第97図 130-〇〇平面・断面図 (1/40), 出土遺物 (1/4)

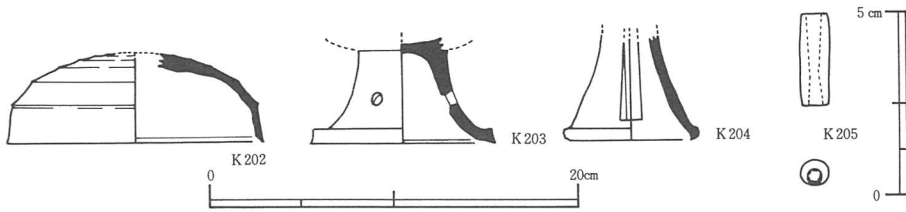
130-〇〇 (第90・97図、図版40下・89D参照)

K18UGに位置する。平面は四隅が丸い長方形で長径1.65m、短径0.6m、断面は浅いU字形で深さは0.1mである。埋土は5Y5/1灰色土である。土坑は古墳時代の掘立柱建物127-OBと重複する。切り合い関係から127-OBが新しい。土坑内からは須恵器の器台K200と韓式系土器の平底鉢K201の破片が2点出土している。器台は体部の破片で2列1単位の凸帯が2段に巡り、細い波状文が同様に巡る。この遺構の時期は須恵器の器台からみてI型式5段階～II型式1段階と考えられる。

248-〇〇 (第90・98・99図参照)



第98図 248-〇〇平面・断面図 (1/40)

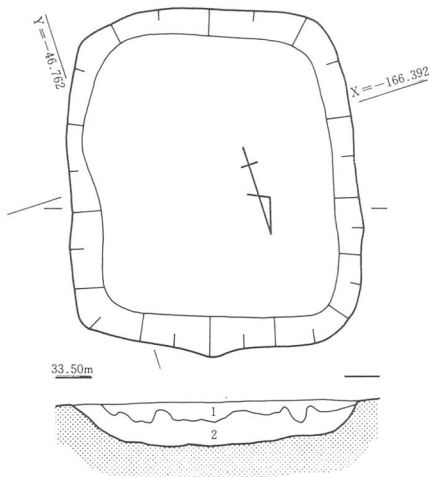


第99図 248-〇〇出土遺物（土器1/4、管玉1/2）

K18U Kに位置する。平面は長方形で長径2.85m、短径1.43m、断面は浅いU字形で深さ0.18m、土坑底の形状は平である。埋土は1層7.5R7/1明赤灰色シルト、2層7.5Y R6/1褐色灰色シルト（マンガン含む）、3層10Y R7/8黄橙色シルト、4層10Y R7/6明黄褐色シルトである。古墳時代II期の掘立柱建物253-〇Bの柱穴（253-〇P）に切られている。従って253-〇Bが新しい。

遺物は須恵器61点、土師器15点の計71点の破片と管玉が1点出土している。器種別に見ると須恵器は混入品とみられる高杯、壺、甕の初期須恵器と、それ以後の杯蓋、杯身、高杯、甕がある。土師器は細片のため器種は特定できない。管玉K205は長さ2.5cm、径0.8cm（孔径0.4cm）、重さ3gで孔は両側から穿孔している。

この遺構の時期は長脚1段の高杯K204が伴うことからII型式1段階と考えられる。



- 1 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト～極細砂(2.5Y5/4 黄褐色シルトのブロックを含む)
- 2 2.5Y6/6 明黄褐色シルト



第100図 910-〇〇平面・断面図（1/40）

910-〇〇（第90・100図参照）

K18W Jに位置する。平面は比較的整った長方形を呈し、長径1.9m、短径1.6m、断面形は台形で、検出面からの深さは約0.25mである。埋土は乾痕等による攪拌が認められるが、大きく2層に分かれる。上層はにぶい黄～灰黄色のシルトないし極細粒砂に黄褐色シルトのブロックを含み、下層は明黄褐色シルトである。

遺物は土師器の破片のみで、年代を限定できるものではない。ただし、埋土の堆積状態が、後述する882-〇〇とまったく同様であることから、古墳時代II期と考えている。

888-〇〇(第90・101・102図、図版41上・88C参照)

K18W L付近に位置する。平面形は歪んだ長方形ないし、楕円形で、長径0.65m、短径0.5mで、断面形は台形、検出した深さは0.3mである。当初、柱穴と考え、柱痕跡を追求して掘り下げたため、埋土を記録していないが、後述の882-〇〇と大きく変わるものではなかった。

遺物は初期須恵器(第102図の甎など)と土師器細片が少々であるが、859-〇B(古墳時代II期)

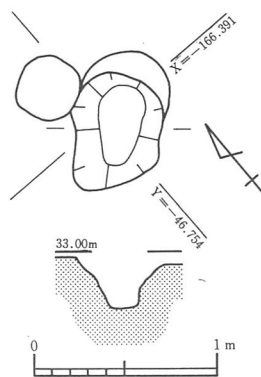
の889-〇Pを切っているので、それほど古くはない。なお890-〇Pとの切り合い関係は明確でない。

882-〇〇(第90・103

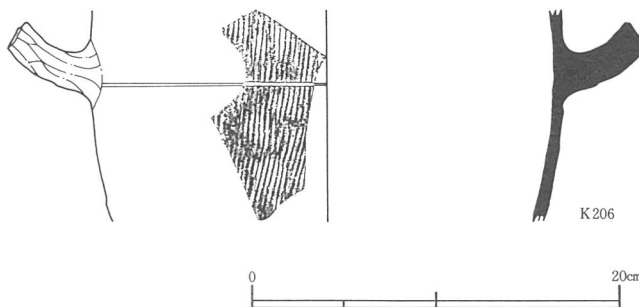
図、図版88C参照)

K18X L付近に位置

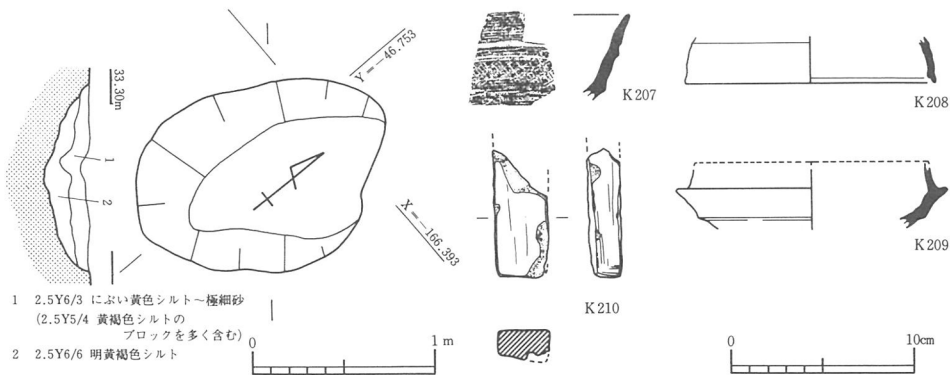
する。削平のため北東部は失われているが、平面形は楕円形であったと思われ、現存長径1.4m、短径1.05m、断面形はU字形で、深さ0.25mである。埋土は2層に分かれ、上層はにぶい黄～灰黄色のシルトないし極細粒砂に黄褐色シルトのブロックを含み、下層は明黄褐色シルトである。上層は人為的に埋積された可能性がある。



第101図 888-〇〇平面・断面図(1/40)

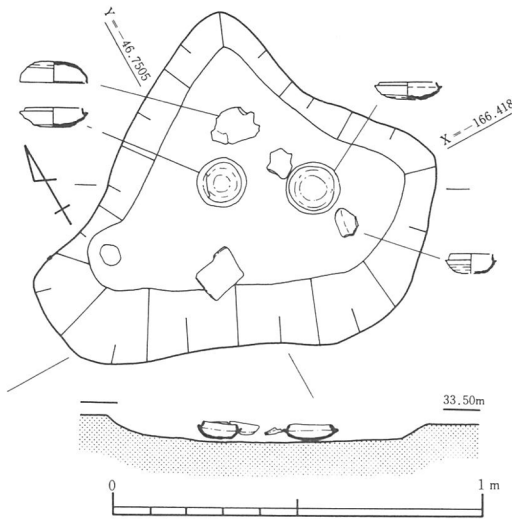


第102図 888-〇〇出土遺物(1/4)



- 1 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト～極細砂
(2.5Y5/4 黄褐色シルトの
ブロックを多く含む)
- 2 2.5Y6/6 明黄褐色シルト

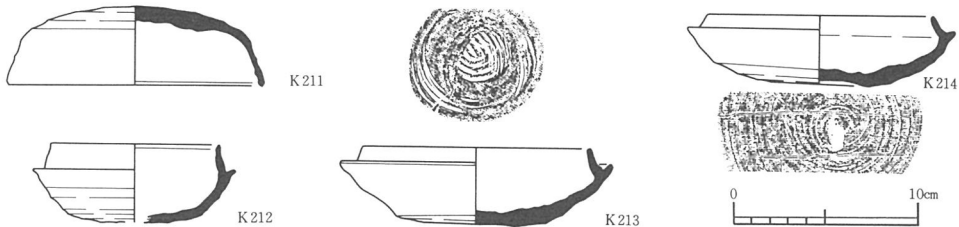
第103図 882-〇〇平面・断面図(1/40), 出土遺物(1/4)



第104図 677-00平面・断面図 (1/20)

出土遺物には砥石、土師器のほか、初期須恵器もあるが、II型式の須恵器を少なからず含んでおり、この遺構の年代は6世紀代であることが知られる。677-00 (第90・104・105図、図版41下・90A参照)

K23EMに位置する。平面形は隅丸の三角形に近い。東西径1.15m、南北径0.95m、断面形は浅い皿状を呈する。深さは0.1m足らずと浅い。埋土はにぶい黄褐色～褐色のシルトで、一部に地山の黄褐色シルトを含んでいた。人為的に埋めた可能性もある。出土遺物



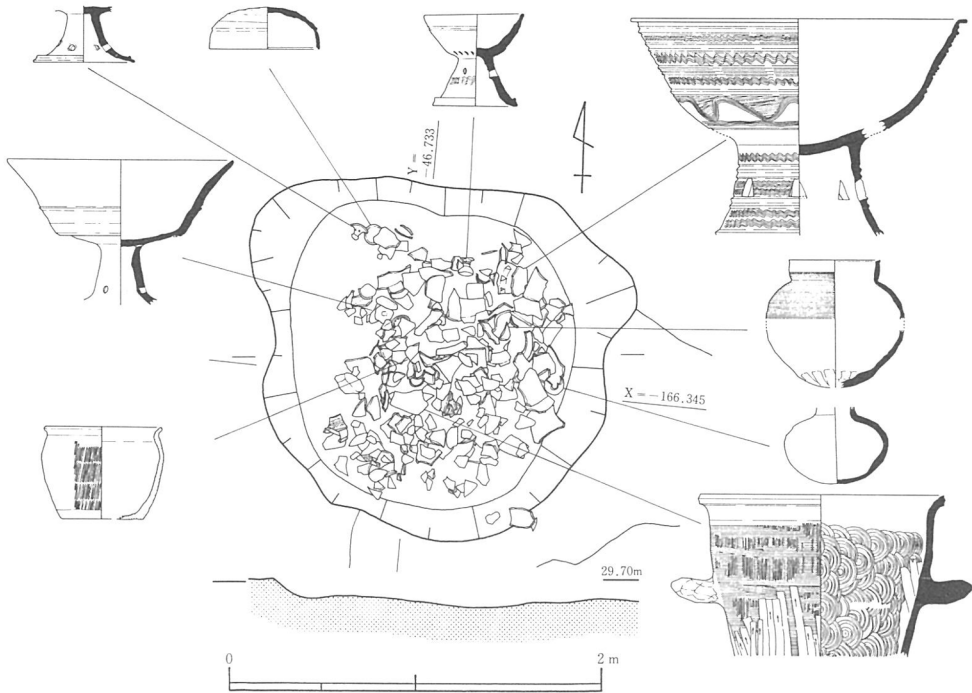
第105図 677-00出土遺物 (1/4)

は須恵器である。K213・214は完形の杯身で口縁部を上にし、据えられたような状態であった。K212も杯身だが、破片であり、K211の蓋は裏返しの状態であった。ほかに須恵器甕の破片も出土している。

これらの土器のうち、K213・214は、ごくわずかに底面から浮いているものもあるが、恐らく意図的に据え置かれたものと思われる。土器内には供献を示す遺物は認められなかった。他は破片で、さらに底面から浮いている。この土坑が人為的に埋められたものなら、その際に混った土器もあるかもしれない。その時期はII型式4段階頃と考えられる。

1158-00 (第90・106~110・135図、図版42・90B~92参照)

K18KQに位置する。平面はやや不定形な楕円形で長径1.93m、短径1.80m、断面は浅い皿状で深さは10cmである。埋土は7.5Y R3/4暗褐色土である。古墳時代の溝540・560-O Sと重複する (135図)。切り合い関係については埋土が酷似するため捉えることができ

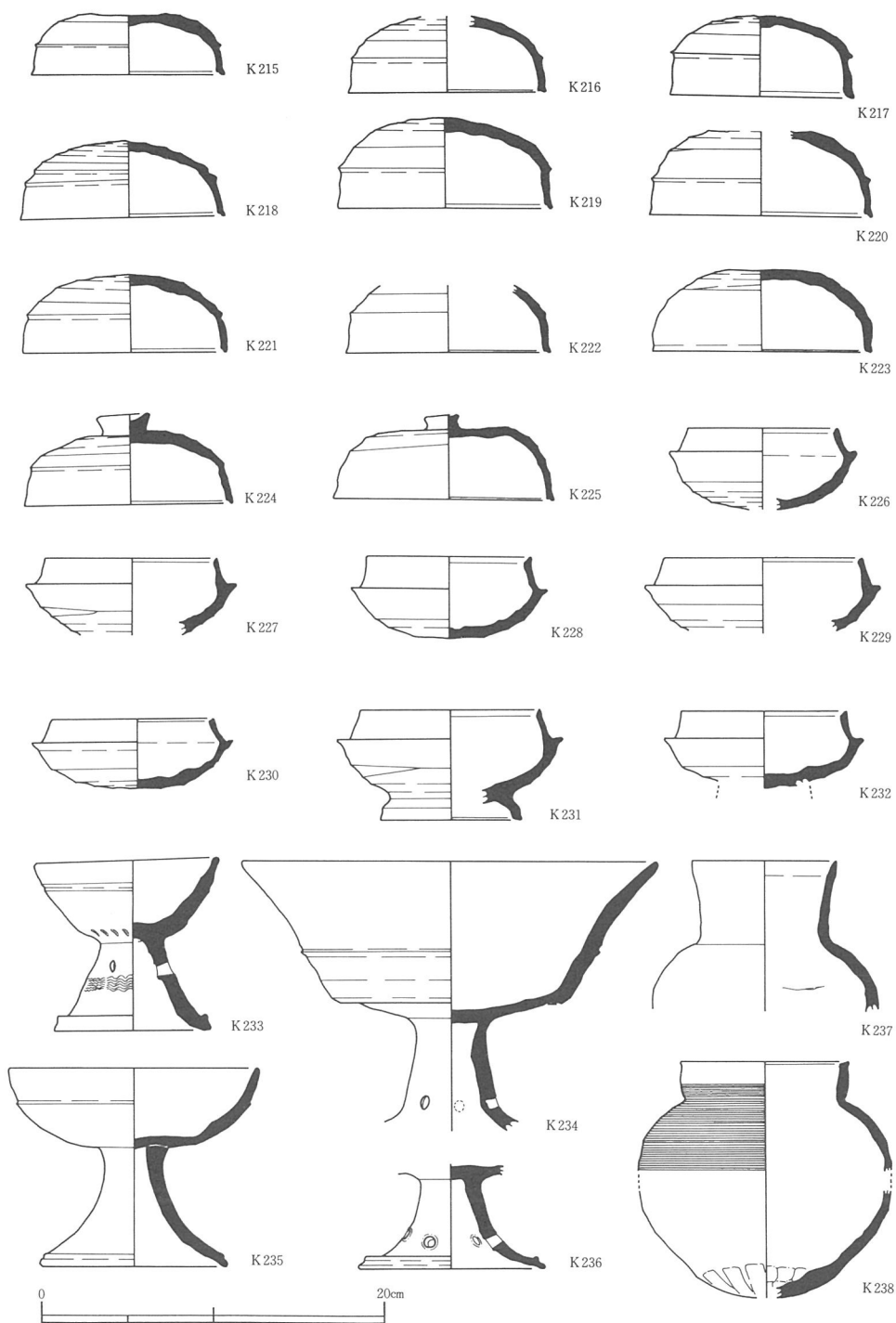


第106図 1158-〇〇遺物出土状態 (1/40)

なかった。土坑からは破片数で見ると須恵器804点、土師器31点、韓式系土器2点、土錘1点の計838点の遺物が出土した。須恵器の占める割合は96.1%にのぼり、そのうち585点は初期須恵器である。新しい時期の遺物は杯蓋、杯身、高杯の蓋、高杯等の小物と甌があり、遺物は新旧混在した状態であった。

須恵器 杯蓋K215～K223は口径が11～13cm、器高は4.5cm前後の法量を持つ。天井部はまるく、稜は僅かに残る程度である。K223の稜は痕跡程度で口径も13cmと大きく、この土坑のなかでは最も新しい時期の遺物である。高杯の蓋K224・K225も杯蓋の多くと同時期とみられる。杯身K226～K228は口径が10cm以内であるが、K229のように11cmを超えるものもある。高杯K232は三方スカシで、低脚高杯K231もある。甌K257は短く外反する口縁部を持ち、体部は平行タタキの調整後、更にケズリによって仕上げられている。内面には同心円文が顕著に残る。土錘K246は長さは不明で径3.6cmを計る。初期須恵器は高杯、直口壺、短頸壺、壺、把手付き椀、甕、甌、器台の8器種が出土している。

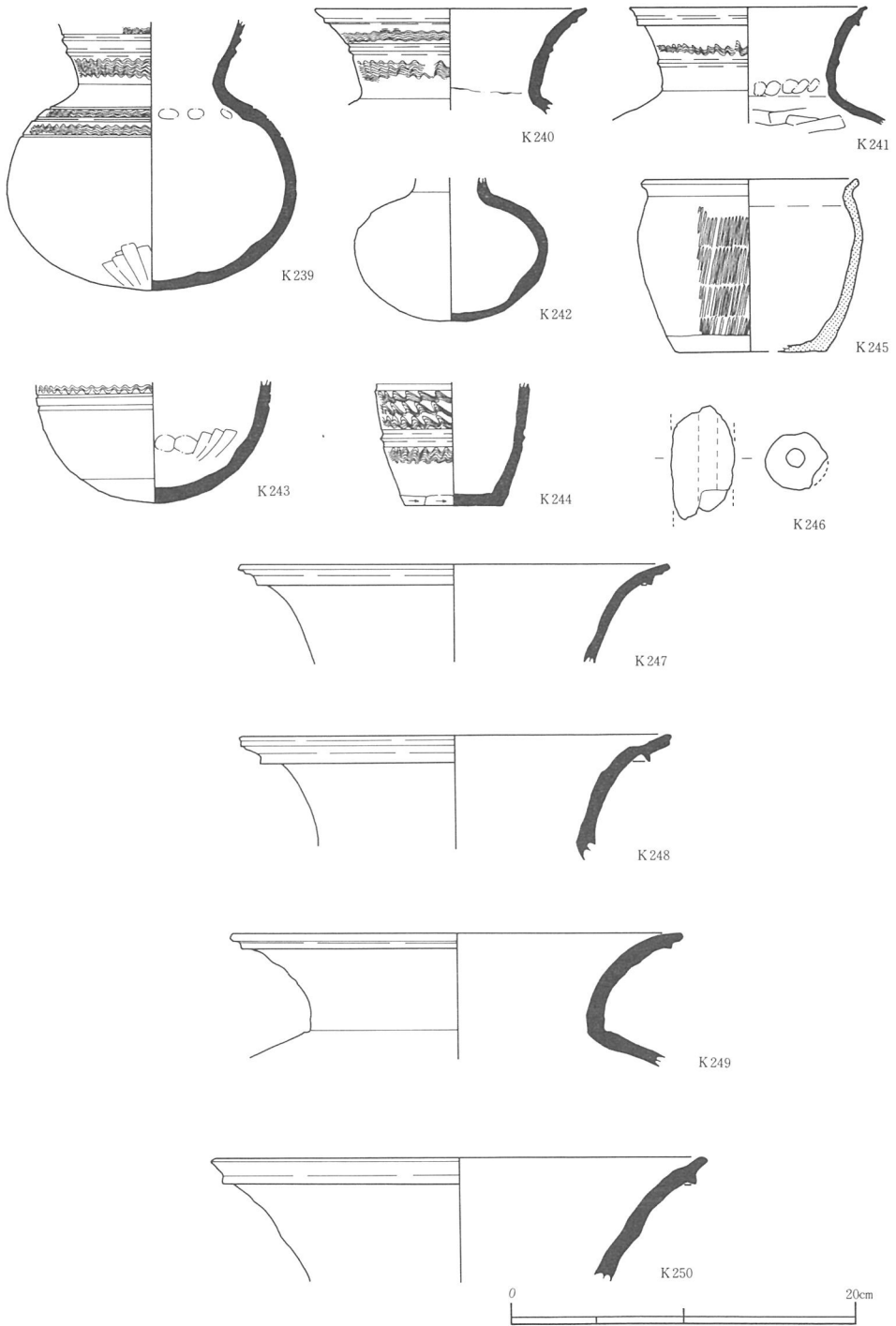
須恵器 高杯K233は口径10.9cm、器高10cmの小型品で、まるい杯部に太い脚部が付く。口縁部と体部の境は太い凹線によって分けられ、体部下半には刺突文が、脚部には5本か



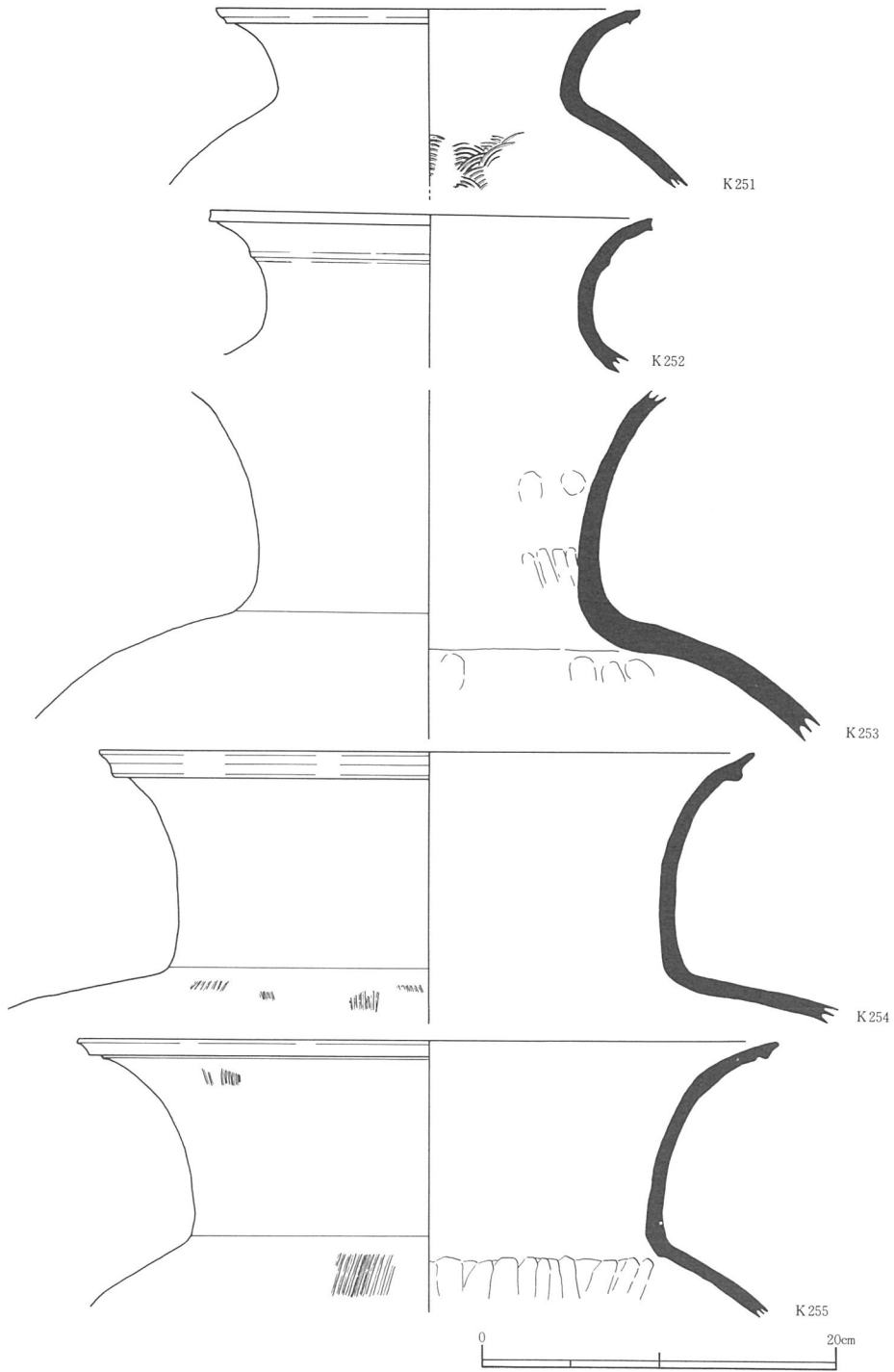
第107図 1158-〇〇出土遺物1 (1/4)

らなる波状文が施文されている。波状文の上位には三方に菱形のスカシが穿たれている。小型品のわりには肉厚である。焼成は硬質で胎土も精良である。同じ形態の高杯は石津川水系の小阪遺跡出土例があるが小阪例は施文、スカシはない。K234は口径24.5cmの大型品である。口縁部には1段の稜があり、稜より下半はヘラケズリで調整している。脚部には三方に円形のスカシを穿つがいずれの孔も貫通はしていない。焼成は硬質で胎土は精良であるが色調は赤褐色である。土師器の模倣形態と考えられる。類例として枚方市茄子作遺跡出土の高杯があげられる。K235は当遺跡の須恵器では一般的な形態であるが、胎土は土師器に近く、焼成はやや軟質で色調は黄橙色である。K236は裾に6個のスカシをもつ高杯の脚である。直口壺は無施文K237と施文されたものK238・K239がある。K239は口頸部の2段の凸帯の上下と、肩部に2段の波状文を施している。底部は静止ヘラケズリで調整されている。焼成は硬質で、胎土も精良である。K243も同様の形態とみられる。小型の壺K243は口頸部がないため詳細は不明である。甕の可能性もある。焼成不良で色調は黄橙色である。把手付碗K244は平な底部と直線的にたちあがる体部に4段の波状文を施文している。下半は静止ヘラケズリで調整されている。口縁部と把手は欠落している。甕は小型、中型、大型がある。小型甕K240・K241は口縁端部と口頸部に凸帯を持つ。K240は凸帯の上下に波状文を施文し、K241は上段に波状文を施文されている。後者の方が凸帯もシャープで器壁も薄い。焼成は共に硬質で胎土も精良である。色調は前者が明褐灰色で後者は暗青灰色、断面は共にセピア色である。中型甕K247～K252はいずれも口縁端部に断面三角形の凸帯がつく。端部は丸いものと面取りされたものがある。甕の内面は半スリケシの同心円文が残るK251の例もあり、やや時期幅が考えられる。大型甕K253～K255も形状では差異はなく、口頸部には僅かに平行タタキの痕跡が残る。器台K258は口径36cmの大型品で、杯部は浅くゆるやかに外反し、口縁端部は外へ屈曲する。脚部は基部が太くハの字に開く。裾部は欠損のため不明。杯部には4段の凸帯が巡り、凸帯間には波状文が施文されている。最下段の凸帯の下には鋸歯文を表現したと見られる施文と直線に近い波状文が施文されている。この鋸歯文はかなり退化した文様として捉えることができよう。類例として陶邑深田遺跡出土の器台の波状文がある。

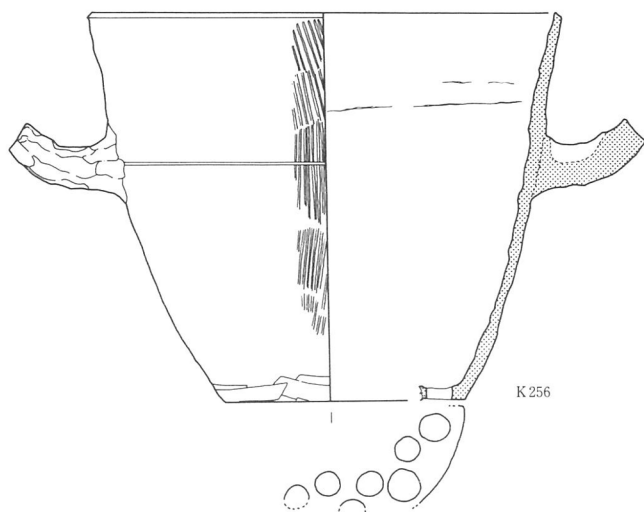
韓式系土器は确实なところでは平底鉢と甗がある。土師器とした中にもかなり含まれていると考えられるが摩耗が著しく判別は困難である。平底鉢K245は口径12.4cm、器高10cmである。体部は平行タタキによって調整されている。焼成は軟質で、胎土は精良、色調はにぶい黄褐色をしている。甗K256は逆ハの字に開く体部を有し、中程よりやや上に棒



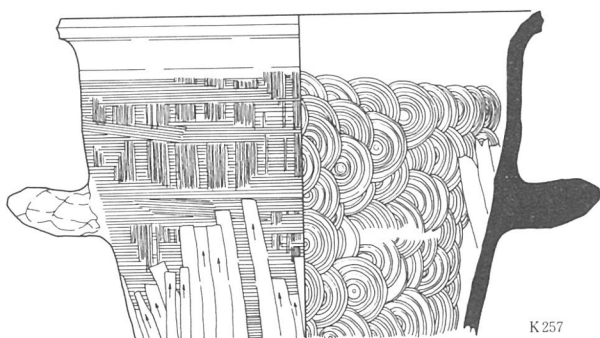
第108图 1158-〇〇出土遺物2 (1/4)



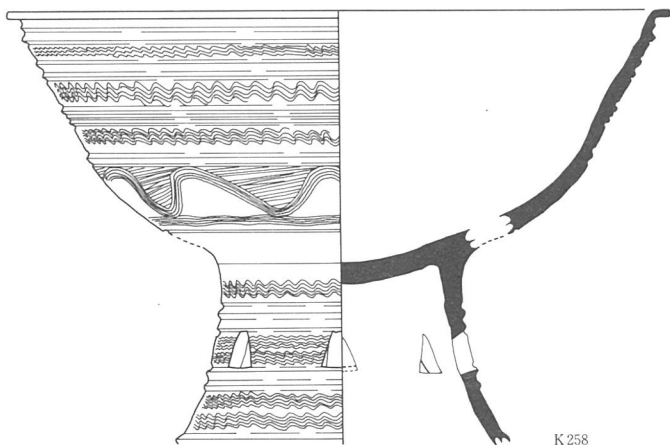
第109図 1158-〇〇出土遺物 3 (1/4)



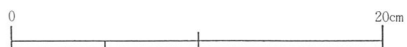
K 256



K 257



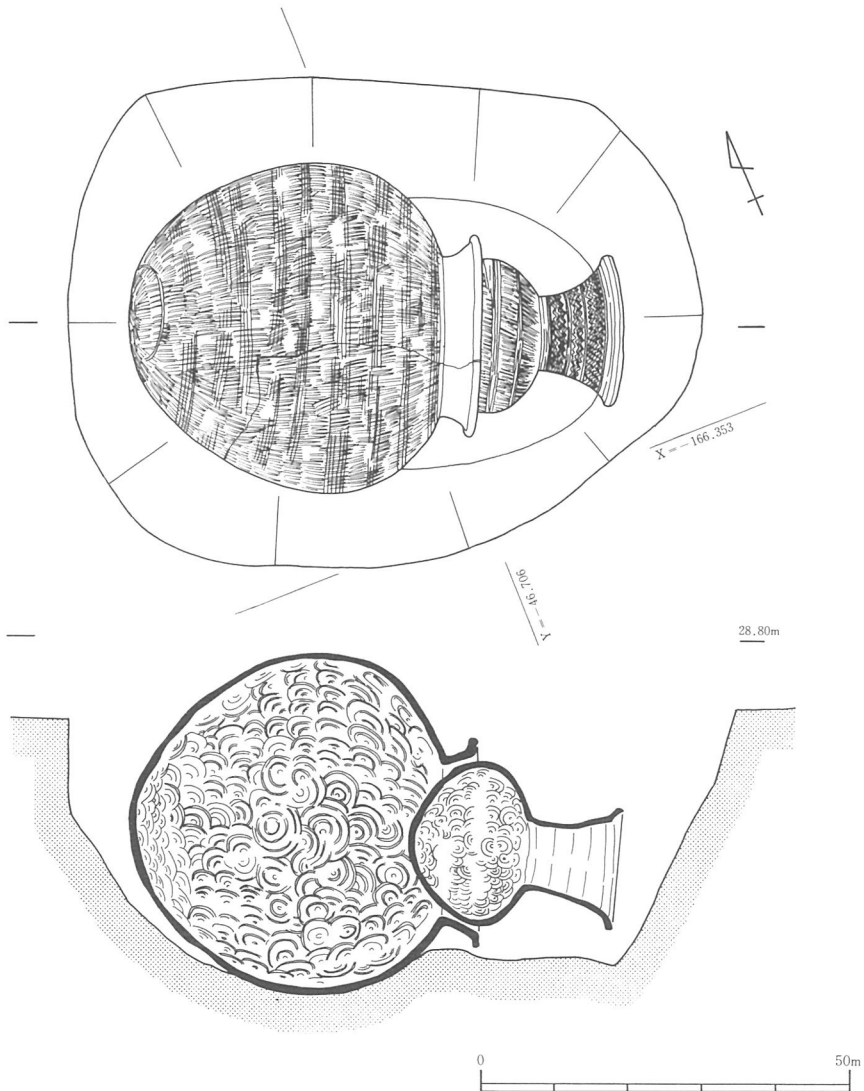
K 258



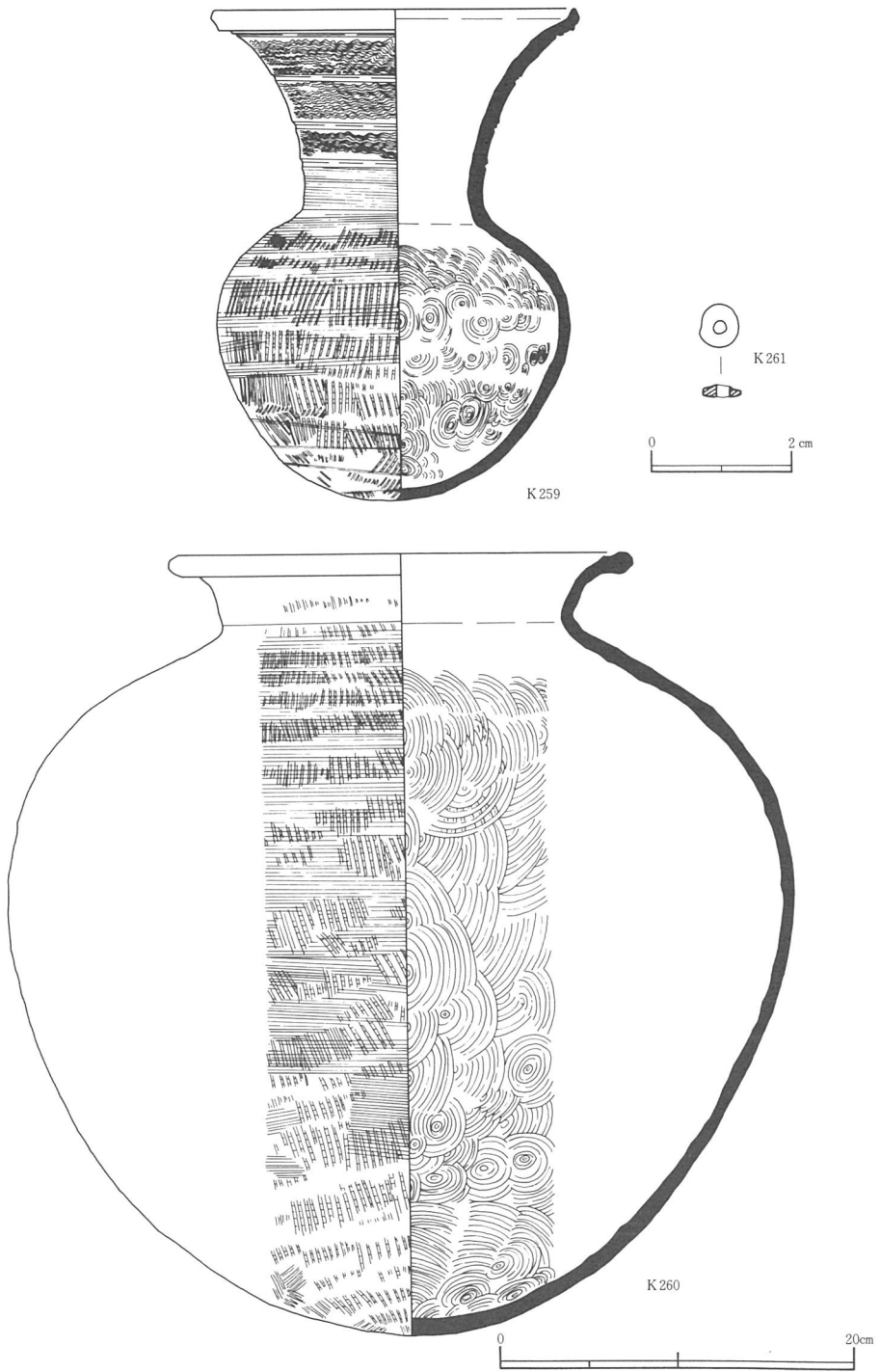
第110図 1158-〇〇出土遺物4 (1/4)

状の把手を付ける。把手には切り込みが認められる。体部は平行タタキによる調整で沈線が巡る。底部は多孔である。

出土した遺物をその接合関係からみると、丘陵上に位置する溝114-OS、土坑241-OO、緩斜面に位置する894-OS出土遺物と接合するものや、同一個体とみられる遺物がある。これは本来、丘陵上の遺構に伴っていた遺物が後世の削平によって丘陵裾部へ掻き落とされた結果とみることができる。この土坑はそれらの遺物を廃棄した場所と考える



第111図 938-OO平面・断面図 (1/10)



第112図 938-〇〇出土遺物（土器1/4，白玉1/1）

のが妥当であろう。この遺構の時期は須恵器から見てII型式2段階前後と考えられる。

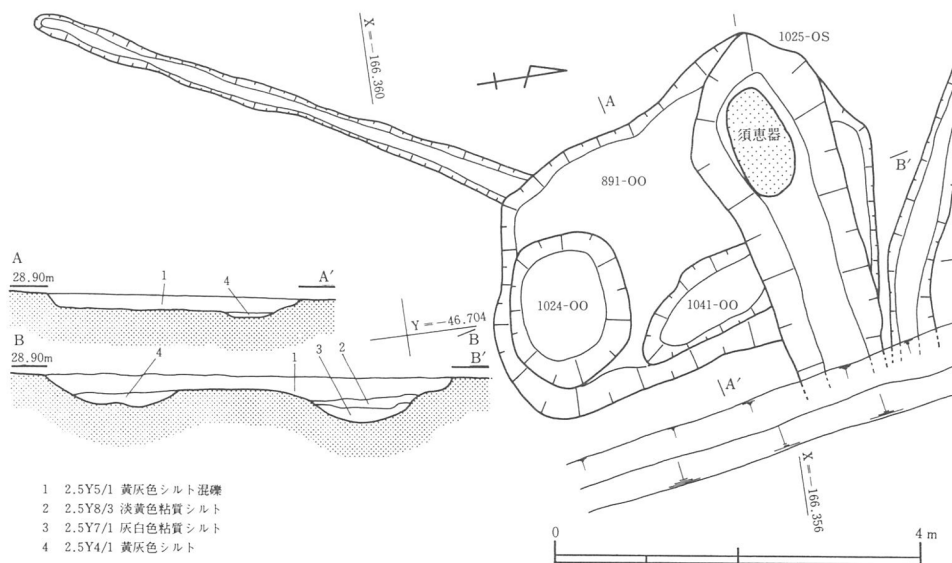
938-00 (第90・111・112・135図、図版43・93参照)

K18MXに位置する。平面は、やや不定形な楕円形で長径0.85m、短径0.66m、断面はほぼU字形で深さは0.45mである。この土壌内には完形の須恵器の中型甕と壺が納められていた。甕は横たえられ、その口縁部を壺底で塞ぐようにして出土した。埋土は2.5Y6/1黄灰色シルトに地山土である2.5Y7/3浅黄色シルトでブロック状に混入していた。甕の内部にも2.5Y6/3にぶい黄色粘土が入っており、フルイをかけ水洗を行ったが骨などは確認できず唯一白玉1点が出土した。この土壌は560-OSが埋まった後掘られている。埋土の状況から、掘られた後すぐ土器が納められ、埋め戻されたようである。

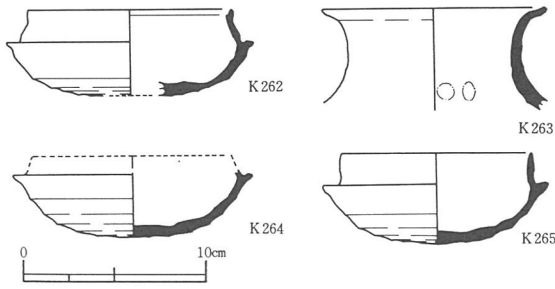
出土遺物は、須恵器の壺K259、甕K260、滑石製の白玉K261(重量0.1g)がある。甕の外側は平行タタキの後、カキメが施され、内側は同心円状に当て具の跡が残っている。壺は口縁部から頸部にかけて3段に波状文が施され、胴部の調整は前記の甕と同様の調整がなされている。この遺構の時期は、壺、甕の型式からII型式3～4段階頃であろう。

891・1024・1041-00、1025-OS (第90・113～115・135図、図版44・94A参照)

K18OYを中心に位置する。891-00の平面は不整形な長方形で長径4.2m、短径2.8m、断面は浅い皿状を呈し深さは14cmである。埋土は2.5Y5/1黄灰色シルト混雑土である。重複する遺構の中で切り合い関係から最も新しい。遺物は須恵器の杯身K262・K264と甕



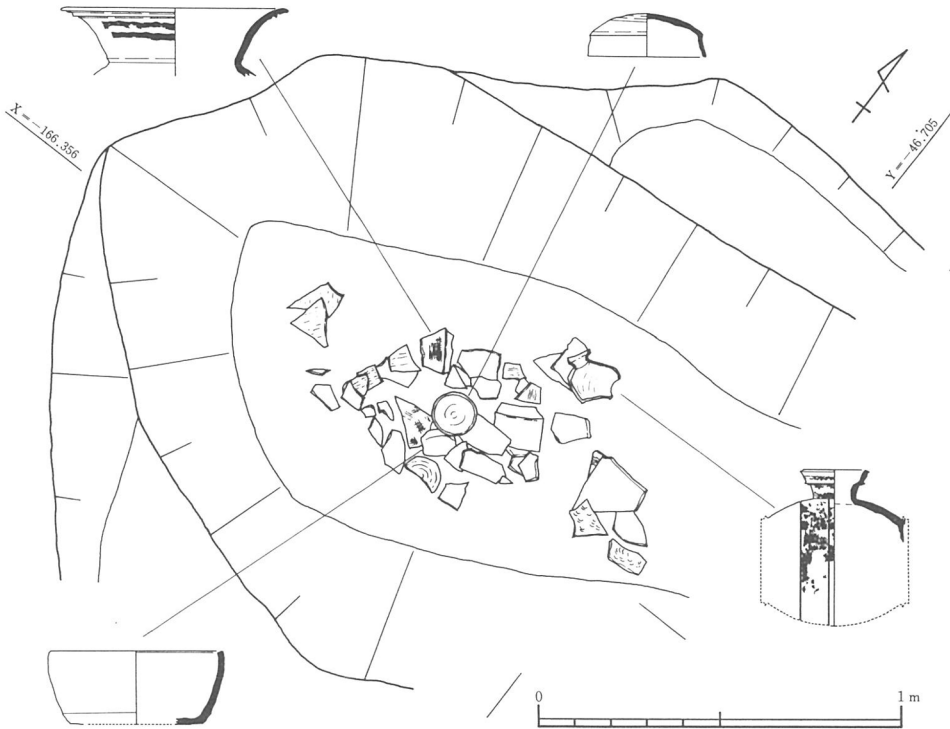
第113図 891・1024・1041-00、1025-OS平面・断面図 (1/80)



第114図 891・1041-〇〇出土遺物 (1/4)

K263が出土している。甕は混入とみられる。杯身からみてこの遺構の時期はI型式5段階～II型式1段階と考えられる。

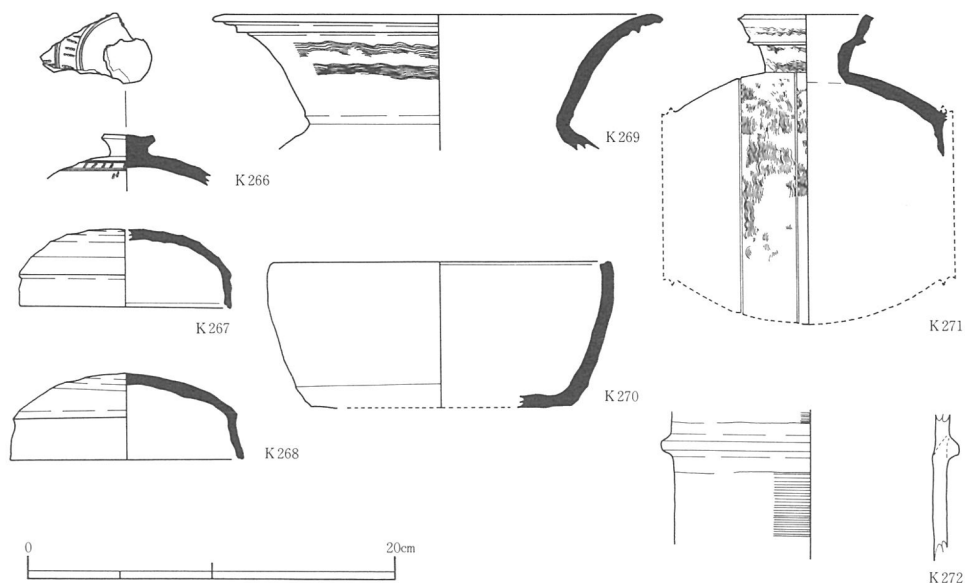
1024-〇〇は1.6×1.3mの楕円形で深さは0.16mで、埋土は2.5Y4/1黄灰色シルトである。遺物は出土し



第115図 1025-〇〇S遺物出土状態 (1/20)

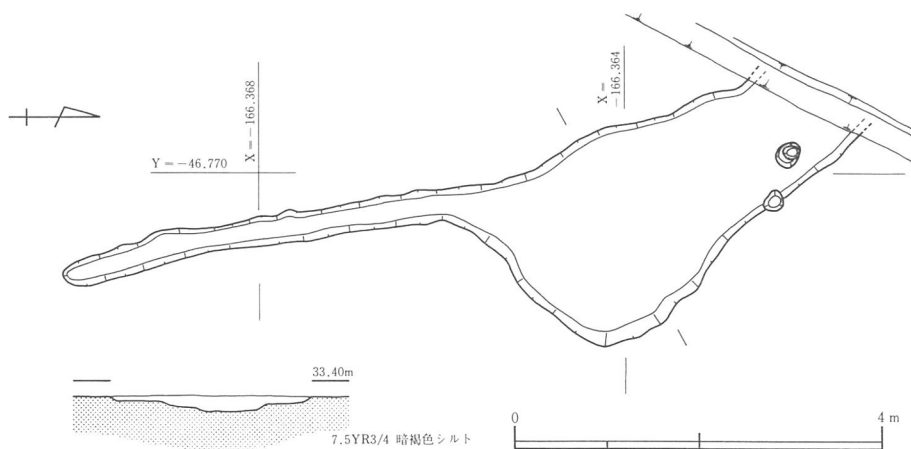
ていない。

1041-〇〇は1025-〇〇Sとも重複する。遺物は須恵器の杯身K265が出土している。遺構の時期はI型式5段階頃と見られる。1025-〇〇Sは検出長は3.8m、幅1.4～1.58m、断面はU字形で深さは0.24mある。溝は更に調査区外へと延びる。埋土は2層からなり上層が2.5Y8/3淡黄色粘質シルト、下層が2.5Y7/1灰白色粘質シルトである。この遺構からは須恵器が1箇所にとまって出土した。器種は高杯の蓋K266、杯蓋K267・K268、甕K269、鉢K270、樽形甕K271、円筒埴輪片K272が出土した。杯蓋以外の須恵器はいずれも



第116図 1025-O S出土遺物 (1/4)

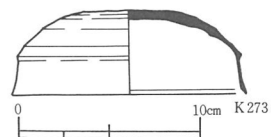
初期須恵器で混入と見られる。この遺構の時期は遺物からII型式1段階頃と考えられる。これらの重複する遺構は遺物から見た場合、僅かに時間差が認められるが、埋土はほぼ同じであることも考え合わせるとほぼ同時期とみても差しつかえないであろう。



第117図 116-O S平面・断面図 (1/80)

116-O S (第90・117・118図、図版94B参照)

K18PHからQHにかけて北西～南東に位置する。検出長は8.7m、幅0.30～2.18m、深さ0.16mで断面は浅いU



字形である。溝は調査区外の濃登ノ池の方へと延びる。溝 第118図 116-O S出土遺物(1/4)

の幅が大きく違うのは、削平によって深い部分だけが残ったためとみられる。溝底の高低差はない。埋土は7.5Y R3/4暗褐色シルトの単一層である。

出土遺物は須恵器が破片数を入れて34点出土している。器種は蓋、甕、杯身の3種がある。初期須恵器（蓋、甕）も出土しているが、第118図の杯蓋K273がこの溝の時期を決める遺物である。丸い天井部を持ち、稜はさほど顕著でない。この遺構の時期は須恵器から見てI型式5～II型式1段階と考えられる。

114-O S（第90・119～122図、図版46上・94C・95A参照）

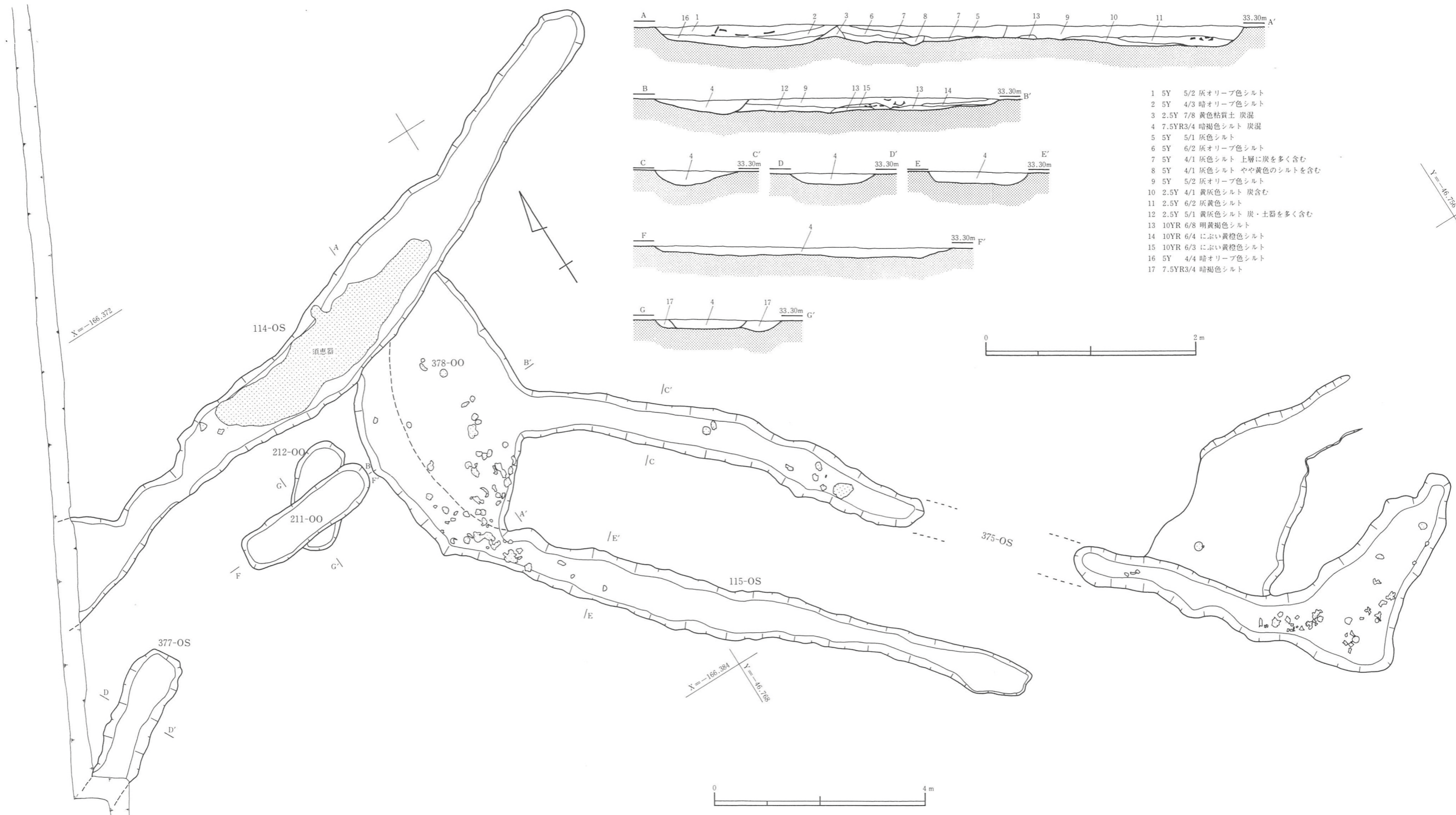
K18 S F～R Iにかけて南西～北東に位置する。この溝の方向は古墳時代の溝309-O Sと平行に走り、調査区外へと延びる。57-O Sとは直交する位置関係にある。検出長は15.2m、幅1.15～1.75mで断面はU字形である。溝底は北東側がやや高い。埋土は3層からなり、上から順に5 Y5/2灰オリーブ色シルト、5 Y4/3暗オリーブ色シルト、5 Y4/4暗オリーブ色シルトである。

溝は古墳時代II期の土坑378-O Oと掘立柱建物150-O Bの柱穴432-O Pや掘立柱建物201-O Bの柱穴383-O Pと重複する。378-O Oとの切り合い関係は114-O Sが新しい。掘立柱建物150-O B、201-O Bとの関係についても114-O Sが新しい。溝の中からは多量の遺物が検出された。遺物の多くは破片の状態出土し、その総数は1880点にのぼる。内訳は須恵器が1474点（初期須恵器1065点）、土師器37点、韓式系土器249点、その他土錘1点、窯体破片1点、不明118点である。

出土遺物の傾向として初期須恵器と韓式系土器が圧倒的に多い。第121・122図に示した遺物のうち、初期須恵器は蓋K274、甕K284・K285、高杯K287小型壺K286、杯身K289である。それ以降の須恵器は杯蓋K275・K276、杯身K279～K283、有蓋高杯の蓋K278、甕K288、鉢K290、器台K291、甕K292、甕K294～K296がある。最も新しい遺物から見た場合、この遺構の時期はI型式5段階～II型式1段階の範疇で考えられる。

378-O O（第90・119・123・124図、図版45上・46下・95B・96B・97A参照）

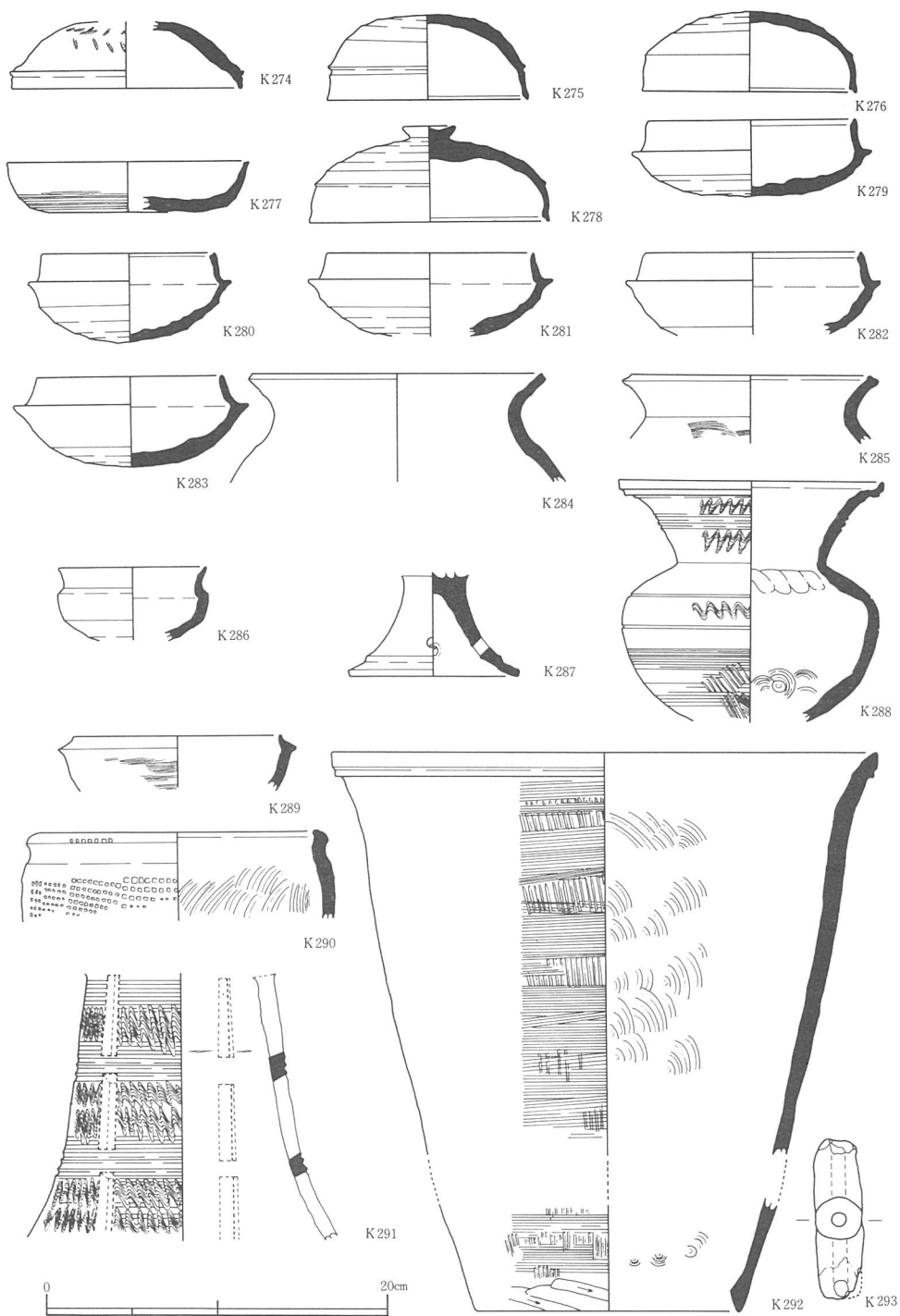
K18 S H～T Hにかけて位置する。平面は不定形で長径3.4m以上、短径2.3m以上、断面は浅いU字形で深さは0.3mである。底の形状はほぼ平で、埋土は概ね5 Y5/2オリーブ色シルトである。古墳時代の溝114-O S、375-O S、115-O Sと重複する。平面では埋土が酷似するため切り合い関係を把握できなかったが断面の観察から114-O Sは378-O Oより新しく、115-O Sも同様に新しいことが判明した。375-O Sについては把握することができなかった。この土坑からは総数139点（破片含む）の土器が出土し、そのう



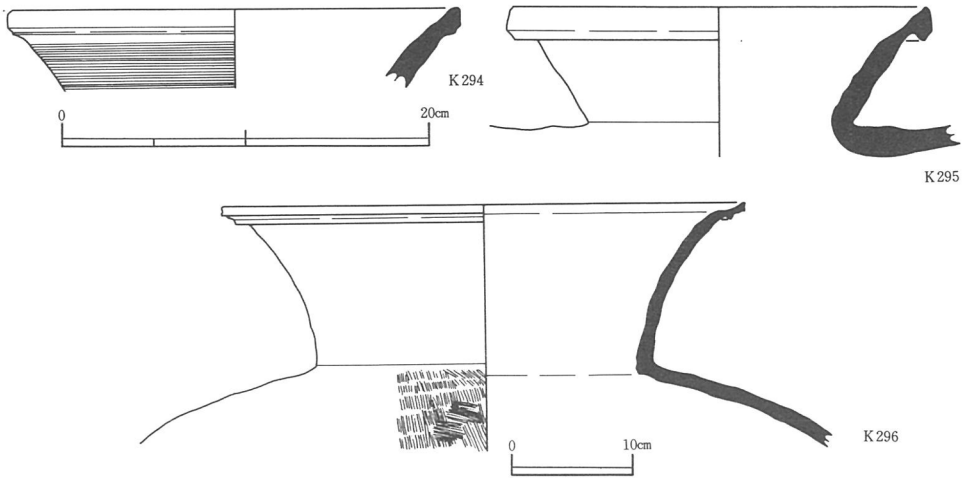
第119図 114・115・375・377-OS, 211・212・378-OO平面(1/80)・断面(1/40)図



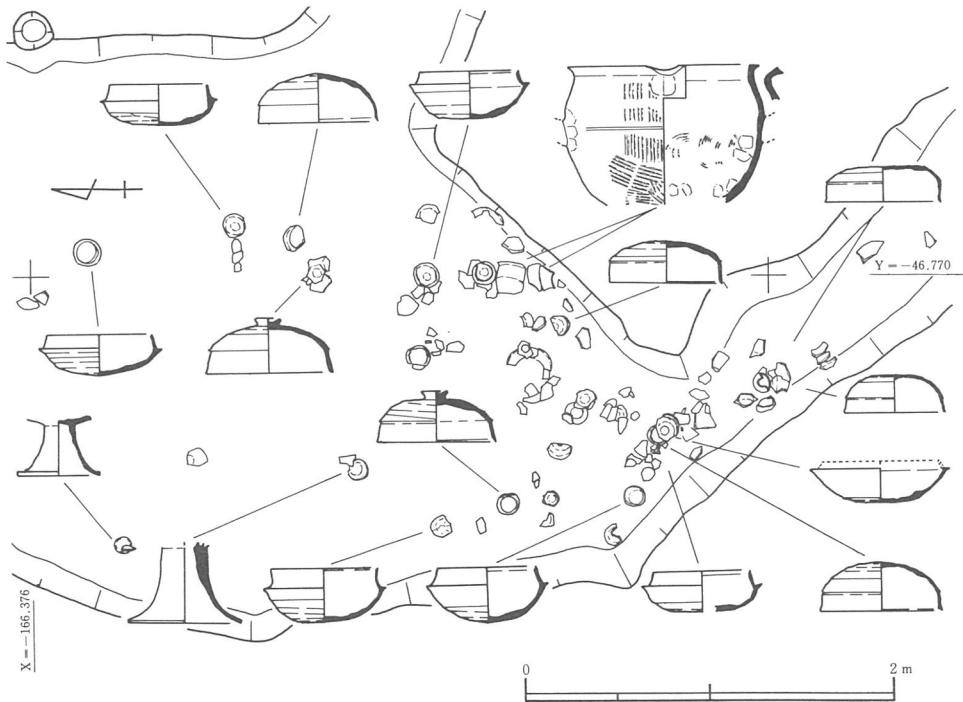
第120図 114-O S遺物出土状態 (1/30)



第121図 114-O S出土遺物1 (1/4)

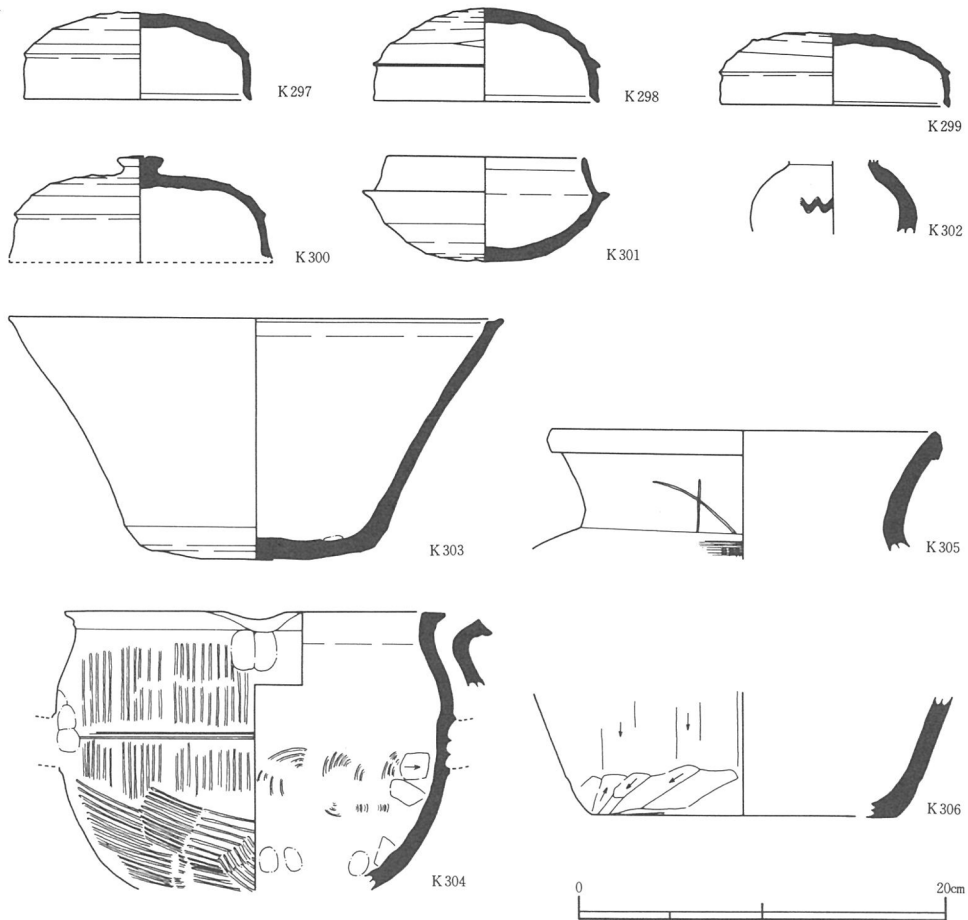


第122図 114-O S出土遺物2 (1/4, 1/6)



第123図 378-O O遺物出土状態 (1/40)

ち須恵器が138点、土師器が1点である。須恵器は初期須恵器を含み、杯蓋・高杯・甕・器台・甕・鍋・甌・鉢がある。しかし、平面でプランを確認できなかったため、115-O Sと378-O Sの遺物を含んでいる可能性が高い。第124図に示した遺物は古い遺物を含む

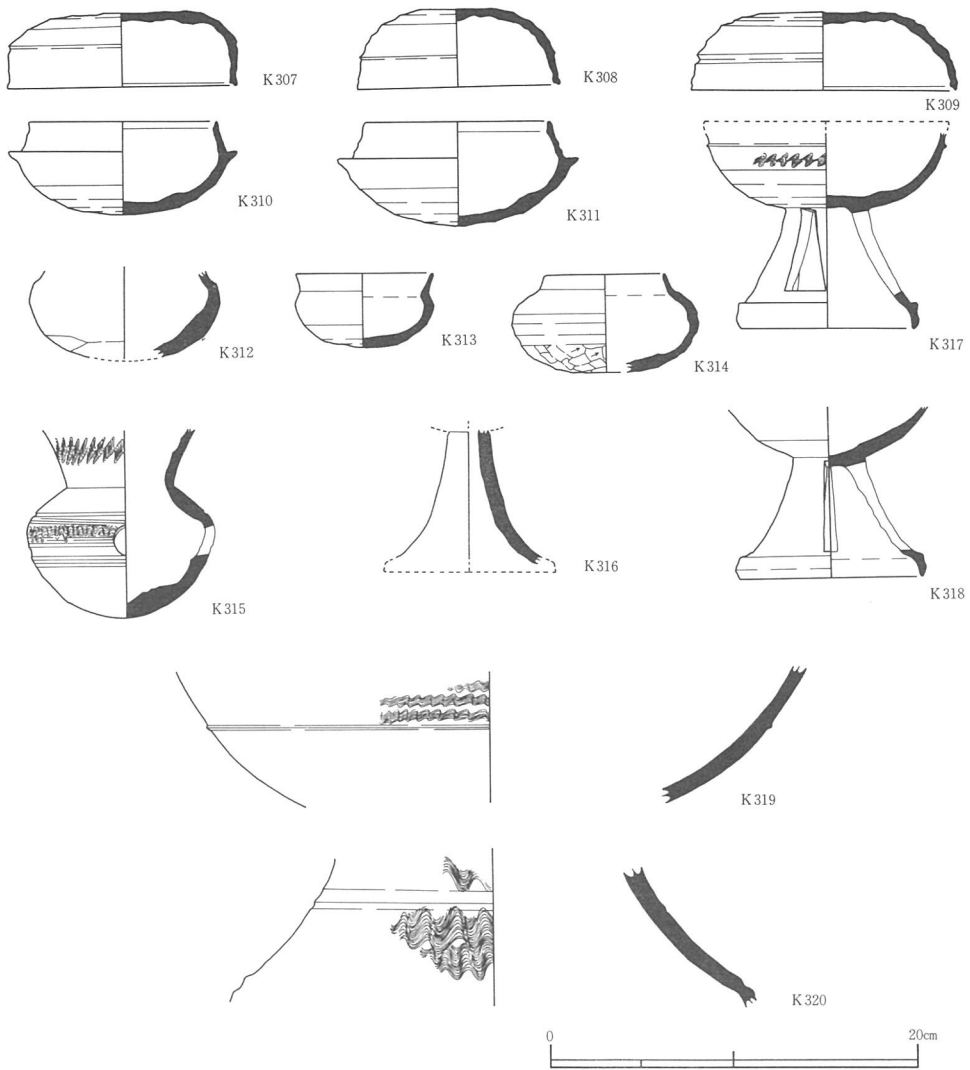


第124図 378-O O出土遺物 (1/4)

が確実に当遺構出土のものを抽出した。蓋K297～K299は口径12.5cm前後、器高4～5cmの法量を持ち、杯身K301は口径11cm、器高5.7cmの法量を持ち、有蓋高杯の蓋K300は口径約14cm、器高約6cmの法量を持つ。K302は甕とみられる。鉢K303、甕K306は初期須恵器と見られ、鉢K303の焼成は瓦質に近い。甕は須恵質である。甕K305は頸部に×印のヘラ記号を持つ。鍋K304は片口で平行タタキの調整による。把手は欠落している。第125図に示したものは115-O Sの可能性が高い遺物である。この遺構の時期はI型式5段階～II型式1段階と考えられる。

115-O S (第90・119・125図、図版45上・96A・97A参照)

K18SH～VJにかけて北西～南東方向に位置する。K18TH付近で僅かに湾曲し、部分的に古墳時代の溝375-O Sと平行する。検出長は15.2m、幅0.6～0.9m、深さ0.28m

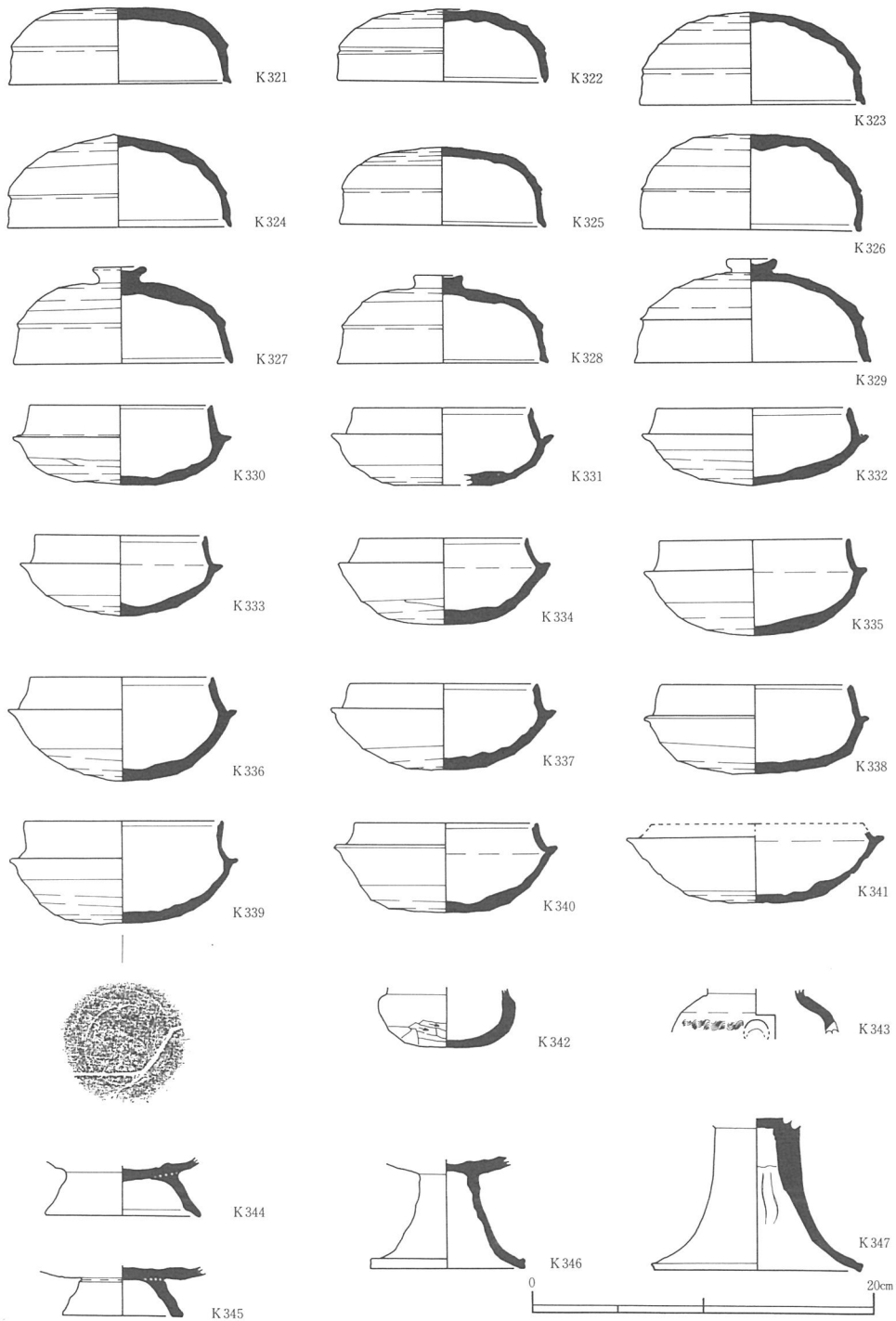


第125図 115-O S出土遺物 (1/4)

で断面はU字形である。溝底のレベルは南東側が0.32m高く、削平によって溝は消滅している。埋土は7.5Y R3/4暗褐色シルト（炭混り）である。古墳時代の掘立柱建物127-O Bの柱穴433-O P、434-O Pと重複する。切り合い関係は溝の方が新しい。更に古墳時代の溝114-O Sとも重複する。切り合い関係は114-O Sの方が新しい。

遺物は378-O O寄りから多く出土し、溝の底からは遊離した状態で検出された。南東寄りには遺物の出土量も少ない。出土総破片数は561点で須恵器473点、土師器87点である。

須恵器は高杯、短頸壺、甕、甑、把手付碗等の初期須恵器を含み、それ以後の須恵器は

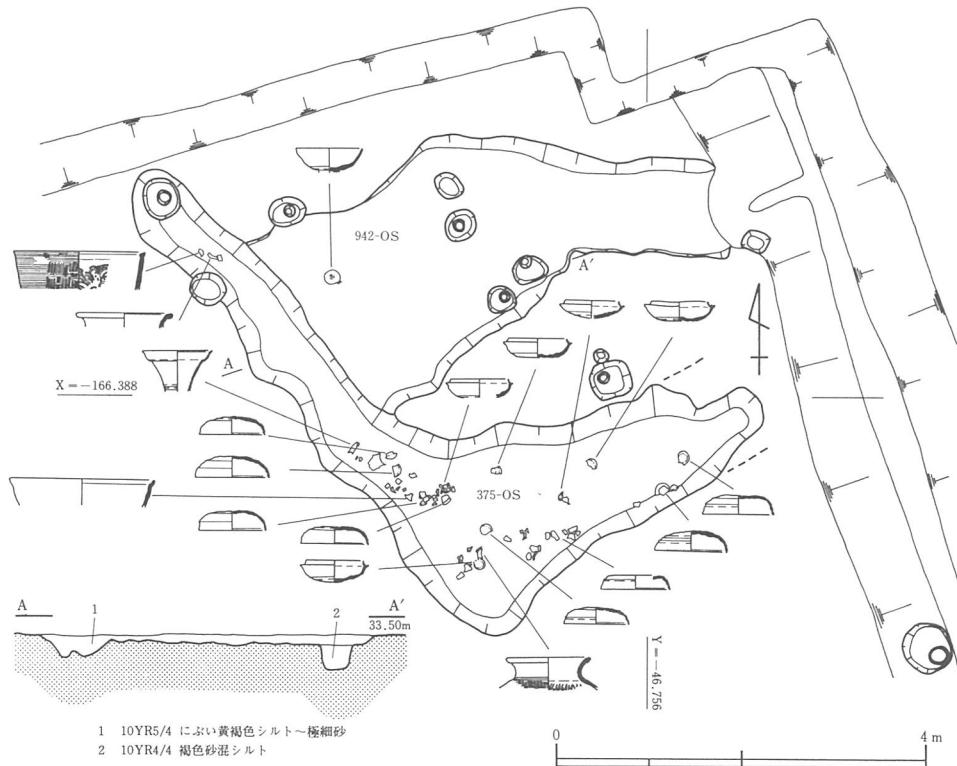


第126图 115-OS, 378-OO出土遺物 (1/4)

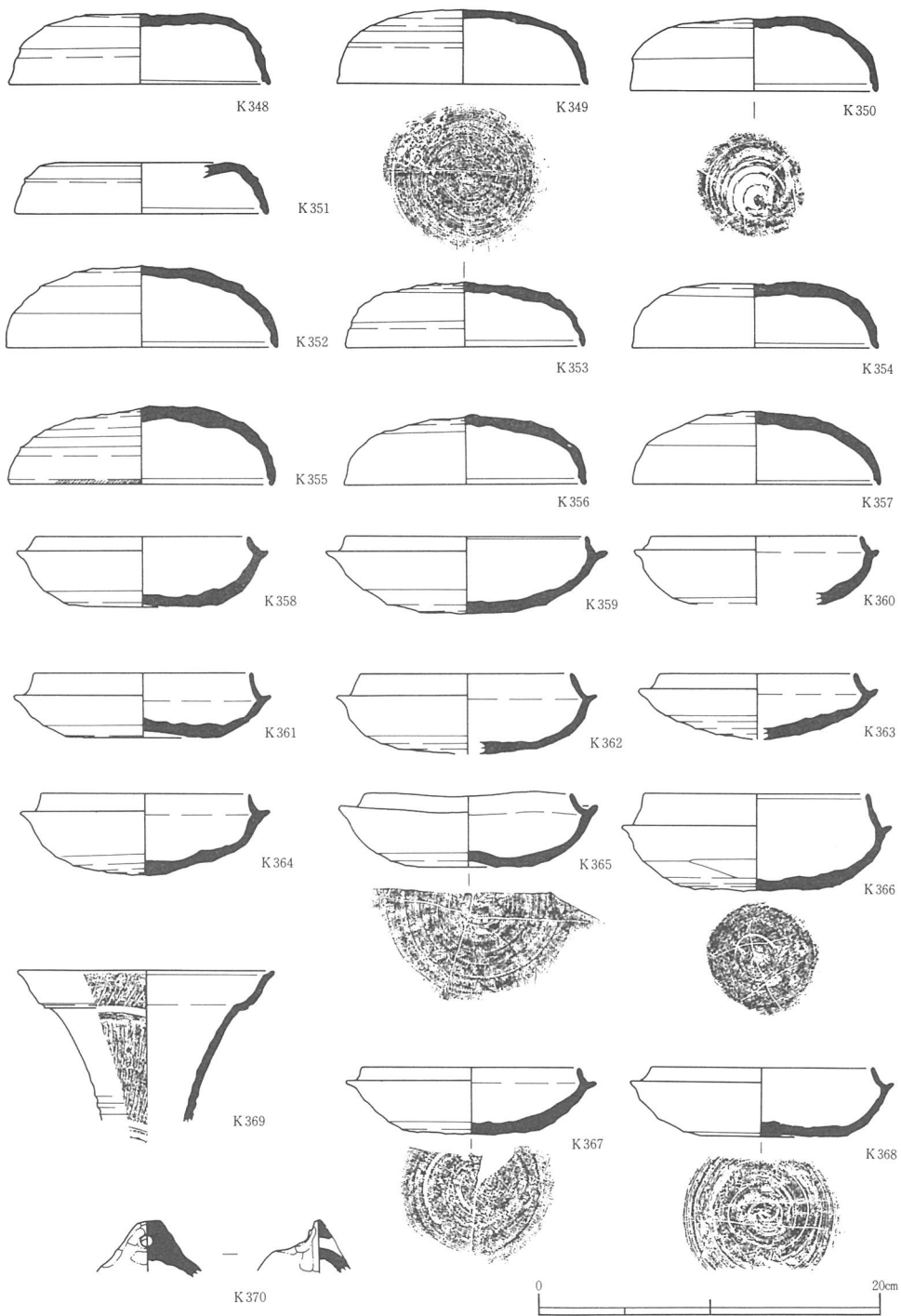
杯蓋、高杯、壺、甕、甃、器台の7器種がある。蓋K307～K309は口径が11～14.5cm、器高が4cm前後の法量を持つ。杯身K310・K311は口径が10cm、器高が5～5.5cmの法量を持つ。小型壺K313、短頸壺K314は初期須恵器の範疇にはいるもので、K313は土師器の小型丸底土器の模倣形態とみられる。高杯は短脚の1段スカシの無蓋高杯K317がある。甃K315は体部、頸部に波状文を施文し、体部中位に大きな円孔を持つ。器台K319・K320は杯部、脚部ともに波状文を持ち、同一個体と見られる。蓋と身から見た場合、やや時間差があるようにみられるが、この遺構の時期は378-00とさほど変わらないI型式5～II型式1段階前後と考えられる。

375・942-OS (第90・119・127～130図、図版45・47上・97B～99A参照)

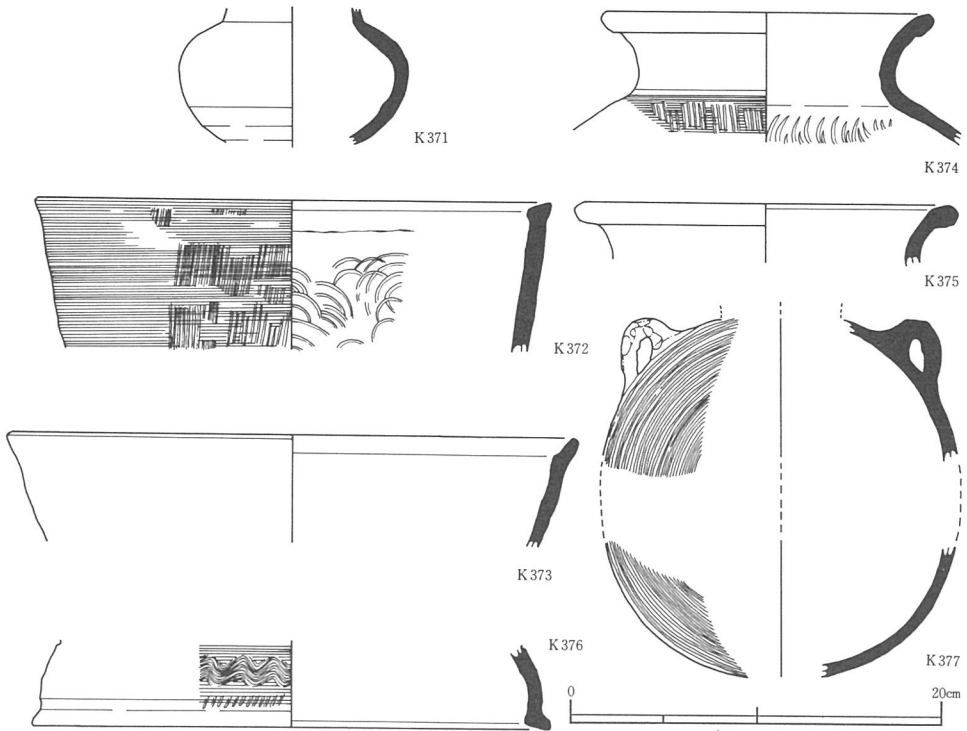
K18TH～K18WLにかけて南東～北西方向に位置する。この溝はK18UJでいったん途切れるがI区Bで再び3m離れたK18VJ付近で始まり(941-OS)、K18WK付近で東へ屈曲する。942-OSは375-OSの延長線上に位置する土坑211-00、溝377-OSは方向性、埋土等から一連の遺構と考えられる。この現象は削平によって深い部分だけが



第127図 375・942-OS平面・断面図 (1/80)

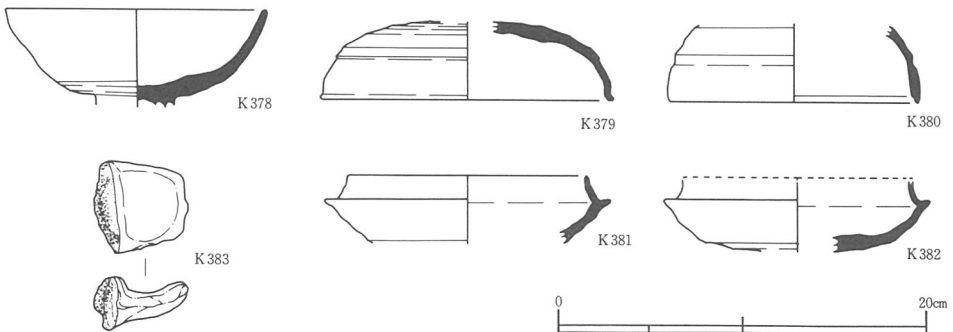


第128图 375-O S出土遺物1 (1/4)

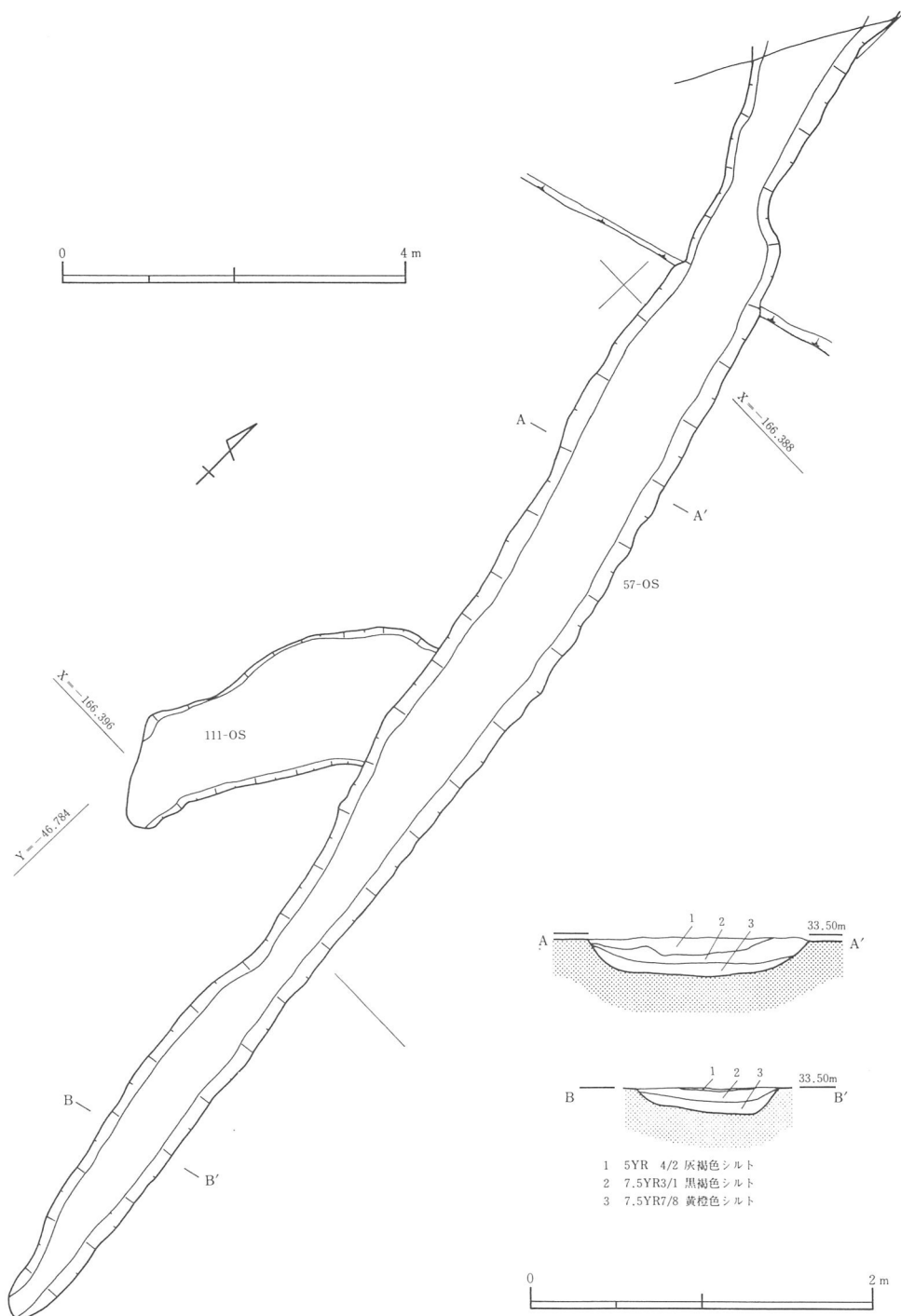


第129図 375-O S 出土遺物 2 (1/4)

残された結果とみられる。検出長はそれらの遺構を含めると30mに及ぶ。幅は0.60~0.75 mであるが屈曲部は1.75mと広い。深さは最大0.15mで断面はU字形である。溝底は南東側が14cm高い。埋土は暗褐色シルトである。古墳時代II期の掘立柱建物230-O Oの柱穴382、384、385-O Pと重複し、更に掘立柱建物253-O Bの948-O Pと重複する。切り合い関係はいずれも溝の方が新しい。遺物は115-O Sとは異なり、南側から多く検出された。遺物は須恵器、土師器が出土しているが須恵器が圧倒的で、杯蓋、甕、飯蛸壺、短



第130図 942-O S 出土遺物 (1/4)



第131図 57-O S平面 (1/80) ・断面 (1/40) 図